

世良田環濠集落遺跡
(3)

世良田環濠集落遺跡(3)

(主)大間々世良田線(世良田工区)社会資本総合整備(防災・安全)
(交安・重点)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



（主）大間々世良田線（世良田工区）社会資本総合整備（防災・安全）
（交安・重点）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇二二年一月

群馬県太田土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

2022

世良田環濠集落遺跡（3）

(主)大間々世良田線(世良田工区)社会資本総合整備(防災・安全)
(交安・重点)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022

群馬県太田土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

上野国新田郡の全域および勢多郡、佐位郡、武藏国榛沢郡の一部に至る広大な新田莊は、東国を代表する中世莊園として歴史上名高く、平成12年には、新田莊遺跡群の構成要素のうちの11箇所が国の史跡に指定され、改めてその歴史的価値の高さが認識されました。また、近世には徳川將軍家が、新田氏一門の得川氏の末裔を称したため、世良田は徳川氏発祥の地として、江戸幕府によって手厚く庇護されたことも良く知られるところです。

このように歴史的に高い意義を有する地域に位置し、周囲を堀で囲まれた中世環濠集落の形態を遺す遺跡として知られる本遺跡の一部が、世良田交差点改良工事の対象地になったため、工事に先立って平成25年度、26年度、28年度に当事業団によって発掘調査されました。

当事業団では、平成25年度と26年度に行われた発掘調査の成果につきまして、すでに2冊の発掘調査報告書を刊行しており、このたび、平成28年度に行われた世良田交差点の東端と南端における発掘調査の成果をまとめた発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。平成28年度に実施した調査では、近世の溝、井戸、土坑などの遺構が検出され、中近世の土器・陶磁器が数多く出土しました。

発掘調査から報告書の刊行に至るまでは、群馬県県土整備部、群馬県太田土木事務所、群馬県地域創生部、群馬県教育委員会、太田市教育委員会、地元関係者の皆様方に、多大なるご指導とご協力を賜りました。篤く御礼を申し上げますとともに、本書が地域における歴史の解明に資することを願いまして、序といたします。

令和4年10月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 向 田 忠 正

例　　言

1. 本書は、(主)大間々世良田線(世良田工区)社会资本総合整備(防災・安全)(交安・重点)事業に伴って発掘調査された世良田環濠集落遺跡の発掘調査報告書である。

2. 遺跡は、群馬県太田市世良田町979-4、1086-3、1086-4、1095-1、1096-1、1359-1に所在する。

3. 調査対象面積は442.7m²である。

4. 事業主体は群馬県太田土木事務所である。

5. 調査主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

6. 発掘調査の期間と体制は次のとおりである。

名　　称：平成27年度(主)大間々世良田線世良田交差点改良事業

履行期間：平成28年3月31日～平成28年6月30日

調査期間：平成28年4月1日～平成28年4月30日

調査担当：木津博明(専門調査役)

遺跡掘削工事請負：スナガ環境測設株式会社

地　上　測　量　委　託：技研コンサル株式会社

7. 整理事業の期間と体制は次のとおりである。

名　　称：令和4年度(主)大間々世良田線(世良田工区)社会资本総合整備(防災・安全)(交安・重点)事業

履行期間：令和4年7月1日～令和4年10月31日

整理期間：令和4年7月1日～令和4年8月31日

整理担当：高島英之(専門員(総括))

8. 本書作成担当は次のとおりである。

編集・本文執筆：　　　　　　　高島英之(専門員(総括))

遺　物　観　察：中近世土器・陶磁器 大西雅広(専門調査役)

石製品　　　　　　　岩崎泰一(専門調査役)

金属製品　　　　　板垣泰之(専門員(主任))

デジタル編集：　　　　　　　齊田智彦(主任調査研究員)

遺物写真撮影：中近世土器・陶磁器 大西雅広

石製品　　　　　　　高島英之

金属製品　　　　　板垣泰之

遺物保存処理：　　　　　　　板垣泰之、関邦一(専門調査役)

9. 出土遺物および写真・図面等記録類は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

10. 発掘調査および報告書作成には、次の関係機関にご助言をいただいた。

群馬県県土整備部、群馬県地域創生部、群馬県太田土木事務所、群馬県教育委員会、太田市教育委員会

凡例

1. 本報告書に用いた遺構名称は、発掘調査時の名称を踏襲した。
 2. 本報告書に用いた座標・方位は、すべて国家座標第IX系(世界測地系)による。主軸方位等の計算にもこれを用いた。
 3. 本報告書の遺構図版縮尺は以下の通り。ただし遺構によってはこの限りではない。
遺構平面図・断面図 挖立柱建物、溝、井戸、土坑・ピット1/40
 4. 本報告書の遺物図版縮尺は以下の通り。ただし、遺物によってはこの限りではない。
中近世土器・陶磁器1/3、石製品1/4、金属製品(鉄貨)1/1
 5. 本報告書中のスクリートーン表現・記号は以下の通り。
遺構: 燃土 ■■■ 粘土 ■■■ 灰 ■■■ 捣乱 ■■■
遺物: ガラス質 ● 土器 ■ 鉄・金属製品
 6. 本報告書中の遺構断面図の標高値は、原則として断面図下に「L=○○m」のように表記した。
 7. 本報告書における上層断面図及び遺物観察表に記した色調表現は、農林水産省水産技術会議事務局・財团法人日本色彩研究所色票監修1988『新版標準土色帳』によった。
 8. 本報告書におけるテフラ(火山噴出物)の略号は以下の通り(テフラの名称は町田洋・新井房夫1992『火山灰アトラス』東京大学出版会による)。
Hr-FP…榛名二ツ岳伊香保、Hr-FA…榛名二ツ岳浅川、As-BP…板鼻褐色輕石、AT…姶良In

目 次

序

例言

凡例

目次

挿図・表・写真図版目次

第1章 調査に至る経緯、方法と経過 ······	1
第1節 調査に至る経緯 ······	1
1. 平成25年度の調査 ······	1
2. 平成26年度の調査 ······	3
3. 平成28年度の調査 ······	4
4. 平成28年度の調査に至る経緯 ······	4
第2節 発掘調査の方法 ······	5
1. 調査区と座標の設定 ······	5
2. 発掘調査の方法 ······	5
3. 遺構測量 ······	6
4. 遺構写真撮影 ······	6
第3節 発掘調査の経過 ······	6
第4節 整理作業の経過と方法 ······	7
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境 ······	8
第1節 地理的環境 ······	8
第2節 歴史的環境 ······	10
1. 旧石器時代 ······	10
2. 繩文時代 ······	11
3. 弦文時代 ······	11
4. 古墳時代 ······	11
5. 奈良・平安時代 ······	13
6. 中世 ······	19
7. 近世・近代 ······	21
第3節 基本土層 ······	21
第3章 発見された遺構と遺物 ······	23
第1節 I-5区から検出された遺構と出土した遺物 ······	24
1. 溝 ······	27
2. 土坑 ······	29
3. 井戸 ······	31
4. I-5区遺構外出土遺物 ······	33
第2節 I-6区から検出された遺構と出土した遺物 ······	33
1. 溝 ······	33
2. 土坑 ······	34
3. 井戸 ······	38
4. I-6区遺構外出土遺物 ······	38
第3節 II-9区から検出された遺構と出土した遺物 ······	39
1. 土坑 ······	39
2. II-9区遺構外出土遺物 ······	42
第4節 II-10区から検出された遺構と出土した遺物 ······	43
1. 土坑 ······	43
2. II-10区遺構外出土遺物 ······	44
第5節 II-11区から検出された遺構と出土した遺物 ······	46
1. 土坑 ······	46
2. 井戸 ······	48
3. II-11区遺構外出土遺物 ······	50
第6節 II-12区から検出された遺構と出土した遺物 ······	50
1. 挖立柱建物 ······	52
2. 土坑 ······	52
3. II-12区遺構外出土遺物 ······	56
第7節 III-6区から検出された遺構と出土した遺物 ······	56
1. 溝状遺構 ······	56
2. III-6区遺構外出土遺物 ······	58
第8節 旧石器確認調査 ······	58
第4章 調査成果の整理とまとめ ······	59
遺物観察表 ······	61
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 道路の位置(1).....	1
第2図 道路の位置(2).....	2
第3図 平成25・26・28年度調査区設定図	3
第4図 周辺地形分類図	9
第5図 周辺の道路.....	14
第6図 基本上層図.....	21
第7図 I-5区、I-6区、II-9区、II-10区全体図	25
第8図 I-5区1・2号溝	28
第9図 I-5区1～6号土坑	30
第10図 I-5区1・2号井戸	32
第11図 I-6区2号溝、I～II号土坑	36
第12図 I-6区5～11号土坑エレベーション図	37
第13図 I-6区1号井戸	39
第14図 II-9区1～3号土坑	41
第15図 II-10区1～3号土坑	44
第16図 II-11区、II-12区、III-6区全体図	45
第17図 II-11区1～8号土坑	48
第18図 II-11区1号井戸	49
第19図 II-11区2号井戸	51
第20図 II-12区1号倒立柱建物	52
第21図 II-12区2・3・5～14号土坑	54
第22図 III-6区4号溝状構	57
第23図 II-9区臼石器確認調査トレンチ	58
第24図 世良田環濠集落の想定復元図	60
付図 世良田環濠集落道路 平成25・26・28年度調査検出道路 全体図	

表 目 次

第1表 周辺道路一覧表	15
第2表 周辺古墳一覧表	17
第3表 検出遺構一覧表	24
第4表 遺物観察表	61

写真目次

PL. 1	1. I-5区調査区全景(北西から) 2. I-5区1号溝全景(南東から) 3. I-5区1号溝断面(南東から) 4. I-5区2号溝全景(南東から) 5. I-5区1号土坑全景(南から)
PL. 2	1. I-5区1号土坑断面(東から) 2. I-5区2号土坑全景(西から) 3. I-5区2号土坑断面(南西から) 4. I-5区3～5号土坑全景(南西から) 5. I-5区1号井戸全景、B-B'断面(南西から) 6. I-5区1号井戸A-A'断面(南東から) 7. I-5区2号井戸全景(西から) 8. I-5区2号井戸断面(西から)
PL. 3	1. I-6区調査区東側全景(北西から) 2. I-6区2号溝、土坑群全景(北西から) 3. I-6区土坑群東側、A-A'断面(北西から) 4. I-6区土坑群中央部より西側(南東から)
PL. 4	1. I-6区1号井戸全景(南東から) 2. I-6区1号井戸断面(東から) 3. II-9区調査区西側全景(南東から) 4. II-9区1号土坑全景(北西から) 5. II-9区1号土坑全景、A-A'断面(南東から)
PL. 5	1. II-9区2号土坑全景(南から) 2. II-9区3号土坑全景(北西から) 3. II-9区3号土坑断面(南西から) 4. II-9区臼石器確認トレンチ断面(北東から) 5. II-10区調査区全景(北西から)
PL. 6	1. II-10区1・2号土坑全景(西から) 2. II-10区1・2号土坑断面(北東から) 3. II-10区1号土坑断面(北東から) 4. II-10区2号土坑断面(北東から) 5. II-10区3号土坑全景(北西から) 6. II-10区基本上層(北東から)
PL. 7	1. II-11区調査区全景(南西から) 2. II-11区1～8号土坑全景(北東から)
PL. 8	1. II-11区1号井戸全景(南西から) 2. II-11区1号井戸断面(南東から) 3. II-11区2号井戸全景(南西から) 4. II-11区2号井戸全景、B-B'断面(南から)

5. II-11区2号井^{II}A-A'断面(南から)
6. II-11区2号井^{II}B-B'断面(南から)
7. II-11区2号井^{II}C-C'断面(北西から)
8. II-11区2号井^{II}遺物出土状況(南から)

PL.9

1. II-12区調査区全景(南西から)
2. II-12区1号掘立柱建物全景、東壁断面(西から)

PL.10

1. II-12区1号掘立柱建物北側柱穴全景(南から)
2. II-12区1号掘立柱建物南側柱穴、3号土坑全景(北から)
3. II-12区2・8・12・14号土坑全景(北西から)
4. II-12区5号土坑全景(南西から)
5. II-12区6・11号土坑全景(南西から)
6. II-12区7号土坑全景(西から)
7. II-12区9・10号土坑全景(西から)
8. II-12区13号土坑全景(南西から)

PL.11

1. III-6区4号溝状道構全景(北西から)
2. III-6区4号溝状道構全景(南東から)
3. III-6区4号溝状道構A-A'断面(西から)

PL.12

- I-5区1号調、2号土坑、道構外出土遺物(1)

PL.13

- I-5区道構外出土遺物(2)

PL.14

- I-6区1号井^{II}、道構外出土遺物、II-9区1号土坑出土遺物(1)

PL.15

- II-9区1号土坑出土遺物(2)

PL.16

- II-9区1号土坑出土遺物(3)

PL.17

- II-9区1号土坑出土遺物(4)

PL.18

- II-9区1号土坑出土遺物(5)

PL.19

- II-9区1号土坑出土遺物(6)

PL.20

- II-9区1号土坑出土遺物(7)

PL.21

- II-9区1号土坑出土遺物(8)、道構外出土遺物

PL.22

- II-10区1・2号土坑、II-11区1・2号井^{II}、道構外出土遺物

PL.23

- III-6区道構外出土遺物

第1章 調査に至る経緯、方法と経過

第1節 調査に至る経緯

太田市世良田町を南北に走る主要地方道大間々世良田線(世良田交差点北側)・伊勢崎深谷線(世良田交差点南側)と、東西に貫く一般県道錦貫塙線が交わる世良田交差点の改良事業は、群馬県によって平成22(2010)年度から令和4(2022)年度にかけて延長100mに亘って実施されている。歩道が狭く通学路も危険な状況にあることや、右折車線が無いため激しい渋滞が発生している現状を解消するため、右折車線及び歩道を設置し、歩行者や車両の安全で快適な通行空間を確保するために実施されている。改良工事では、交差点付近の道路が、歩道部分を含めて拡幅されるために、交差点の4方向が発掘調査の対象となってきた。

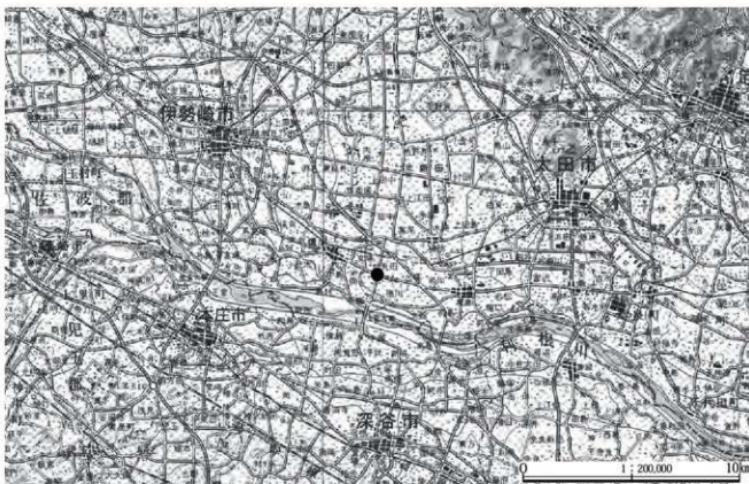
この世良田交差点改良事業における埋蔵文化財の発掘調査は平成25(2013)年度から平成28(2016)年度に亘って、断続的に当事業団によって実施してきた。本報告

書の冒頭において、まず、以下にその概要について整理しておきたい。

1. 平成25年度の調査

平成25年度の調査は、交差点北東側から一般県道錦貫塙線(当時は国道354号)下り車線交差点東側部分に面したI-1～4区の計360mを対象に実施された。調査期間は平成26(2014)年2月1日から同年2月28日までの1箇月間(履行期間:平成26年1月1日～平成26年3月31日)であった。検出された主な遺構は中世の溝3条、土坑14基、ピット44基、井戸4基などで、中世の陶磁器、土器、瓦、鉄器、銅錢などが出土した。中世瓦の出土が特筆される。

整理は翌平成26年度の平成26年9月1日から同年11月30日までの3箇月間(履行期間:平成26年9月1日～平成27年1月31日)実施され、平成27(2015)年1月16日、「世良田環濠集落遺跡(1) 社会資本総合整備(防災・安全)



第1図 週跡の位置(1)

(国土地理院200,000分の1地勢図「宇都宮」(平成23年6月1日発行)を加工)



第2図 遺跡の位置（2）

（太田市都市計画課の承認を得て、同市発行の2,500分の1地形図（平成23年調図）を加工）

第1節 調査に至る経緯

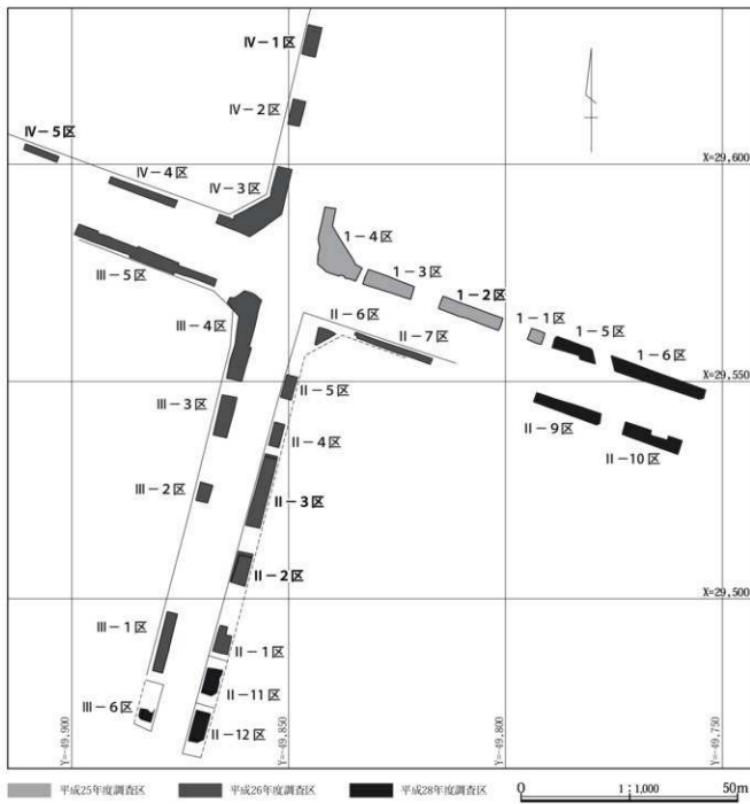
(交安・重点)(主)大間々世良田線世良田交差点改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』を刊行した。

2. 平成26年度の調査

平成26年度の調査は、2回に分けて行われた。交差点の南東側から主要地方道伊勢崎深谷線下り車線と一般県道錦貫塚塚線(当時は国道354号)上り車線交差点東側部

に面したII-1~7区、交差点南西側から主要地方道伊勢崎深谷線上り車線と一般県道錦貫塚塚線(当時は国道354号)上り車線交差点西側部分に面したIII-1~5区、交差点北西側から主要地方道大間々線世良田線上り車線と一般県道錦貫塚塚線の下り車線交差点西側部分に面したIV-1~5区の計1452m²を対象に実施された。

平成26年度1回目の調査は、280m²を対象に平成26年



第3図 平成25・26・28年度調査区設定図

第1章 調査に至る経緯、方法と経過

6月1日から同年6月30日までの1箇月間(履行期間:平成26年5月1日～同年8月29日)、平成26年度2回目の調査は、1172m²を対象に平成26年11月1日から同年12月31日までの2箇月間(履行期間:平成26年10月1日～平成27年2月27日)実施された。検出された主な遺構は、中近世の溝18条、土坑132基、ピット117基、礎石14基、竪穴状遺構2基、配石2基、地下式坑1基などで、中近世の土器、陶磁器、瓦、鉄器、銅鏡、石製品などが出土した。

整理は、翌平成27年度の平成27年4月1日から同年9月30日まで実施され(履行期間:平成27年4月1日～同年11月30日)、平成27年11月20日、「世良田環濠集落遺跡(2) 社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点)(主)大間々世良田線世良田交差点改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」を刊行した。

3. 平成28年度の調査

平成28年度の調査は、平成28(2016)年度に世良田交差点東側における一般県道綿貫塚塚線の南北両側部分と、交差点南側の主要地方道伊勢崎深谷線の東西両側、計442.7m²を対象に、平成28年4月1日から同年4月30日までの1箇月間(履行期間:平成28年3月31日～同年6月30日)実施された。

この平成28年度に行われた調査では、平成25年度に調査された一般県道綿貫塚塚線(当時は国道354号)の世良田交差点東側の、北側下り車線に面した最も東側の調査区であるI-1区のさらに東側に隣接するI-5・6区と、平成26年度に調査された南側上り車線に面した最も東側の調査区であるII-7区のさらに東側に隣接するII-9・10区、平成26年度に調査された主要地方道伊勢崎深谷線の東側下り車線に面した最も南側の調査区であるII-1区のさらに南側に隣接したII-11・12区、西側上り車線に面した最も南側の調査区であるIII-1区のさらに南側に隣接したIII-6区を対象として実施された。

本報告書では、この平成28年度に実施された発掘調査によって発見された遺構・遺物について報告する。

4. 平成28年度の調査に至る経緯

平成27年度(主)大間々世良田線世良田交差点改良事業の着手に際して、群馬県県土整備部(以下、県土整備部という)は群馬県教育委員会文化財保護課(当時、現・群馬県地域創生部文化財保護課。以下、文化財保護課という)に対して、事業地における埋蔵文化財の取り扱いについて照会した。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地世良田環濠集落遺跡(太田市遺跡番号J0052)の範囲内であり、世良田交差点改良事業に先立って、埋蔵文化財の記録保存を目的とした発掘調査を平成25・26年度に計3次に亘って実施してきたことからも、事業地内における遺構・遺物発見の可能性が高く、工事に先立って埋蔵文化財記録保存を目的とした発掘調査が必要になる可能性が高いことから、事業対象地内における埋蔵文化財包蔵の有無を調べるための試掘・確認調査の必要性と、試掘・確認調査の結果、埋蔵文化財の包蔵が確認された場合には、工事に先立って埋蔵文化財発掘調査が必要になる可能性が存在することを回答した。

群馬県太田土木事務所(以下、太田土木事務所という)は、平成28年1月に文化財保護課に対して、当該事業地における埋蔵文化財の確認調査を依頼。これを受けた文化財保護課では、平成28年1月29日、事業対象地100m²を対象に、埋蔵文化財の確認調査を実施した。確認調査は、工事対象地における遺構・遺物有無の確認、遺構検出面の認定のため、バックホーを使用し、幅約1mの試掘坑を2箇所設定して行った。各試掘坑では、平面及び土層断面観察を実施した。

一般県道綿貫塚塚線の南北両側に設定したトレントからは、黄褐色ローム層を振り込む溝や土坑などの遺構が確認され、暗褐色土層に土器片が含まれることが確認された。こうした試掘・確認調査の結果により、事業地において遺構・遺物が検出されたことから、文化財保護課は、本調査が必要と判断し、太田土木事務所宛に回答した。

事業地では遺構・遺物が検出され、事業によって埋蔵文化財に破壊が及ぶことは明白であること、また、用地等の制約により、設計変更等による埋蔵文化財保護対応も不可能であることから、発掘調査を実施し、記録保存の措置を執ることが最も適切であるとの結論に至り、発

掘調査の実施に向けて、県土整備部、太田土木事務所、太田市教育委員会(以下、太田市教委という)、発掘調査を実施する公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(以下、当事業団と称する)、地元等との協議に入った。

その後、太田土木事務所が太田市教委宛文化財保護法第94条による届出を提出。太田市教委は群馬県知事に当該地の文化財保護法第94条による届出を進めた。

調整・協議の結果、当該地における計442.7m²を対象とする発掘調査を当事業団が実施することとなり、履行期間を平成28年3月31日～令和28年6月30日、調査期間を平成28年4月1日～平成28年4月30日の1箇月間として、実施されることとなったのである。

第2節 発掘調査の方法

1. 調査区と座標の設定

先述した通り、平成28年度調査は、世良田交差点の東側と南側の2箇所において実施された。

調査区は、東西方向に向かう一般県道錦貫篠塚線の世良田交差点東側部分における道路南北両側に面した各2箇所計4箇所の調査区と、南北方向に向かう主要地方道伊勢崎深谷線の東西両側に面した計3箇所の調査区に大別される。各調査区が細かく分割されたのは、これまでの調査時と同様、調査に当たって調査区に隣接する民家の生活通路や水道引込線を確保する必要からである。

一般県道錦貫篠塚線の世良田交差点東側では先述したように道路北側を平成25年度に、南側を平成26年度に、それぞれ調査している。平成28年度の調査では、道路の南北両側とも、かつての調査対象地のさらに東側に南北各2箇所計4箇所の調査区を設定して調査を行った。北側は、西からI-5区、I-6区、南側は、西からII-9区、II-10区とした。

世良田交差点南側を南北に向かう主要地方道伊勢崎深谷線でも、平成26年度に東西両側において発掘調査が行われており、伊勢崎深谷線を挟んだ両側とも、平成26年度調査区のさらに南側に、東側で2箇所、西側で1箇所の調査区を設定した。東側を、北からII-11区、II-12区、西側をIII-6区とした。

発掘調査用いた座標は世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)であり、10m×10mを基本とし設定した。遺構図中の座標については、座標値の下3桁を「X軸-Y軸」の順で記し、「X=29510、Y=-49780」の場合、「510-780」のように略記した。調査区は、世界測地系(日本測地系2000平面直角座標系第IX系)のX=29450～560、Y=-49750～890の範囲にそれぞれ収まる(第3図参照)。

遺構測量における遺構の位置及び遺物出土位置などはすべて世界測地系の座標によって記録しているため、本報告書でも、遺構出土遺物を含め、遺構・遺物の位置情報については、世界測地系の座標によって表記する。

2. 発掘調査の方法

発掘調査は、調査範囲を国家座標に載せるための基準点測量から開始し、同時に事務所の設営を行った。

調査範囲確定後、重機による表土掘削を開始し、重機掘削を終了した箇所から、安全を確認した上で発掘作業員を投入し、人力による鏝簾を使用しての遺構確認作業を行い、発見した遺構の掘削調査に着手した。

発掘作業員による遺構の掘り下げ等、調査の詳細な方法や手段、手順等については、遺跡掘削工事請負会社の現場代理人に逐一指示するとともに、常に安全対策を万全とし、作業の安全を十二分に図った上で実際の作業に着手するよう再三に亘って要請した。

埋没土の観察、写真撮影、測量委託業者への図化指示等は担当者が行った。

出土遺物は、遺物収納箱7箱分の近世土器・陶磁器・石製品・金属製品等で、遺物の洗浄・注記作業は業者に委託して行った。

3. 遺構測量

遺構等の測量は、遺構断面及び平面実測図とも縮尺1/20を基本とした。

遺構平面・断面実測図の作成に当たっては、測量会社にデジタル測量を委託し、デジタルデータ化してデータ収録媒体及び打ち出し図面の提出を受けた。

上記、委託先測量会社により作成されたデジタルデータ成果品は、調査記録として保存されている。

4. 遺構写真撮影

発掘調査において、すべての遺構の写真は発掘調査担当者が分担して撮影した。主要な遺構については、中判カメラを用いてiso400モノクロフィルムを6×7cm判ササイズで撮影し、撮影記録はネガフィルムの状態で保存し、焼き付け写真を貼付したフィルムの検索台帳を作成した。

また、発掘調査の過程で、調査の進捗状況の記録、及びすべての遺構について、デジタルカメラで撮影を行った。

また、調査記録として、遺構ごとに土層断面、遺物出土状態、遺構全景等の撮影を行い、さらに必要に応じて遺構の各部分について、検出および調査の状況について微細な接写を行っている。

なお、撮影した写真的デジタルデータはhd等のメディアに保存し、データのファイル名は、調査区・遺構略号・番号・撮影方向・内容を数値化したものに置き換えるリネーム作業を行った。

第3節 発掘調査の経過

本遺跡は、南北に蛇行しながら流れ早川の左岸に位置する。周辺の標高は、37m前後でほぼ平坦な地形である。平成24年度の太田市教育委員会の発掘調査では、世良田環濠集落の北側の堀を確認している。堀の内側には、国指定史跡新田莊遺跡関連の長楽寺や東照宮などがある。今回の調査区も過年度の発掘調査成果と同様に、世良田環濠集落に関連する遺構の発見が想定されていた。発掘調査は順調に進行し、4月30日に終了した。

今回の発掘調査において、特筆される遺構として、14

世紀中ごろ(南北朝時代)と推定される井戸からは、同時期の土器と共に、多量の炭化物に混じる状態で鉄滓が出土した。室町時代のころ、世良田では「世良田刀」と呼ばれた刀が生産されていたことが古文書に残されている。「世良田刀」の実物は現在まで伝えられているものはないが、出土した鉄滓は「世良田刀」などの利器の生産に伴い排出されたことが頼推される。

これまでの発掘調査では、長楽寺門前を南北に延びる大規模な室町時代の堀が発見されている。既刊発掘調査報告書にも収録されている4号溝がこれにあたる。今回の発掘調査でも同溝の南側部分が確認されている。今回の調査では、この溝の堆積土の上方に昭和22(1947)年に猛威を振るった「キャサリン台風」の洪水被災による堆積土崩れ、崩厚30cm程度で確認されている。また、同様の堆積土が発掘調査を実施した各所で確認されている。

調査日誌抄

平成28年

- 4月1日(金) 担当者1名着任。調査方法について現場代理人と打ち合わせ。
 4日(月) 機材準備。
 5日(火) 調査範囲結界。
 6日(水) I-5・6区、II-9区安全対策。I-5・6区遺構確認、1号溝、7号土坑掘削調査。
 8日(金) II-9区安全対策。I-5区1・2号溝、1・2号井戸、II-9区1・3号土坑掘削精査。I-6区遺構確認。
 11日(月) I-5区1井戸、I-6区溝、土坑、II-9区2号土坑掘削精査。II-9区写真撮影準備、旧石器確認調査。
 12日(火) I-5区、II-9区写真撮影準備。II-9区遺構確認。I-6区1号井戸、2号溝掘削精査。
 13日(水) I-6区1号井戸、土坑群掘削精査。I-6区中央部遺構確認、歴史運搬など、写真撮影準備。II-11・12区、III-6区調査範囲結界。
 14日(木) I-6区西・東側写真撮影準備。I-6区西側、III-6区南側遺構確認。

- 15日(金) II-11・12区調査範囲確認。III-6区北側、II-11区遺構確認。I-6区埋戻し、残土運搬。II-11区1号井戸掘削精査。
- 18日(月) II-11区1・2号井戸掘削精査。I-6区埋戻し、残土運搬。
- 19日(火) II-11区1～8号土坑掘削精査。II-11区写真撮影準備。I-6区埋戻し、残土運搬。撤収準備。
- 20日(水) II-12区遺構確認、1～7号土坑掘削精査。II-10区資材運搬、調査準備。
- 21日(木) II-10区遺構確認、1～3号土坑掘削精査、残土運搬。II-12区8～12号土坑掘削精査。
- 22日(金) II-10区1～3号土坑、II-12区1～14号土坑写真撮影準備。II-12区土囊処理。撤収準備。
- 25日(月) II-10区残土埋戻し、整地、土囊処理。
- 26日(火) 撤収準備、写真整理。
- 27日(水) 現地撤収、写真整理。
- 28日(木) 残務整理。
- 29日(金) 残務整理。

第4節 整理作業の経過と方法

整理作業は、令和4年7月1日から8月31日までの2箇月間にわたりて太田土木事務所の委託を受けて、当事業団が実施した。

出土遺物については、まず、報告書に掲載する土器類、石器・石製品類の選別を行い、土器類、石器・石製品類の写真撮影、接合・復元等の作業を実施した。次いで実測・ト雷斯及び遺物観察表の作成を行い、業務を完了した。なお、今回の調査において木製品は出土していない。

遺構実測図については、まず調査区ごとに順次、各遺構の確認、遺構計測、遺構台帳の整備といった基礎作業とともに、遺構写真との確認作業を行い、その後、図面修正を進め、点検・整理の上、平面図及び土層断面図の編集及び修正、デジタル・トレス原図の作成、土層注記の編集等の作業を行い、デジタル原稿化を行った。

さらに、報告書に掲載する遺構写真を選定した後、レ

イアウト原案の作成、キャプション原稿の整備等を行い、レイアウト原案及びキャプション原稿をデジタル専業班において、遺構写真図版頁のデジタル原稿化を図った。

これらの作業と並行して報告書本文の原稿の執筆を進めた。

それらを経て、デジタル化された遺構図面の校正、本文の原稿執筆及び報告書原稿の総合的なレイアウト等の作業、報告書原稿全体のデジタル組版及び編集作業を行った。

作成された原稿は、指名競争入札によって落札した業者に委託され、印刷・製本の業務を実施した。なお、業者委託した印刷業務の推移の中で、原稿の校正作業を実施し、完成後、納品を受け、納品された発掘調査報告書は、検品の上、完了検査を実施し、活用に資するために関係機関へ発送する作業を行った。

また、これらの作業と並行して、調査及び整理業務の過程で作成された遺構・遺物の各種図面・写真等の記録類を収納する作業を実施した。

発掘調査及び整理業務の過程で作成された遺構・遺物にかかる各種図面及び写真等の調査記録資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに収納・保管されている。

参考文献(第1章)

- 群馬県2013「はばたけ群馬・地上整備プラン2013～2022」
- 群馬県2014「はばたけ群馬プラン・第14次群馬県総合計画・重点プロジェクト(平成26年4月1日改訂)」
- 群馬県県立整備部道路整備課(道路企画室) 2013「群馬がはばたくための7つの交通軸構想」
- 群馬県県立整備部2021「令和4年度版 よくわかる公共事業 太田地域」(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2017「年報」26

マッピングぐんま

<http://mapping-gunma.pref-gumma.jp/pref-gumma/top>

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

世良田環濠集落遺跡は群馬県南部の平野域の東部に位置する太田市の南西端、旧尾島町の町域の西端近くに所在している。

群馬県太田市は、広大な関東平野の北西端である群馬県南東部に位置し、東経139度、北緯36度、南に利根川、北に渡良瀬川というふたつの豊かな水量を誇る河川に挟まれた地域に所在する。

市域の北東部は渡良瀬川によって栃木県と、南は利根川によって埼玉県と接しており、古代以来、上野国と下野・武藏両国との国境地帯に位置し、交通の要衝であった。市の東側は群馬県大泉町、同邑楽町、栃木県足利市に、西側は群馬県伊勢崎市に、南側は埼玉県熊谷市および深谷市に、北側は群馬県桐生市、みどり市に接している。首都東京から北西へ約86kmの距離にあり、北関東自動車道が北部地域を通して関越自動車道、東北自動車道と接続し、東武鉄道によって東京都に接続している。

気候は比較的温暖で、平均気温は14度～15度。夏には雷雨が発生し、冬は北西の季節風が吹き、四季を通じて晴天が多いことが特徴である。

面積は175.54平方キロメートルで、群馬県の面積の2.8%を占めている。平成27年の国勢調査による太田市の人口は219,807人で、県下の自治体としては第3位である。

太田市の地形は北半部と南半部とで様相が異なっている。北半部には西から中央部にかけて大間々扁状地が広がり、その東寄りに八王子丘陵と金山丘陵の2丘陵が連なり、その東側、足尾山地との間を渡良瀬川が北東から南西へと流れ、渡良瀬川扁状地が形成されている。南半部には平坦地が広がっている。

市域の中央の東に位置する金山丘陵(最高点は金山239m)、市域の北部からみどり市・桐生市に延びる八王子丘陵(最高点は桐生市の茶臼山293.9m)とその周辺の台地・低地からなる平野から構成されている。金山丘陵・八王子丘陵は、元々、足尾山地と一体だったものが、断

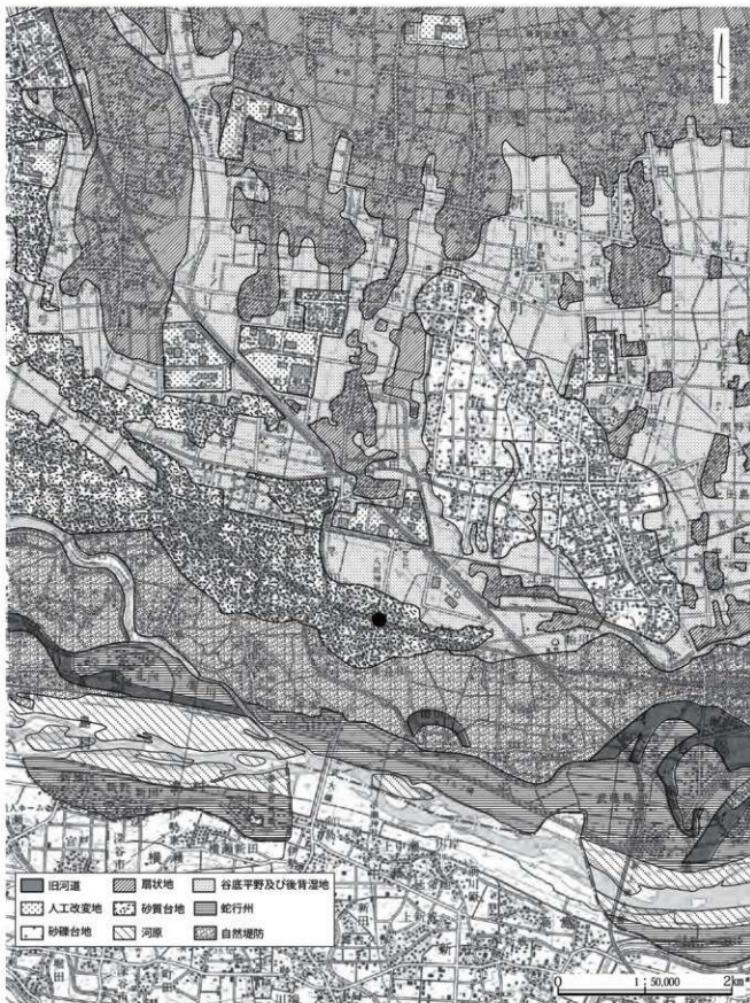
層が生じて谷となり、さらに大間々扁状地を形成していた渡良瀬川が流路を東に変え、現在のような地形になったと言われている。これら金山・八王子丘陵以外はほぼ平坦地で、全体的には起伏に乏しい地形である。なお、市域の最高点は、西長岡町の八王子丘陵稲山岬西方、桐生市境の山稜上の275mであり、最低点は、古戸町利根川河川敷の約29mである。

八王子丘陵・金山丘陵の西側には、渡良瀬川が第四紀更新世後期に形成した、大間々町を扁頂とする広大な大間々扁状地が広がり、扁端の湧水地帯には寺井・小金井・上野井・市野井・金井という「井」の付く地名が連なっている。その南方には洪積台地の宝原(山良)台地が南に延びており、その周辺は沖積地になっている。また、八王子丘陵・金山丘陵の東側には、3万年前頃から流れを東に変えた渡良瀬川が形成した渡良瀬川扁状地や旧河道・沖積地、渡良瀬川扁状地以前に形成されていた芋川台地がある。金山丘陵の南側では渡良瀬川が形成した洪積地・沖積地が広がり、利根川沿いの高林台地は邑楽台地へ続いている。

市域南半部に広がる平坦地は北から南に、扁端低地、台地面、氾濫低地に区分される。

扁端低地は大間々扁状地の南側に形成された低平な沖積地である。この扁端低地の範囲には、木崎台地や宝原台地のような台地と藪塚面Bのような小規模な低台地が混在している。扁端低地の南側には東西に二分されるやや規模の大きな台地面が存在している。この台地面の西側部分は、伊勢崎市街地から太田市の旧尾島町市街地にかけて延びており、伊勢崎台地あるいは尾島台地と呼ばれている。東側部分は、太田市高林付近から館林市にかけて広がる邑楽台地と称される部分である。尾島台地や邑楽台地の南側には、東流する利根川に沿って幅約1km前後の氾濫低地が形成されている。

本遺跡は、伊勢崎市街地から広瀬川右岸に沿って東に延びる伊勢崎台地の東端にあたり、先端は旧尾島町の中心市街地にまで及ぶ幅1km前後の細長く低い台地で、伊勢崎砂層で構成される尾島台地上に立地し、伊勢崎砂層



第4図 周辺地形分類図

(地形分類は群馬県「土地分類基本調査・深谷」(1991)、「河・高崎」(1993)による。国土地理院

50,000分の1地形図「深谷」(平成10年9月1日発行)、「高崎」(平成10年12月1日発行)を加工)

の表層には2次堆積のローム層が堆積しているという（澤口宏「第二章地形・地質」『尾島町誌通史編』上巻 尾島町、1993）。本遺跡でも旧石器の確認調査を実施したが、いずれにおいても純粹なローム層は確認できていない。なお、本遺跡地の標高は、世良田交差点で37.5mである。本遺跡地周辺の地形分類は、大間々扇状地の南側に当たり、利根川の沖積作用によって形成された平野が広がっている。

現在、本遺跡の周辺では、北側の低地が水田、南側の台地が集落や畑として利用され、遺跡のある地域は現在、世良田の集落となっており、宅地以外には畑地である。本遺跡地を含む世良田集落の北側に展開する水田地帯は、西の早川と北東側の石田川との間に形成された低地帯であり、扇端低地に当たっているが、全面が低地帯という訳ではなく、いくつかの微高地に内包されており、それらは北方の小角田や下田中にかけての台地に続いている。先述した通り、世良田の集落が立地している尾島台地の西側は伊勢崎市街地まで伸びているが、世良田の西端部で早川によって分断されており、そこが太田市と伊勢崎市の市境となっている。早川は台地面を抜けると利根川の氾濫低地の北端に沿うように南から東へと流れを変えている。世良田から尾島、岩松にかけての台地面には、6世紀における榛名山噴火によって発生した利根川氾濫の痕跡が刻まれている。6世紀中頃に起った2度目の噴火の際に噴出した白色のホーファーは、6世紀初頭に起った噴火の際に噴出した黄色のホーファーを交えて利根川に流れ込み、洪水流となって流れ下った。世良田から尾島にかけての台地面上にはこの時のFP泥流層が厚く堆積し、この泥流層の下で遺構が確認されている。

今回、調査対象地となったのは集落中心部の交差点周辺であり、江戸時代後期～幕末期の絵図でも宅地として描かれており、古くから宅地として利用されていたと考えられる。そのため、調査範囲内には大きく搅乱された場所が多く、遺構の残存状態は劣悪であった。

第2節 歴史的環境

調査対象地は、インターネット上に公開されている群馬県統合型地理情報システム(GIS)「マッピングぐんま」の「遺跡・文化財」<http://mapping-gumma.pref.gunma.jp/>によれば、東西南北約1kmの範囲にわたって、「J0052世良田環濠集落遺跡」として中世集落・城館跡の周知の埋蔵文化財包蔵地とされている。埋蔵文化財包蔵地として認定されている範囲には、国指定史跡新田莊遺跡群を構成する持続寺境内、長楽寺境内、東照宮境内など中世から近世にかかる寺社などが存在している。

なお、掲載した周辺遺跡の名称、位置、範囲等については、原則として上記「マッピングぐんま」の「遺跡・文化財」のデータに依拠し、以下の記述に当たっては、本遺跡の先行報告書である当事業団編「公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第595集 世良田環濠集落遺跡(1) 社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点)(主)大間々世良田線世良田交差点改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(2015.1)及び同「公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第607集 世良田環濠集落遺跡(2) 社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点)(主)大間々世良田線世良田交差点改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(2015.11)の、それぞれ第2章第2節「歴史的環境」の、また、太田市教育委員会編「世良田地区(ば場整備)発掘調査報告書 上新田遺跡・世良田環濠集落・歌舞妓遺跡・世良田陣屋遺跡・FP泥流下遺跡群・下原古墳群」(2017.3)の「II 遺跡の地理的・歴史的環境」の記述などを一部引用ないし、参考とした。

また、第5図及び表1・2を併せて参照されたい。

1. 旧石器時代

現在までのところ、本遺跡が所在する尾島台地上からは旧石器の出土を見ていません。

世良田地区では、本遺跡の北東約1kmに位置する歌舞妓遺跡(71)において尖頭器が1点出土している。

本遺跡の北2kmに位置する台地遺跡(109)からはナイフ形石器、刃器状の縦長剣片各1点が出土している。

本遺跡の北北東約1.5kmに位置する中江田A遺跡(70)

ではAs-BPを主体とするハードローム層中から刃器状の縦長剥片が1点出土している。

本遺跡の北東約1.75kmに位置する中江田原遺跡(58)からはスクレイバーとナイフ形石器が各1点出土している。

本遺跡の北東約2.1kmに位置する花園遺跡(54)の台地部においては、AT下層からナイフ形石器と礫核各1点が、またAT上層からナイフ形石器、削器、石核各1点が出土し、細身の槍先形尖頭器が1点採集されている。

これまで、本遺跡周辺において確認されている旧石器は、いずれも後期旧石器の範囲に入るるものである。石器の変遷という観点からはナイフ形石器や刃器状の縦長剥片などを主体とするものが古い傾向を示し、尖頭器を伴う一群は旧石器後終末期に比定される。本遺跡の周辺で、旧石器時代の遺物が比較的確実に確認されているのは、本遺跡の北東約1~2.5kmの中江田地区を中心とする木崎台地南西の縁辺部であり、居住域の存在が推測される。世良田地区においては現在までの所、尖頭器の出土が確認されているものの、単体での出土であり、居住域の存在はあまり感じられない。

2. 繩文時代

遺跡が所在する尾島台地上では、今までのところ繩文時代の遺跡も見つかっていない。周辺では、前期~後期の集落遺跡がいくつか発見されてはいるものの、いずれも小規模である。

旧石器時代の遺跡と同様、木崎台地の南西縁辺に当たる中江田、高尾、上江田にかけての地域において、繩文時代草創期や早期にかけての遺物が採集されているが、その時期の竪穴建物は確認されていない。

前期集落 本遺跡の北東約1.2kmに位置する花園遺跡(54)からは、繩文時代前期諸磯b式期の竪穴建物1棟が検出されている。

中期集落 本遺跡の北2kmに位置する台跡遺跡(109)からは繩文時代中期加曾利E1式期の竪穴建物1棟が検出されている。

他に中期の竪穴建物が検出されている遺跡としては、本遺跡から約1~1.5km北に位置する尾島工業団地遺跡群内の歌舞妓遺跡(71)、小角田下遺跡(75)、小角田前遺跡(74)、水久保遺跡(86)、水久保II遺跡(87)、水久保III

遺跡(88)、鼠塚遺跡(73)などがある。

後期集落 尾島工業団地遺跡群内小角田前遺跡(74)からは後期の竪穴建物1棟、土坑1基が検出されている。

また、本遺跡の東北東約3kmに位置する柏川山之神遺跡(47)からも竪穴建物が確認されている。

3. 弥生時代

弥生時代になるとようやく尾島台地にも小規模ながら集落が形成始めてくる。世良田周辺における弥生時代の遺跡は、伊勢崎台地、木崎台地、扇端低地内の微高地等に点在している。これら本遺跡周辺で確認されている弥生時代の集落遺跡も、本遺跡周辺の縄文時代集落と同様、いずれも小規模なものばかりである。竪穴建物や土坑は単独で発見されるケースが多く、大規模な集落が形成されていたような状況は見出しづらい。集落の継続性もうかがえない。

中期 本遺跡から約700m南側という近い位置に所在する長楽寺遺跡(6・7・25などとほぼ同位置)では、弥生時代中期中葉須和田式期の竪穴建物が2棟調査されている。

この他、本遺跡の西南西約3kmに位置する阿久津宮内遺跡(36)では中期の条痕土器が、また、中期の竜見町式土器が花園遺跡(54)から出土している。また、歌舞妓遺跡(71)からも中期の土器が出土している。

後期 小角田前遺跡(74)では、樽式期の竪穴建物1棟が調査されている。

台跡遺跡(109)からも樽式土器や赤井戸式土器を伴う竪穴建物が2棟検出された。

本遺跡の南西約2.5kmに位置する安養寺森ノ内遺跡(32)からは弥生時代後期の竪穴建物1棟、方形周溝墓1基、壇棺墓3基が検出されている。

また、本遺跡の北西約2.5kmに位置する三ツ木遺跡(90)からも赤井戸式土器や二軒屋式土器を伴う土坑群が検出されている。

4. 古墳時代

世良田周辺地域においては、数多くの古墳が密集するものと数基の古墳が疎らに点在するものとがある。前者の例としては本遺跡の東約0.5~1.5kmの位置に展開する広域の世良田古墳群がある。昭和13(1938)年に群馬県が

刊行した『上毛古墳綜覧』には40基ほどの古墳が掲載されている。5～6世紀主体で、総数約100基の古墳からなる大古墳群であり、数基の帆立貝式古墳を含むが、径10～30m程の中規模の円墳主体で形成されている。平成3(1991)～5(1993)年に行われた世良田古墳群の北域がかかるており、発掘調査の結果、古墳総数は74基に上ることが判明した。中には洪水堆積層によって覆われた古墳もあり、埴輪列が良好な状態で検出されたものも存在した。世良田古墳群の南半城は世良田蹴訪下遺跡(17)から続く水田と、下原の集落が載る台地部にまで広がっており、この部分は下原古墳群(18)と称されている。この、下原古墳群(18)を含んで広域に展開する世良田古墳群は、4世紀代の方形周溝墓に始まり5世紀から6世紀にかけて中小規模の古墳が造営され続けたと見られ、この古墳群に対応する集落が、古墳時代前期から継続して連繋し集落が營まれた歌舞妓遺跡(71)であると考えられる。

一方、本遺跡の北東約1.5kmに位置し、下原古墳群(18)を含む広域の世良田古墳群に隣接して分布する小角田前古墳群(76)は、広範囲に亘る世良田古墳群に比して古墳数こそ多くはないものの、径約40～90m級の前方後円墳が含まれており、対応する集落としては、近接する尾島工業団地内遺跡群(73～75、77、86～89)から検出された古墳時代後期に突発的に出現する大集落が考えられる。

古墳時代後期に、有力な在地首長を戴く集團が当該地域を大規模に開拓していた様子がうかがえる。

前期集落等 群馬県における古墳時代前期土器の標識遺跡である石田川遺跡が本遺跡の東約6kmに存在している(第5図範囲外)。

本遺跡から約700m南側という近い位置にあり、弥生時代中期中葉須和田式期の竪穴建物が2棟調査された長楽寺遺跡(6・7・25などとほぼ同位置)では、古墳時代前期の竪穴建物が31棟検出されている。他に、鼠塚遺跡(73)、小角田前遺跡(74)、小角田下遺跡(75)、花園遺跡(54)、永久保遺跡I～IV(86～89)、本遺跡から北西に約2.5kmの三ツ木遺跡(90)などで古墳時代前期の竪穴建物群や方形周溝墓、壺棺墓等が検出されている。

中期集落 中期では前期以上に集落の規模が拡大していく様相がみられる。尾島工業団地遺跡群では、古墳

時代中期の竪穴建物117棟などと共に、幅4.2m・深さ1.2mの南北方向の濠が検出され(鼠塚遺跡(73))、張り出しがみられることから、平面形は5角形状で、南辺約105m・東辺約60m・北東辺約110m・北西辺約90m・西辺約70m(溝)という規模を有する古墳時代の豪族居館と想定された。南側の谷、北東側の旧早川、北西側の湿地という自然地形をうまく利用し、台地を分断するように2本の濠を掘って区画しており、時期は、溝からの出土遺物と土層断面の状況から、5世紀後半～6世紀初頭頃のものと見られる。

この他、歌舞伎遺跡(71)や花園遺跡(54)でも集落が調査されている。

中期の墓 本遺跡の北東約800mに位置する大館馬場遺跡(27・28付近)では、Hr-FA層下の畠も調査されている。**後期集落** 本遺跡から東北東に約400mという至近に位置する宝積院跡(13)で、この時期の集落が検出されている。大規模な集落は、本遺跡の約1～1.5km北に位置する尾島工業団地内遺跡群(鼠塚遺跡(73)、小角田前遺跡(74)、小角田下遺跡(75)、小角田遺跡群(77)、小角田中道遺跡(78)、永久保遺跡(86)、永久保II遺跡(87)、永久保III遺跡(88)、永久保IV遺跡(89)等を含む)において古墳時代後期鬼高式期の竪穴建物61棟が検出され、周囲の世良田蹴訪下遺跡(17)、歌舞妓遺跡(71)、中江田A遺跡(70)、中江田原遺跡(58)、花園遺跡(54)など多くの遺跡からも後期の集落が発見されている。

後期の墓 本遺跡の西南西約2kmに位置する安養寺森西遺跡・阿久津宮内遺跡(36)では洪水層下の古墳時代の畠が検出された。

古墳 1938(昭和13)年に刊行された『上毛古墳綜覧』には、旧世良田村内で55基の古墳が掲載されている。その多くは古墳時代後期・6世紀以降の径10m前後の小型円墳であるが、本遺跡の周辺で最も規模が大きい古墳は、本遺跡の北北西約1.5kmに位置する全長約90mの前方後円墳、世良田村37号墳(古墳表37)であり、大刀・刀装具・金環・埴輪多数が出土している。

本遺跡の約700m南側という近い位置に所在する長楽寺遺跡(6・7・25などとほぼ同位置)からは、周濠にHr-FAが堆積する円墳5基と埴輪棺1基が発見されている。

本遺跡の北東約1kmに位置する尾島第二工業団地内遺

跡群内の世良田調訪下遺跡(17)では、帆立貝式古墳4基を含む古墳73基が調査された。一部が低地に立地したため、平安時代に起こった洪水で埋没し、埴輪が配置された状態のままで検出された。

本遺跡の北約1.2kmに位置する世良田工業団地内遺跡群の鼠塚遺跡(73)では、円墳とともに『上毛古墳總覧』に「世良田村31号墳(鼠塚)」(古墳表31)として掲載されている古墳が調査され、全長44mの前方後円墳であったことが判明した。

なお、本遺跡周辺の古墳については、第2表周辺古墳一覧表を参照されたい。

5. 奈良・平安時代

郡・郷 本遺跡の地は律令制下には新田郡内にある。新田郡の郡名「新田」は、中世の『万葉集』の写本では「爾比多」、平安時代の『延喜式』や『和名抄』では「尔布多」と読みが振られており、「ニヒタ」とか「ニフタ」などと発音されていたと考えられる。旧新田町内の遺跡では「入田」と記載した墨書き器が多く出土しており、「ニフタ」と発音されていたことを裏付ける。

新田郡は、西側を佐位郡と、北東から東側にかけては山田郡と、北側を勢多郡と接し、南側は利根川を隔てて武藏国と接している。

平安時代中期に成立した『和名類聚抄』では、郡内に新田(ニフタ)、津野(カスノ)、石西(イワセ)、祝人(ハシリ)、淡甘(タンカイまたはタコウ)、駅家(ウマヤ)の6郷があったとされる。

郡名を負う新田郷と駅家郷は、郡家や駅家が設置された官衙地区の周辺である郡域中央東部一帯、津野郷は旧尾島町柏川周辺、石西郷は太田市街地南部の岩瀬川町周辺、祝人郷は八王子丘陵西麓の平坦地一帯などがそれれ有力な比定地と考えられている。

淡甘郷 世良田の周辺には「上田中」、「下田中」、「高尾」などという地名が存在することから「淡甘郷」の故地に比定されている。淡甘郷に関わる古代の史料としては、正倉院蔵の調布に、「(表)上野国新田郡淡甘郷戸主矢田部根麻呂調黄壹返長六丈廣一尺九寸」(裏)天平勝寶四年十月主當國司正六位上行介阿部朝臣忠道郡司擬少領无位他田部君足人」とあり、天平勝宝4(752)年段階における郡司の氏名がわかる稀有な史料である。また『東大寺要録』

には、天平19(747)年に勅命によって東大寺に1000戸の食封が施入されたことを示す記事があり、その中に上野国新田郡内の50戸が含まれている。

新田郡家 新田郡家は、旧新田町と太田市との市町境に位置する太田市天良町天良七堂遺跡である。現在、国の史跡に指定された範囲は、史跡上野国新田郡家跡と称されている。昭和30(1955)年に行われた発掘調査で、南北約16m・東西約7m、6間×3間の南北棟総柱大型礎石建物が検出され、付近からは炭化米が多数出土した。この大型綱柱礎石建物は、新田郡家正倉院を形成する倉庫群のうちの一棟と考えられ、この遺跡が新田郡家の遺跡である可能性が指摘された。平成19(2007)年5月の発掘調査によっても正倉院の一角を構成していたと考えられる大規模な総柱建物が発見され、さらに同年6月には主要地方道伊勢崎・足利線の北側から巨大な郡庁院の遺構が検出され、天良七堂遺跡が新田郡家の遺跡であることは確実となった。その後、郡庁院の東西と北側を囲むように倉庫群の遺構も検出され、郡庁院と正倉院の様相がほぼ明らかになっている。

新田駅家 『延喜式』兵部省諸國駅伝馬条によれば、新田郡内には東山道駿路が東西に貫通し、上野・下野両国から武藏国への分岐点となった陸上交通上の要衝であり官人の公務通行を支援すべく設けられた施設である新田駅家が置かれていた。古代において、官衙はそれぞれが比較的の近辺にまとまって配置されていた様子が判明しているので、新田駅家も新田郡家からさほど遠くない場所に設置されていたものと考えるのが自然である。新田駅家の所在地としては、太田市新田村田から寺井にかけての場所に想定する意見が強い。

古代交通の要衝 周知のように宝亀2(711)年、武藏国が東海道に所管換となり、新田駅家から南へと分岐して武藏国府に至っていた東山道駿路武蔵路は駿路としての扱いを受けなくなった(『続日本紀』宝亀2年10月己卯条)。これによって、制度的には、新田駅家は駿路分岐点としての重要拠点から駿路線上の一般的な駅家と同じになるわけで、官衙としての性格に大きな変更が生じたように感じられるが、新田駅家と武藏国府とを結ぶ道路自体が実際に廃止されたわけではない。東山道駿路武蔵路が、道路そのものの若干の位置の変更はあるにせよ、ルートとして中世の鎌倉街道にほぼ譲りされていること



第5図 周辺の遺跡
(国土地籍図25,000分の1地形図「上原」(平成14年2月1日施行)、深谷(平成14年9月1日施行)を加筆)

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	市町村名	遺跡名	巨石	縄文	弥生	古墳	奈良	中近	種別	文献
1	太田市J0052	世良田環濠集落遺跡					○	集落、城館、社寺、墳墓		本報告書、1、2、3、4
2	太田市J0115	三種城跡					○	城館	1、5	
3	太田市J0002	新田船跡					○	城館	1、5、6、7	
4	太田市J0009	今井地区遺跡群		○	○		○	集落、城館、社寺、墳墓	7	
5	太田市J0009	今井遺跡(今井地区遺跡群内)					○	集落	7	
6	太田市J0007	伊良田船跡					○	城館	1、5	
7	太田市J0005	長榮寺遺跡		○	○	○	○	集落、社寺、古墳	1、5、8、9、10	
8	太田市J0050	伊良田新町遺跡					○	社寺	1	
9	太田市J0051	東照宮南遺跡					○	城館	1、5	
10	太田市J0052	上新田II遺跡(世良田環濠集落跡内)					○	集落	4、15	
11	太田市J0052	引松町屋跡(世良田環濠集落跡内)					○	城館	1、5	
12	太田市J0052	船出船跡(世良田環濠集落跡内)					○	集落、城館、寺社	1、5	
13	太田市J0052	宝積院跡(世良田環濠集落跡内)					○	集落、城館、寺社	1、5	
14	太田市J0052	世良田陣跡(世良田環濠集落跡内)					○	その他の	4、15	
15	太田市J0011	新湯場遺跡					○	散布地		
16	太田市J0065	世良田下町遺跡					○	散布地		
17	太田市J0043	世良田瀧訪下遺跡					○	集落、城館、古墳	11、75、76	
18	太田市J0053	下原古墳群					○	古墳	1、5、12	
19	太田市J0045	伊良田下江田前遺跡(下江田前遺跡内)					○	不明	13	
20	太田市J0045	下江田前遺跡					○	その他の	14	
21	太田市J0065	伊泥流下遺跡群		○	○	○	○	散布地	4	
22	太田市J0065	伊良田若宮跡(伊泥流下遺跡群内)					○	散布地	4	
23	太田市J0065	伊良田瀧訪下遺跡(伊泥流下遺跡群内)					○	散布地	4	
24	太田市J0065	山保大日南遺跡(伊泥流下遺跡群内)					○	散布地	4、13	
25	太田市J0065	櫛川船跡(伊泥流下遺跡群内)					○	城館	1、4、5	
26	太田市J0065	棘切今溝寺道跡(伊泥流下遺跡群内)					○	社寺	1、5	
27	太田市J0065	大船脚破遺跡(伊泥流下遺跡群内)					○	散布地	1、5	
28	太田市J0065	大船跡(伊泥流下遺跡群内)					○	散布地、城館	1、5	
29	太田市J0065	安養寺西宮下遺跡(伊泥流下遺跡群内)					○	城館	1、5	
30	太田市J0065	安養寺居立跡(伊泥流下遺跡群内)					○	散布地		
31	太田市J0065	安養寺森南跡(伊泥流下遺跡群内)					○	城館、その他の	1、5	
32	太田市J0065	安養寺森下遺跡(安養寺御跡)					○	散布地、城館	1、5、16	
33	太田市J0065	安養寺北原跡(伊泥流下遺跡群内)					○	その他の		
34	太田市J0065	利根本郷遺跡(伊泥流下遺跡群内)					○	散布地		
35	太田市J0065	安養寺東尻下遺跡(伊泥流下遺跡群内)					○	城館	1、5	
36	太田市J0065	安養寺森西跡、大船馬場道跡、アホ津宮		○	○		○	集落、墳墓	17	
37	太田市J0065	和川新塚下遺跡(伊泥流下遺跡群内)					○	集落、墳墓	18	
38	太田市J0065	魚頭軒浜遺跡(伊泥流下遺跡群内)					○	その他の	19	
39	太田市J0065	鷲島裏組道跡(伊泥流下遺跡群内)					○	散布地		
40	太田市J0249	下田跡遺跡					○	集落、古墳	12、20~22	
41	太田市J0322	石之塔道跡					○	散布地		
42	太田市J0296	長福寺道跡					○	集落、城館、社寺	23、24	
43	太田市J0135	西田島遺跡					○	集落、古墳、城館	1、5、12、25、26、27	
44	太田市J0135	岩松船跡					○	城館	1、5、12、25、26、27	
45	太田市J0135	延亨別道跡					○	散布地、集落、古墳	28	
46	太田市J0024	なた山道跡					○	散布地		
47	太田市J0023	和川山之神道跡		○	○	○	○	散布地、集落	1、29、30、31、32	
48	太田市J0320	移ノ内遺跡					○	散布地		
49	太田市J0321	松木ヶ谷下遺跡					○	散布地		
50	太田市N0107	下田遺跡		○	○		○	散布地、その他の	33	
51	太田市N0106	大豆柄道跡		○	○		○	散布地	34	
52	太田市N0105	長命寺裏遺跡		○	○		○	散布地	34	
53	太田市N0101	中通遺跡					○	散布地	34	
54	太田市N100	花園道跡		○	○	○	○	集落	34、35、36	
55	太田市N0087	下顧地遺跡					○	散布地	34	
56	太田市N0098	塞沢道跡					○	散布地	34	
57	太田市N0099	八ツ岡道跡		○	○	○	○	集落、墳墓、その他の	37、38、39、40、41	
58	太田市N0095	中江田原遺跡	○	○	○	○	○	集落	34、39、41、42、43、44、45、46	
59	太田市N0095	原船跡					○	城館	5、34	
60	太田市N0102	御門遺跡					○	散布地	34	
61	太田市N0097	五反田遺跡		○	○		○	散布地		
62	太田市N0096	下江田本郷道跡		○	○		○	散布地	34	
63	太田市N0094	中江田本郷道跡(中江田本郷道跡内)					○	城館	5、34	
64	太田市N0094	中江田本郷道跡		○	○	○	○	集落、寺社	34、40、42、43、44	
65	太田市N0084	赤仮道跡					○	散布地		
66	太田市N0085	中江田宿道遺跡					○	集落	34、40、42、43、44	

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

番号	市町村道跡No.	道跡名	旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中近	種別	文献
67	太田市N0093	中江田C道跡	○	○	○	○	○	○	散布地	34
68	太田市N0092	中江田B道跡	○	○	○	○	○	○	散布地	34
69	太田市N0092	来迎寺跡(中江田B道跡内)						○	社寺	34
70	太田市N0091	中江田A道跡	○	○	○	○	○	○	集落	34, 42, 43, 44, 47
71	太田市J0009	東舞妓道跡				○	○	○	集落	1, 48, 49
72	太田市J0008	世良田上層分道跡				○	○	○	集落	50
73	太田市J0038	風塚道跡		○	○	○			集落	51
74	太田市J0003	小角田前道跡				○	○	○	集落	1, 51, 52, 53
75	太田市J0037	小角田下道跡			○	○	○		集落	1, 54
76	太田市J0036	小角田古墳群				○			古墳	1, 12
77	太田市J0035	小角田道跡群				○	○	○	集落, 墓場, その他	1, 55
78	太田市J0033	小角田中通道跡(小角田道跡群内)				○	○	○	集落, 墓場	1, 55
79	太田市N0077	中道道跡				○	○	○	集落	7, 34, 56, 57
80	太田市N0076	下田中川久保道跡				○	○	○	集落	34, 57, 58
81	伊勢崎市SA113	三ツ木圓沼道跡		○	○	○	○	○	古墳, 集落, 生産	59
82	伊勢崎市SA008	三ツ木・越ノ3道跡				○			散布地	
83	伊勢崎市SA009	三ツ木・越ノ道跡				○			散布地, 集落	60
84	伊勢崎市SA100	三ツ木・越ノ2道跡				○			散布地	
85	伊勢崎市SA101	三ツ木・住寺寺道跡				○			散布地	
86	太田市J0039	水久保道跡			○	○	○		集落	61
87	太田市J0040	水久保II道跡			○	○	○		集落	62
88	太田市J0041	水久保Ⅲ道跡			○	○	○		集落	62
89	太田市J0042	水久保IV道跡			○	○	○		集落	62
90	伊勢崎市SA111	三ツ木道跡		○	○	○	○	○	集落	63, 64, 65
91	伊勢崎市SA110	三ツ木・白光寺道跡		○	○	○	○	○	散布地, 集落	66
92	伊勢崎市SA112	上矢塙道跡				○	○	○	集落, 墓場	67
93	伊勢崎市SA109	三ツ木・西林道跡		○	○	○	○	○	集落, 墓場	5, 68
94	伊勢崎市SA108	女塙・下田道跡				○	○	○	集落, 墓場, その他	69
95	伊勢崎市SA106	女塙・谷口道跡				○	○		散布地	
96	伊勢崎市SA107	女塙・大藏塙道跡				○			散布地	
97	伊勢崎市SA103	女塙道跡				○	○		散布地, 集落	63
98	伊勢崎市SA104	女塙・道西道跡				○			散布地	
99	伊勢崎市SA105	女塙・新聞地道跡				○	○		散布地	
100	伊勢崎市SA102	女塙・埴込道跡				○	○		散布地	
101	太田市J0115	三藏城跡				○			城館	5
102	伊勢崎市SA125	女塙・熊野道跡				○			散布地	
103	伊勢崎市SA124	女塙・熊之前2道跡		○					散布地	
104	伊勢崎市SA123	女塙・熊之前1道跡		○					散布地	
105	伊勢崎市SA119	北米圓道跡		○	○	○	○	○	散布地, 集落	70, 71, 72
106	伊勢崎市SA118	米同・沼端道跡		○	○	○	○	○	散布地	
107	伊勢崎市SA122	仲島・稻荷木道跡				○			散布地	
108	太田市N0083	明神道跡			○	○			散布地	
109	太田市N0082	台道跡		○	○	○			集落	34, 73

第2表 周邊古墳一覽表

番号	古墳名称	文献
1	世良田村1号墳	1, 12, 74
2	世良田村2号墳	1, 12, 74
3	世良田村3号墳	1, 12, 74
4	世良田村4号墳	1, 12, 74
5	世良田村4号墳	1, 12, 74
6	世良田村4号墳	1, 12, 74
7	世良田村7号墳	1, 12, 74
8	世良田村8号墳	1, 12, 74
9	世良田村9号墳	1, 12, 74
10	世良田村10号墳	1, 12, 74
11	世良田村11号墳	1, 12, 74
12	世良田村12号墳	1, 12, 74
13	世良田村13号墳	1, 12, 74
14	世良田村14号墳	1, 12, 74
15	世良田村15号墳	1, 12, 74
16	世良田村16号墳	1, 12, 74
17	世良田村17号墳(一本松塚古墳)	1, 12, 74
18	世良田村18号墳	1, 12, 74
19	世良田村19号墳	1, 12, 74
20	世良田村20号墳	1, 12, 74
21	世良田村21号墳(しそみ山古墳)	1, 11, 12, 74
22	世良田村22号墳(第2しそみ山古墳)	1, 12, 74
23	世良田村23号墳(三体池塚古墳)	1, 12, 74
24	世良田村24号墳(落衝塚古墳)	1, 12, 74
25	世良田村25号墳(文殊山古墳・徳川義季公紫代墓)	1, 12, 74
26	世良田村26号墳(福荷山古墳)	1, 12, 74
27	世良田村27号墳(下ノ瀬古墳古墳)	1, 12, 74
28	世良田村28号墳(二子塚古墳)	1, 12, 74
29	世良田村29号墳(御稻荷山古墳)	1, 12, 74
30	世良田村30号墳(歌舞妓山古墳)	1, 12, 74
31	世良田村31号墳(鼠塚古墳)	1, 12, 51, 74
32	世良田村32号墳(践神塚古墳)	1, 12, 51, 74
33	世良田村33号墳(上ノ瀬古墳古墳)	1, 12, 74
34	世良田村34号墳	1, 12, 74, 75
35	世良田村35号墳	1, 12, 74, 76
36	世良田村36号墳	1, 12, 74, 76
37	世良田村37号墳	1, 12, 74, 76
38	世良田村38号墳	1, 12, 74, 76
39	世良田村39号墳	1, 12, 74, 76
40	世良田村40号墳	1, 12, 74, 76
41	世良田村42号墳	1, 12, 74, 76
42	世良田村43号墳	1, 12, 74, 76
43	世良田村44号墳	1, 12, 74, 76
44	世良田村45号墳	1, 12, 74, 76
45	中道1号墳	12, 57
46	矢板神社古墳	12
47	二ツ山古墳	12
48	田来通跡跡古墳	12
49	石川古墳	12, 34
50	本郷古墳	12
51	百庚申古墳	12, 34
52	原古墳	12
53	森下古墳	12, 34
54	木崎村5号墳(二ツ塚古墳)	12
55	長慶塚古墳	12, 34
56	長命寺古墳	12, 34
57	大豆柄古墳	12
58	木崎二ツ塚古墳	12, 34
59	神明塚古墳	12, 34
60	尾島町1号墳	1, 74
61	尾島町2号墳	1, 74

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

文献

- 1 尾島町註門委員会 1993 「尾島町誌」通編(上巻)
- 2 猪島町埋蔵文化財調査事業実行委員会 2015a 「豊臣良田遺跡(1)」
- 3 猪島町埋蔵文化財調査事業実行委員会 2015b 「豊臣良田遺跡(2)」
- 4 太山市教育委員会 2017 「世臣良田遺跡(昭和初期)発掘調査報告書」
太山市教育委員会 1886 「猪島良田の世臣道跡」
- 5 猪島町教育委員会 1886 「猪島良田の世臣道跡」
- 6 尾島町註門委員会 1993 「猪島良田の世臣道跡」
- 7 猪島町註門委員会 1993 「豊臣良田・猪島良田・中野良田・今井道跡(4)発掘調査報告書」
- 8 尾島町註門委員会 1979 「長谷寺跡」 豊臣良田・学校裏工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 9 尾島町註門委員会 1984 「長谷寺跡」 豊臣良田育園改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 10 尾島町註門委員会 1982 「長谷寺跡」 陣営改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 11 尾島町註門委員会 1994 「里田山跡(下道跡)」
- 12 猪島町註門委員会 2017 「猪島良田の世臣道跡」
- 13 尾島町註門委員会 1992 「出雲良田遺跡・猪島良田遺跡・世臣良田下川田遺跡」
- 14 猪島町埋蔵文化財調査事業実行委員会 1991 「飯土(二木松道跡)・下川田(道跡)」
- 15 尾島町註門委員会 1989 「上田道跡(豊臣良田)」
- 16 尾島町註門委員会 2004 「安養寺寺内(内遺跡)」
- 17 猪島町埋蔵文化財調査事業実行委員会 1995 「安養寺寺西道跡・大宿地場道跡・久阿津河内道跡」
- 18 尾島町註門委員会 2000 「美山(新延山)道跡」
- 19 尾島町註門委員会 2003 「鬼塚軒(内道跡)」
- 20 大山市教育委員会 2003 「中川道跡」 XK
- 21 大山市教育委員会 2004 「中川道跡」 20K 2次
- 22 大山市教育委員会 2005 「中川道跡」
- 23 大山市教育委員会 1993 「猪島良田(豊臣良田)発掘調査報告書」
- 24 大山市教育委員会 2004 「長谷寺跡(第2次)」
- 25 猪島町註門委員会 1987 「西川田遺跡(豊臣良田)発掘調査報告書」
- 26 猪島町註門委員会 1991 「西川田遺跡(豊臣良田)報告書第一下鳥城跡の調査」
- 27 猪島町埋蔵文化財調査事業実行委員会 2005 「西川田道跡」
- 28 大山市教育委員会 1996 「足利其那(豊臣良田)発掘調査報告書」
- 29 尾島町註門委員会 1992 「美山(山之内道跡)」
- 30 尾島町註門委員会 1994 「美山(山之内道跡)II」
- 31 尾島町註門委員会 1999 「猪島山(山之内道跡)III」
- 32 尾島町註門委員会 1997 「猪島山(山之内道跡)一般国道354号バイパス道路改築(改良)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 33 新町註門委員会 1992 「下川田道跡」
- 34 新町註門委員会 1987 「猪島町(2)資料編(上)」
- 35 新町註門委員会 1996 「中川田跡群(花園道跡)」
- 36 新町註門委員会 1997 「猪島町(内道跡)I」
- 37 新町註門委員会 1997 「猪島町(内道跡)II」
- 38 新町註門委員会 1999 「八(猪島)道跡」
- 39 新町註門委員会 2000 「猪島町内道跡」 II
- 40 新町註門委員会 2001 「猪島町内道跡」 V
- 41 新町註門委員会 2004 「猪島町内道跡」 VI
- 42 新町註門委員会 1979 「中川田(原)の防風舟道跡」
- 43 新町註門委員会 1983 「中川田道跡」
- 44 新町註門委員会 1997 「中川田道跡群」
- 45 新町註門委員会 2001 「猪島町内道跡」 III
- 46 新町註門委員会 2002 「猪島町内道跡」 IV
- 47 新町註門委員会 2003 「上古井古跡群(猪原道跡・中川田山道跡)」
- 48 猪島町埋蔵文化財調査事業実行委員会 1982 「歌舞伎道跡」
- 49 尾島町註門委員会 1993 「歌舞伎道跡」
- 50 尾島町註門委員会 1995 「豊臣良田(上分道跡)」
- 51 大山市教育委員会 1993 「足利工賃地(内道跡)」
- 52 猪島町埋蔵文化財調査事業実行委員会 1996 「小内田(山道跡)」
- 53 猪島町埋蔵文化財調査事業実行委員会 1996 「小内田前山 I・II道跡」
- 54 尾島町註門委員会 1983 「小内田下道跡」
- 55 尾島町註門委員会 1997 「小内田(内道跡)」
- 56 猪島町埋蔵文化財調査事業実行委員会 1999 「豊臣良田(大内道)」
- 57 猪島町埋蔵文化財調査事業実行委員会 1999 「下川田(中川田)道跡・下川田(久保道跡)」
- 58 新町註門委員会 2005 「猪島町内道跡」 V
- 59 猪島町埋蔵文化財調査事業実行委員会 2000 「三ツ木道跡(道跡)」
- 60 猪島町埋蔵文化財調査事業実行委員会 1981 「二ツ木(越戸)道跡」
- 61 太山市教育委員会 2010 「尾工(尾工)道跡(内道跡)」
- 62 太山市教育委員会 2014 「尾工(尾工)道跡(内道跡)」
- 63 猪島町 1974 「猪町(代道跡)」
- 64 猪島町埋蔵文化財調査事業実行委員会 1985 「二木木道跡 一般国道41号(上武道跡)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 65 猪島町註門委員会 1993 「猪島町(内道跡)」
- 66 猪島町註門委員会 1979 「西川田・二木道跡(豊臣良田)発掘調査報告書」
- 67 新町註門委員会 1979 「大久保道跡(豊臣良田)」
- 68 新町註門委員会 1979 「次交道跡(豊臣良田)」
- 69 新町註門委員会 1980 「西林道跡・下川田跡(豊臣良田)」
- 70 猪町 1973 「周町(代道跡)」 10・14
- 71 猪馬郡立明村高等学校附属農場、猪馬郡立明生高等学校社会部 1960 「猪馬郡立明村北米田道跡(豊臣良田)発掘調査報告書」
- 72 猪馬郡立明村女子高等学校附属農場、猪馬郡立明生高等学校社会部 1962 「猪馬郡立明村北米田道跡(豊臣良田)発掘調査報告書」
- 73 新町註門委員会 1988 「台道跡」
- 74 猪馬郡 1938 「猪馬郡史稿」 10・14
- 75 尾島町註門委員会 1998 「世臣良田(下道跡)」
- 76 尾島町註門委員会 2009 「豊臣良田(下道跡)」

からみても、そのことは明白である。東山道駿路武蔵路は、あくまでも駅路ではなくたったということだけのこと、上野・下野両国間にわたる東山道駿路と武藏国府・東海道駿路とを結ぶ連絡的な官道として機能し続けたものと考えられる。それによって、駿路分岐点ではなくたものの、東山道駿路と東海道駿路とを連絡する官道との分岐点として、古代陸上交通上の要衝としての重要性は、決して変わるものではなかったと見るべきであろう。

古代交通の遺跡 旧新田町内では、牛堀・矢ノ原ルートと称される高崎市南部の平地から玉村町を経て旧境町にかけて東西に貫く幅約12mの古代道路遺構に続く道路遺構と、その南側数百mの位置を、牛堀・矢ノ原ルートに並行して東西に貫く幅約10mの下新田ルートの2系統の駿路遺構が検出されている。また、北関東自動車道の建設に関わる調査では、さらに東に寄った金山丘陵の東麓地域である太田市東今泉町の地域で、約1kmにわたって幅約12mの古代道路遺構が検出され、これは牛堀・矢ノ原ルートにつながる道路遺構であると考えられている。

群馬県高崎市南部から玉村町、旧境町、旧新田町南部にかけて検出されている牛堀・矢ノ原ルートと、その延長上の道路と考えられる太田市東今泉町付近で検出された幅約12mの古代道路遺構は、いずれも8世紀中葉から後半にかけて廃絶していることが調査の結果明らかになっており、牛堀・矢ノ原ルート、下新田ルートいずれも『延喜式』兵部省諸國駿伝馬条に記載のある段階の東山道駿路とは異なる段階の駿路の跡とみられ、むしろ『延喜式』段階における東山道駿路は、牛堀・矢ノ原ルートや下新田ルートよりはかなり北側に位置する榛名山東麓から赤城山南麓の台地上を通っていたものと考えられる。平安時代の東山道駿路は、本遺跡の北方、旧戸塚本町域内を通っていたと想定できるが、旧戸塚本町域や太田市北部地域では、現在までのところ、古代の道路遺構が検出された遺跡はない。

集落 多くの集落遺跡が調査されている。なかでも尾島工業団地内遺跡群では、奈良時代の堅穴建物が199棟、平安時代の堅穴建物211棟・大型掘立柱建物1棟を含む掘立柱建物69棟が検出され、古墳時代中期から継続的に集落が営まれた様相が明らかになっている。

この他、世良田諷訪下遺跡(17)、歌舞伎遺跡(71)、小角田前遺跡(74)、中江田宿通過跡(66)、中江田本郷遺跡

(64)、花園遺跡(54)など、多くの集落遺跡が調査されている。

なお、尾島工業団地内遺跡から出土した9世紀中葉の滑石製防輪には、上面に「矢田衆即□矢田公□子□」と刻書されたものが出土している。

水田 世良田諷訪下遺跡(17)では9世紀の洪水で埋没した水田が2面とAs-B下水田が検出されている。こうした水田は小角田遺跡群でも検出されている。

6. 中世

新田莊 上野国内の荘園で最も著名な新田莊は、平安時代末期に成立した。天仁元(1108)年に起きた浅間山の大噴火によるAs-Bの降下によって荒廃した新田郡東南部の平野部を清和源氏の流れを汲む在地豪族新田義重が地主職を得て再開発し、保元2(1157)年に19郷を、時の治天の君である鳥羽院の御願寺であった金剛心院に寄進し、領家を当時中納言であった藤原(花山院)忠雅とした。その功績によって新田義重は改めて下司職に任せられ、新田莊の立券に成功したことによって成立した。その範囲は、当初、北を鹿田山、東を金山丘陵、西を早川、南を利根川に囲まれた地域の19郷とされ、新田郡の西側を占めていた。その後、嘉応2(1170)年の「新田莊嘉応二年目録」には新たに37郷が追加され、荘園の範囲はほぼ新田郡全域に及び、義重の没後はその子供たちによって分割された。

その後、鎌倉時代の元仁元(1224)年段階では、新田氏本宗家と庶流の世良田氏・岩松氏(父系では足利氏流)の3氏の間で分割支配されるようになるが、新田氏本宗家は、義重の曾孫にあたる新田政義の代に没落し、以後は『吾妻鏡』にも登場しないような一地方御家人にまで零落してしまった。

新田氏本宗8代目の義貞は、後醍醐天皇の挙兵に呼応して、足利尊氏の嫡子千寿王丸(後の足利義詮)を奉じて鎌倉を攻め、鎌倉幕府の中枢を滅ぼした。以後、新田氏一門は南朝軍の中核となるが、次第に敗退を重ねていく南朝と共に没落してゆき、早く北朝に降った岩松氏が事实上の本宗家の地位を占めて新田莊を支配した。だが、戦国時代に入ると岩松氏も家臣で新田義宗の末裔を称した由良氏によって下剋上され、さらに小田原北条氏の傘下にあった由良氏も、天正18(1590)年、豊臣秀吉による

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

関東攻略で秀吉軍に敗れ、居城である金山城と所領を失い、新田莊は完全に解体された。

女壠 赤城山南麓の標高約90～100mの等高線の間をほぼ東南東方向に、前橋市東部の荒口町、二之宮町、伊勢崎市赤堀町下触などを経て同市西国定までの全長約13kmに及ぶ12世紀初頭に開削された未完の農業用水路である女壠は、新田氏の開拓が想定された時期もあったが、近年では、天仁元(1108)年の浅間山大噴火の隕灰によって壊滅した大間々扇状地地域の農地、瀬名莊の再開発のための農業用水の供給を目的に、下野國西部から上野國東部にかけて一大勢力を形成し、上野國衛の在官人としても主要な位置を占めていた秀郷流藤原氏の瀬名氏を中心とする豪族連合であると見るのが有力である。

開削が未完に終わった理由は、自然条件的に無理が多い計画であったことや、土木技術の未熟さによる工事の破綻、義国流河内源氏と秀郷流藤原氏が次第に对立関係に陥ったことにあるとする見方がある。

新田莊閑連遺跡群 本遺跡周辺には新田莊に関係する遺跡が多く存在する。

本遺跡の西約600mに位置する現・総持寺一帯は、新田氏館跡(3)とされ、新田義重居館説や世良田頼氏、新田義貞などの居館説などがある。規模からみても新田氏本宗家惣領級の豪族の館であることには間違いないだろう。

長楽寺 本遺跡の南側に近接し、境内が史跡新田莊遺跡群の構成要素となっている長楽寺(7)は、承久3(1221)年に得川義季が、わが国の臨済宗の開祖である栄西の高弟である宗朝を開山として創建した東日本初の禅寺(「東関最初禪窟」)であるか、禅の専門道場ではなく、顯密三宗兼学の寺であった。幕府から「閑東十刹」の第7位に列せられ、新田本宗家の滅亡後も鎌倉公方家の帰依を得、閑東屈指の臨済宗大寺院として繁栄したが、戦国時代には寺運は著しく衰退した。

その後、長楽寺は江戸に幕府を開いた徳川家康の顧問であった天海僧正によって天台宗に改宗され、江戸時代には歴代徳川將軍の帰依を受け、世良田東照宮の別当寺ともなり、末寺七百余ヶ寺を擁する大寺院として隆盛を極めた。

なお、長楽寺境内はこれまで、昭和51(1976)年3～4月に行われた長楽寺現境内の南側、東照宮現境内の東側

に隣接する尾島町立世良田小学校の改築に伴う発掘調査では、中世の基壇や井戸が、また、昭和56(1981)年9～10月に行われた長楽寺庫裏に隣接する世良田保育園改築工事に伴って行われた発掘調査では、境内の区画溝が、さらに平成4(1992)年10月に行われた長楽寺庫裏改築に伴う発掘調査では、近世末期の庫裏の建物の一部にあたる礎石建物が検出されている。この調査で検出された遺構・遺物は、本遺跡の今回の発掘調査で検出された遺構・遺物の年代観に近い。

普光庵跡古墓 世良田東照宮境内に所在する普光庵跡は、長楽寺第5世月船琛海のために、同寺第11世牧翁了一が建立した墓地の跡で、長く所在地が不明であったが、昭和12(1937)年9月、落雷を受け倒れた老杉の根を撤去するために掘削したところ、骨蔵器が発見され、禅僧の埋葬形式である普同塔(共同埋葬)であることが判明した。

月船琛海は、鎌倉時代後期の弘安5(1282)年に長楽寺の住持となり、同寺の基礎を確立した名僧で、徳治2(1307)年に京都東福寺第8世となり、翌、延慶元(1308)年、東福寺において入滅し、花園天皇より「法照禪師」の諡を下賜された。塔所は、東福寺に営まれたが、牧翁了一によって長楽寺にも分骨されたのである。

月船琛海の骨蔵器である古瀬戸灰釉三耳壺は、安山岩製の縦54.5cm、横36.3cm、高さ30cmの石櫃の中に納められ、「月船和尚」の刻銘のある一辺30cm・厚さ6cmの凝灰岩製の蓋が載せられていた。弟子6人の骨蔵器は古瀬戸灰釉四耳壺2点と灰釉瓶子4点であり、月船琛海石櫃の西側に南北一列に並んで発見された。このように埋葬者が特定できる中世の骨蔵器は全国的に希であり、これらは瀬戸焼の編年基準となる貴重な資料として注目されている。

運河 世良田諏訪下遺跡(17)では、鎌倉時代の溝が調査され、早川から中世世良田宿を通り石田川に至る物資運搬のための運河と考えられている。この大溝からは、中世の篠塔婆、皿、板草履など大量の木製品が出土している。

中世陶磁器の出土 徳川館跡(25)には新田氏の祖である新田義重の墓と伝えられている五輪塔があり、墓地整理の際に骨蔵器として使用された13世紀前後の古瀬戸四耳壺が出土した。こうした古瀬戸や在地産陶器を利用した

中世の骨蔵器は、東照宮境内(6, 8付近)の普光庵跡古墓の他に円福寺境内伝新田氏累代墓でも発見されている。

花園遺跡(54)では古瀬戸鉄軸印花合子、歌舞妓遺跡(71)からは古瀬戸灰釉水滴、上新田遺跡(新田館跡)(2)からも古瀬戸鉄軸水滴などが出土している。また、長楽寺には青磁香炉・花瓶などが伝世しており当時の繁栄が窺える。

7. 近世・近代

家康開東移配 天正18(1590)年、豊臣秀吉による小田原北条氏攻略後の徳川家康開東入封に伴い、徳川四天王・徳川十六神将・徳川三傑に数えられ、家康朝業の功臣として名高い榊原康政が上野国館林城に入り、徳川家臣中第2位の10万石を与えられ、現在の館林市・太田市域ほぼ全域を領した。

榊原康政は、この地の堤防工事や街道整備などに力を注ぎ、慶長11(1606)年5月14日に館林城にて死去。榊原家は3代にわたって館林藩主の地位にあったが、寛永20(1643)年に陸奥国白河(福島県白河市)に転封され、世良田の地域は天領となつた。

徳川郷 当初、「松平」の苗字で藤原氏の氏名を名乗っていた徳川家康は、新田氏の祖である新田義重の子の得川義季の末裔を自称し、武家の棟梁の一つである清和源氏の流れであることを主張するようになる。永禄9(1566)年に勅許を得て「徳川」の苗字を名乗ることを許され、從五位下三河守に叙任された。正親町天皇は、当初、この先例のない申請に対して勅許を躊躇したが、吉田兼右が万里小路家文書を調査した結果、先例が発見されたことにより、勅許を得るに至つたのである。家康は、朝廷より三河守の官職を得ることによって領國たる三河国支配の正当性を得るとともに、清和源氏一門である新田氏の流れを汲む徳川氏を公称することによって、家格の向上を図つたのみならず、後に征夷大將軍に補任される正当性を得ることになった。

元和3(1617)年に、家康の遺言に従つて2代将軍秀忠が駿河国久能山より下野国日光へ家康の遺骸を改葬した際に建てられた東照社の社殿は、3代将軍家光は、寛永13(1636)年の家康21年神忌に向けて寛永の大造替を開始し、今日見られる莊厳な社殿への大規模改築が行われた。

正保2(1645)年11月11日には、後光明天皇から宮号が授与され、東照社から東照宮と改称され、国家守護の「日本之神」として、翌年の例祭からは朝廷からの奉幣が恒例となり、奉幣使(日光例幣使)が派遣されるようになった。その日光例幣使が日光と京都とを往復する道を例幣使街道と呼んだ。

第3節 基本土層 (第6図、PL. 6)

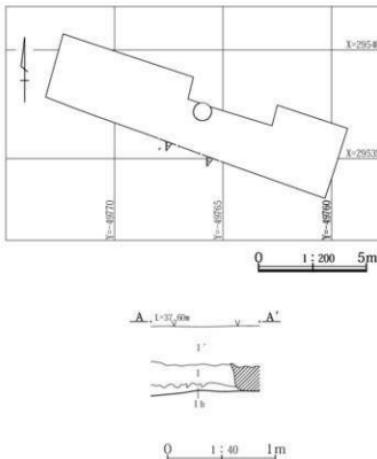
基本土層はII-10区において記録した。

I' 層 表土(客土)

I 層 粒状炭化物微量。

Ib層 黒褐(10YR3/2)下半に小塊状ローム(砂質)

(Ib層の隣の層) 粗粒状ローム。



第6図 基本土層図

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第2章参考文献

- 青木裕美ほか 2012 「興國史－上州の150年戦争－」、上毛新聞社
井上正室・近藤義雄・西田晴次編 1988 「角川日本地名大辞典10 群馬」、角川书店
太田市教育委員会 1992 「長塚寺遺跡発掘調査概報」
太田市教育委員会 1996 「長塚寺遺跡発掘調査報告書」
太田市教育委員会 2005 「長塚寺遺跡第1回発掘」
太田市教育委員会 2003 「山内道路：XIX」
太田市教育委員会 2004 「山内道路：20（次）」
太田市教育委員会 2005 「山内道路：21」
太田市教育委員会 2013 「毛島工業団地道路」
太田市教育委員会 2014 「尾島工業団地道路」
太田市教育委員会 2017 「世良田山地区（坂野整備）発掘調査報告書」 上
　　世良田遺跡・世良田環濠集落・歌舞妓道路・世良田陣屋道路・FP泥流下
　　道路跡・下原山（墳群）
太田市史編纂委員会 1996 「太田市史 史通編 原始古代」
太田市史編纂委員会 1997 「太田市史 史通編 中世」
太田市史編纂委員会 1998 「太田市史 史通編 中邦」
尾島町教育委員会 1978 「長楽寺遺跡 世良田小学校改築工事に伴う
　　理文化財発掘調査報告書」
尾島町教育委員会 1984 「長楽寺遺跡 世良田保育園改築工事に伴う
　　理文化財発掘調査報告書」
尾島町教育委員会 1988 「上新田遺跡発掘調査報告書」
尾島町教育委員会 1988 「小角田下道跡」
尾島町教育委員会 1992 「長楽寺遺跡 庫裏改築工事に伴う理文化財
　　発掘調査報告書」
尾島町教育委員会 1992 「出塚大日南遺跡・柏田黒川道路・世良田下
　　江久津遺跡」
尾島町教育委員会 1992 「柏山山之神遺跡」
尾島町教育委員会 1994 「世良田諏訪下道跡」
尾島町教育委員会 1994 「柏山山之神遺跡」Ⅰ
尾島町教育委員会 1995 「世良田土星分岐跡」
尾島町教育委員会 1997 「小角田遺跡群」
尾島町教育委員会 1997 「新田の道路」
尾島町教育委員会 1997 「柏山山之神遺跡」一般国道354号バイパス道
　　路改築（改良）工事に伴う理文化財発掘調査報告書」
尾島町教育委員会 1998 「柏山山之神遺跡」Ⅲ
尾島町教育委員会 1998 「歌舞妓道路」
尾島町教育委員会 1998 「世良田諏訪下道跡」
尾島町教育委員会 2000 「前の新庭下道跡」
尾島町教育委員会 2004 「安寧寺森ノ内道路」
尾島町教育委員会 2005 「亀岡街道浜道跡」
尾島町教育委員会 2009 「世良田諏訪下道跡」
尾島町誌専門委員会 1998 「新町誌（通史編）上巻」
京都大学文学部国語国文学研究室編 1968 「諸本集成徳名類聚抄」
本文篇 亂闇商店
群馬県 1938 「上毛古墳鑑定」
群馬県教育委員会 1987 「西田駒遺跡発掘調査報告書」
群馬県教育委員会 1988 「群馬県の中世城跡」
群馬県教育委員会 1991 「西田駒遺跡発掘調査報告書II－下田島城跡の
　　調査－」
群馬県教育委員会 2017 「群馬県古墳地図」
群馬県史編纂委員会 1988 「群馬県史 資料編：原始古代I」
群馬県史編纂委員会 1986 「群馬県史 資料編2：原始古代II」
群馬県史編纂委員会 1981 「群馬県史 資料編3：原始古代III」
群馬県史編纂委員会 1988 「群馬県史 資料編4：原始古代IV」
群馬県史編纂委員会 1978 「群馬県史 資料編5：中世I」
群馬県史編纂委員会 1984 「群馬県史 資料編6：中世II」
群馬県史編纂委員会 1986 「群馬県史 資料編7：中世III」
群馬県史編纂委員会 1988 「群馬県史 資料編8：中世IV」
群馬県史編纂委員会 1988 「群馬県史 資料編16：近世I」
群馬県史編纂委員会 1993 「群馬県史 通史編：原始古代I」
群馬県史編纂委員会 1993 「群馬県史 通史編：原始古代II」
群馬県史編纂委員会 1988 「群馬県史 通史編：中世I」
群馬県史編纂委員会 1991 「群馬県史 通史編：近世I」
群馬県務部市町村課 2015 「平成27年度群馬県市町村要覧」
群馬県立伊勢崎女子高等学校地歴部 1962 「群馬県境北米国遺跡発掘
　　調査報告書」
群馬県立桐生高等学校地歴部・群馬県立桐生商業高等学校社会部 1960
「群馬県境町北米国道路発掘調査報告書」
群馬県文化事業振興会 1977 「上野町都村誌」
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981 「三ツ木道跡」
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982 「歌舞妓道路」
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985 「三ツ木道跡」一般国道17号（上武道
　　路）改築工事に伴う理文化財発掘調査報告書」
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985 「三ツ木道跡 早川河川改修工事に
　　伴う理文化財発掘調査報告書」
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986 「小角田前道路」
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991 「飯上二本松道路・下江田前道路」
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993 「安養寺森西道路・大館馬場道路・
　　阿久津川内道路」
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995 「小角田前I・II道路」
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995 「中江田八ツ橋道路」
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995 「下田中山道跡、下田中川久保遠
　　跡」
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999 「群馬県道路大事典」
群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000 「三ツ木道跡」
群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005 「西田島遺跡」
群馬県埋蔵文化財調査事業団 2015a 「世良田島環濠集落跡(1)」
群馬県埋蔵文化財調査事業団 2015b 「世良田島環濠集落跡(2)」
塙町 1957 「昭和歴史資料」10・14
塙町 1978 「町村古代遺跡」
塙町教育委員会 1979 「今井・三ツ木道跡発掘調査概報」
塙町教育委員会 1979 「下矢島遺跡発掘調査概報」
塙町教育委員会 1979 「新林遺跡第1次発掘調査概報」
塙町教育委員会 1980 「西林遺跡、下田道跡発掘調査の概要」
東京電力株式会社 1988 「西田・谷津・中道・上新田・今井道路発掘調
　　査報告書」
新田町教育委員会 1979 「中江田（原）消防站所道路」
新田町教育委員会 1985 「中江田道路」
新田町教育委員会 1988 「下道跡」
新田町教育委員会 1996 「中江田遺跡群 花園道路」
新田町教育委員会 1997 「中江田道路」
新田町教育委員会 1999 「八ツ橋道路」
新田町教育委員会 2000 「新田町内道路」Ⅱ
新田町教育委員会 2001 「上野井古墳群・陽原道路・中江田A道路」
新田町教育委員会 2001 「新田町内道路」Ⅲ
新田町教育委員会 2002 「新田町内道路」Ⅳ
新田町教育委員会 2003 「新田町内道路」Ⅴ
新田町教育委員会 2004 「新田町内道路」Ⅵ
新田町誌編纂委員会 1987 「新田町誌2：資料編(上)」
山崎一 1971-72 「群馬県古城址の研究(上)・群馬県文化事業振興会
　　マッピングぐんま・道路まっぷ」
<http://mapping.gunma.pref.gunma.jp/pref-gumma-iseki/Portal>

第3章 発見された遺構と遺物

世良田環濠集落遺跡は、平安時代末期の保元2(1157)年に、源義國の長男である新田義重が、父義國とともに再開発した上野国新田郡南西部の早川流域・石田川流域の「空闊の郷々」女塚・上江田・下江田・田中・大館・柏川・小角・押切・出塚・世良田・三木・上今井・下今井・上平塚・下平塚・木崎・長福寺・多古宇・八木沼の19郷について、鳥羽法皇御願寺である金剛心院を本家に、藤原北家花山院流藤原忠雅を領家として寄進され立券し、同年、藤原忠雅により新田義重が新田莊下司職に補任されて成立した上野國内最指の中世庄园である新田莊のただ中に所在する中世に形成された環濠集落遺跡として名高い遺跡である。

周囲には、北に金山城を築いた由良氏の重臣であった大沢氏の居館であったと伝える岩松陣屋跡や八坂神社、西に新田氏本家の館跡と伝えられる新田館跡、東に新田氏累代の臣臣であった船田氏の居館跡と伝えられる船田館跡、南に中世以来の古刹である長楽寺など、重要な中世の遺跡が点在している。

ただ、世良田環濠集落の実態は、遺跡範囲内の市街地化が甚だしいことなどもあり、今までのところ、ほとんど明らかにならなかったのが実情である。平成24年(2012)度に、世良田地区の圃場整備に先立って太田市教育委が実施した調査によって、中世の環濠集落の堀が早川まで続いていたことが明らかとなったが(太田市教育委編『世良田地区(は場整備)発掘調査報告書 上新田遺跡・世良田環濠集落・歌舞妓遺跡・世良田陣屋遺跡・FP泥流下遺跡群・下原古墳群』2017)、平成26年2月から12月まで断続的に当事業団が実施した世良田交差点改良工事に伴う一連の発掘調査では、残念ながら、これに隣接する堀跡は発見されず、明確な中世の遺構もほとんど発見することができなかつた(群馬県埋蔵文化財調査事業団編『世良田環濠集落遺跡(1)』2015、同『世良田環濠集落遺跡(2)』2015)。

世良田環濠集落の範囲は、西を早川で限り、北辺、東辺、南辺を人工的な堀で囲繞する方1kmの広さを有したと考えられ、環濠内には長楽寺、八坂神社、総持寺館などが

所在し、宿や市が営まれていたものと考えられている。北辺と東辺の堀は一連のものであり、集落の北東部で鉤の手状に屈曲しており、環濠集落の北東隅部は、戦国期16世紀に築城された世良田今井城によって破壊されており、環濠の下限は15世紀頃と考えられている。

一方、環濠集落の造営年代については、長楽寺境内地の南限が環濠集落の南辺堀となっていることから見て、環濠集落の形が整えられた後に長楽寺境内地が設定されたとする見方があり、その所説に従うならば、長楽寺の創建年代である承久3(1221)年より遡るとみるのが自然ということになる。そうなると、世良田環濠集落を造営したのは、新田莊を立莊した新田義重の4男で、環濠集落の西辺に位置する総持寺館の主であり、世良田郷地頭で、長楽寺の建立者でもある得川義季である蓋然性が高いということになる(須田茂「世良田環濠集落遺跡-中世世良田の景観復元に向けて-」『群馬地名だより』92、群馬地名研究会、2017)。

平成28年度の調査では、世良田交差点東側における一般県道錦貫塙線の南北両側部分と、交差点南側の主要地方道伊勢崎深谷線の東西両側の7箇所、幅員約5m、総延長約132.4mを対象とし、発掘調査面積は442.7m²であった。

平成25年度に調査された一般県道錦貫塙線(当時:国道354号)の世良田交差点東側の、北側下り車線側に面した最も東側の調査区であるI-1区のさらに東側に隣接するI-5・6区と、平成26年度に調査された南側上り車線に面した最も東側の調査区であるII-7区のさらに東側に隣接するII-9・10区、平成26年度に調査された主要地方道伊勢崎深谷線の東側下り車線に面した最も南側の調査区であるII-1区のさらに南側に隣接したII-11・12区、西側上り車線に面した最も南側の調査区であるIII-1区のさらに南側に隣接したIII-6区の計7区画を対象として実施された。

本報告書で取り扱う平成28年度の発掘調査では、先述したように道路に面した商店や家屋へのでは入り口や、ライフラインの埋設箇所等によって、各調査区が細かく

第3章 発見された遺構と遺物

分断されていることから、基本的に調査区ごとに遺構番号が付かれていることや、検出されたすべての遺構・遺物が中近世のものと見られることから、以下では、調査区ごとに、発見された遺構・遺物について報告する。

本遺跡は、市街地化が進んだ地域の中に所在しており、しかも今回、調査の対象となった地域は、平成25・26年度の調査箇所と同様、直前まで宅地として利用されていたため、ゴミ穴などが沢山掘られるなど、現代の擾乱が数多く、遺構の残存状態は、必ずしも良好ではなかった。

そのような中で調査できた遺構はI-5・6区、II-9～12区、III-6区あわせて、掘立柱建物1棟、溝3条、溝状遺構1箇所、土坑43基、井戸5基であった(第3表)。それぞれの調査区が狭小であるため、遺構の全容を調査出来たものは多くはなく、多くの遺構が調査区外までかかっていたり、部分的に破壊されたりしていた。各区とも遺構確認面の起伏が甚だしいのが特色である。

この遺跡において最も多く検出された遺構である土坑は、調査区の全域に分布しており、とくに集中箇所はない。形態には様々なものを見られるので、用途も様々なものがあったらしい。井戸も市街地にあるためか、5基と比較的多い。いずれも素堀の井戸である。溝は区画溝の一部と見られるものがあった。

以下では、調査区ごとに、検出された各遺構について

述べる。なお、検出された遺構については、第3表検出遺構一覧表にまとめた。また、出土した遺物の図版は、すべて写真図版掲載頁に掲載してある。各出土遺物の詳細については、第4表遺物観察表も併せて参照されたい。

第1節 I-5区から検出された 遺構と出土した遺物

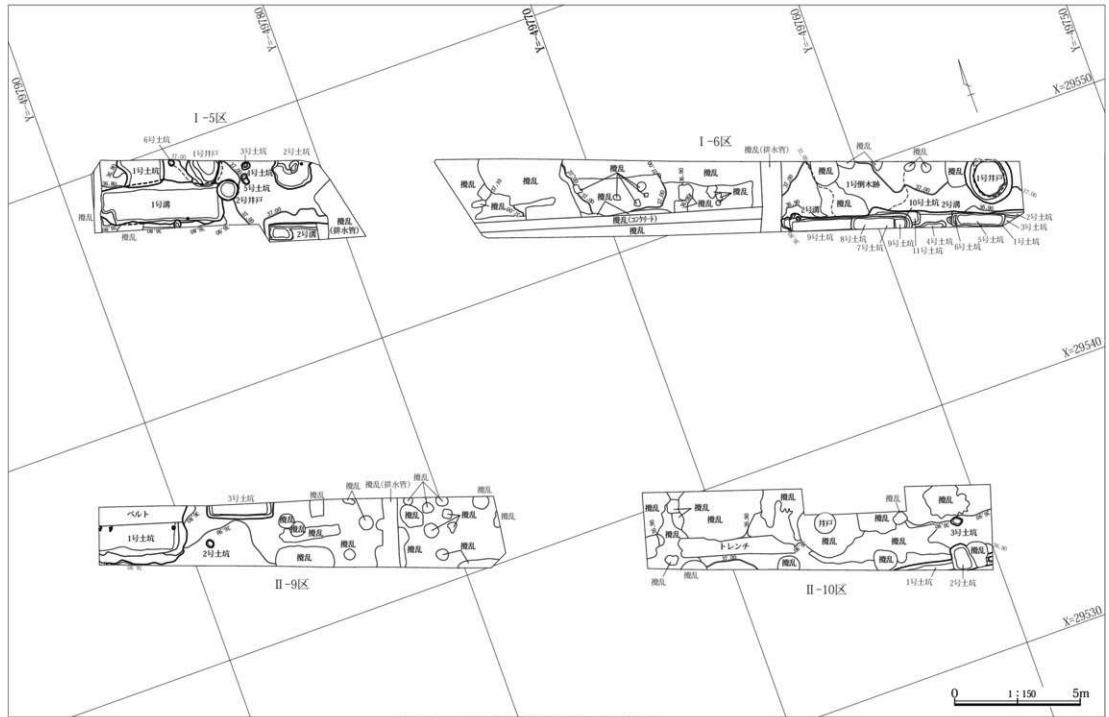
I区は一般県道綿貫塙線の世良田交差点東側の、北側下り車線側に面する調査区である。平成25年度に実施した発掘調査において、世良田交差点北東側角から道路に沿って東南東へ約55mに亘って、東側からI-1～4区の調査区が設定され、中近世の溝3条、土坑41基、井戸4基、ピット44基が検出された。

本報告書で報告する平成28年度に調査されたI-5区は、平成25年度に調査された最東端の調査区であるI-1区の東端から約2m東側に隣接する北西—南東方向に細長い台形状を呈する調査区である。本調査区において検出された遺構は溝2条、土坑6基、井戸2基であった。2条の溝は調査区の南側から、6基の土坑は調査区の北側から、2基の井戸は調査区のほぼ中央北寄りの位置から検出された。

第3表 検出遺構一覧表

区	遺構種類	数	遺構名称	時期
I-5区	溝	2	1・2号溝	近世以降
	土坑	6	1～6号土坑	近世以降
	井戸	2	1・2号井戸	中近世
I-6区	溝	1	2号溝	中近世
	土坑	11	1～11号土坑	中近世
	井戸	1	1号井戸	中近世
II-9区	土坑	3	1～3号土坑	中近世
II-10区	土坑	3	1～3号土坑	中近世
II-11区	土坑	8	1～8号土坑	中世
	井戸	2	1・2号井戸	中世
II-12区	掘立柱建物	1	1号掘立柱建物	中世
	土坑	12	2・3・5～14号土坑	中世
III-6区	溝状遺構	1	4号溝状遺構	中世

遺構種類	検出件数
掘立柱建物	1
溝	3
溝状遺構	1
土坑	43
井戸	5



第7図 I-5区、I-6区、II-9区、II-10区全体図

1. 溝

本調査区からは2条の溝が検出された。いずれも調査区の南半部から検出されている。

調査区の西端付近から検出された1号溝は北西-南東方向に長大な長方形状を呈する土坑状の溝である。北西端・南東端とも調査範囲内において検出されている。

調査区の南東端付近から検出された2号溝も、北西-南東方向に走向する溝であるが、調査区内においては、北西端は調査区外に出、南東端は攪乱されているが、溝の規模・形状、走向方向の類似から、南東側I-6区の南東側半分の南端から検出された溝が、本溝の南東側の継続部分と考えられる。

(1) I-5区1号溝(第8図、PL. 1・12)

位置 I-5区の南西側。X=29556~559、Y=-49784~788。

重複 I-5区1号土坑、I-5区1号井戸の南端とI-5区2号井戸の西端を掘り込む。

主軸方位 N-73°-W。

規模 検出全長4.50m、上幅1.75m、下幅1.20m、深さ0.50m。

埋土 上層から中層にかけて灰黄褐色土(10YR4/2)、壁際から下層にかけて褐色土(7.5YR4/3)及び明褐灰色土(5YR7/1)がレンズ状に堆積している。

遺物 東寄りの南壁に懸かって19世紀前葉～中葉の肥前磁器染付碗口縁部1/2が1点出土。X=29557.057、Y=-349785.661、標高36.628m(PL.12-1)。また、埋土中より近現代灰陶器鉢底部片が1点出土(PL.12-2)。

また、非掲載であるが、埋土中から近世国産磁器片8点(20g)、近世国産施釉陶器片4点(20g)、近世在地系皿片2点(5g)、近世・近現代在地系その他陶器・土器片10点(80g)、近世・近現代瓦片5点(310g)、近現代陶磁器片21点(140g)、近現代ガラス片1点(5g)、用途不明鉄製品1点等が出土している。

所見 北西-南東方向に長い不整開丸長方形状を呈し、北西端は攪乱されているが、溝底の端部が辛うじて検出されている。南東端もI-5区2号井戸に掘り込まれ、破壊されているが、端部はおむね検出されている。溝と言うよりは長大な土坑と言った方が良い形状であるが、調査時に「溝」して取り扱っているので、溝として報

第1節 I-5区から検出された遺構と出土した遺物

告する。

縁辺と底面との比高差はおむね0.2~0.3m前後、底面の標高は36.48~36.53mで、おむね36.51~36.53mでほぼ平坦に地山を削り出して造られている。壁はやや斜めに、北側ではやや緩やかに立ち上がっている。

堆積土や形状からは水流の痕跡は明確には確認することができなかった。

時期 近世以降のものと考えられる。

(2) I-5区2号溝(第8図、PL. 1)

位置 I-5区の南東端部。X=29554~555、Y=-49780~782。

重複 なし。

主軸方位 N-72°-W。

規模 検出全長4.78m、検出上幅0.72m、検出下幅0.46m、深さ1.00m。

埋土 鈍い黄褐色土(10YR6/3)が堆積している。

遺物 非掲載であるが、埋土中から用途不明鉄製品1点が出土している。

所見 北西-南東方向に長い溝であるが、南東端部を攪乱され、北西端と南端が調査区外に出るため、全容は不明である。

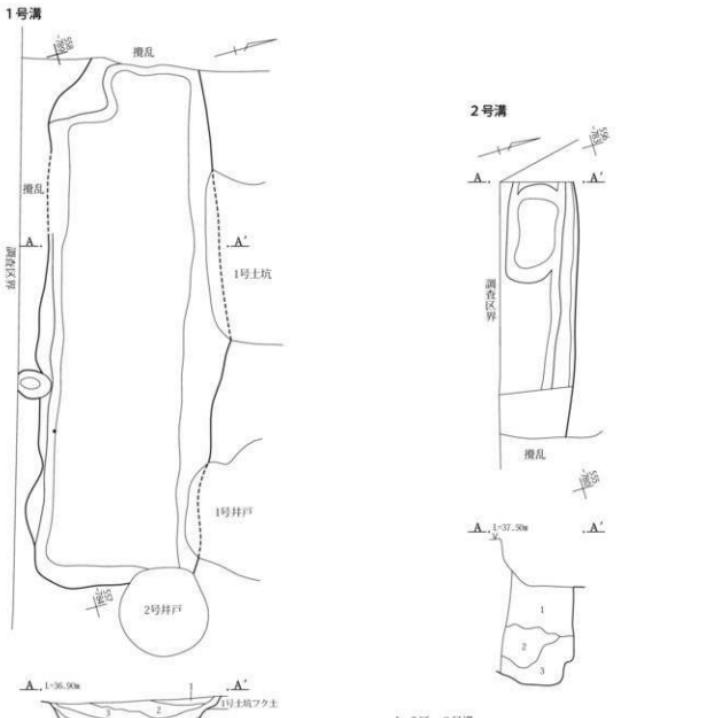
検出範囲内では、底面の西側に、一段低く振り窪められた東西に長い楕円形土坑状(長径0.92m・短径0.52m・深さ0.14m)の浅い掘り込みがある。底面は東が高く、西が低くなってしまっており、西端の底面標高は36.06m、東端の底面標高は36.17mで、確認面との比高差はおむね0.8~1.0m程度である。深くしっかりとした掘方を有している。

I-5区1号溝と同様、堆積土や形状等からは水流の痕跡を明確に確認することは出来なかった。

なお、底面に土坑状の掘り窪みが為されている点が共通することや、掘方の形状、走向などが挙げることから、I-6区東半部の、調査区南端において検出された溝が、本溝の南東側に継続する部分と考えられるので、I-6区においても同じく2号溝という遺構名を付している。

また、本調査区の北西側を平成25年度に調査しているが、本溝の北西側継続部分に相当する遺構は検出されていない。

時期 近世以降のものと考えられる。



I-5区 1号溝

- 1層 灰黄褐色(10YR4/2)粘(5YR7/8)軽石微量。粗粒状白色軽石粒微量。
細粒白色軽石粒少量。
- 2層 灰黄褐色(10YR4/2)粘(5YR7/8)砂質ローム多量。粗粒状白色軽石粒含有(ϕ 0.8~1.0cm)。粗粒状ローム若干(ϕ 0.6cm)。粒状ローム若干(ϕ 0.5~0.8cm)塊状明礬灰(5YR7/1)多量。粒状炭化物微量(ϕ 1.0~1.4cm)。
- 3層 灰黄褐色(10YR4/2)小塊状粘(5YR7/8)砂質ローム若干(ϕ 1.2~1.8cm)。粒状炭化物微量。
- 4層 褐(7.5YR4/3)中輕砂土のラミナ(灰褐色(7.5YR6/2))。白色軽石粒若干。
- 5層 明礬灰(5YR7/1)砂質(壁崩落)。
- 6層 灰黄褐色(10YR4/2)白色軽石粒少量。

I-5区 2号溝

- 1層 に赤い黄褐色(10YR6/3)小塊状黄褐色(10YR6/3)若干。
- 2層 に赤い黄褐色(10YR6/3)と赤い黄褐色(10YR7/3)の混土。
- 3層 に赤い黄褐色(10YR6/3)に赤い黄褐色(10YR7/3)含有。

0 1:40 1m

第8図 I-5区1・2号溝

第1節 I-5区から検出された遺構と出土した遺物

2. 土坑

本調査区においては、北半部において6基の土坑が検出された。I-5区1・2号土坑は平面形態が大きく、比較的深い土坑であり、3～6号土坑はおむね小規模で比較的深い掘方を有するピット状の土坑である。6号土坑は、1号井戸の西端縁辺部が完全に埋没した後に掘込まれており、かなり新しい時期の土坑であると考えられる。

(1) I-5区1号土坑(第9図、PL. 1・2)

位置 調査区の北西端付近。調査区北壁に懸かる。6号土坑の西側に隣接する。 $X=29558\sim560$ 、 $Y=-49785\sim787$ 。

重複 南辺をI-5区1号溝に掘り込まれる。

主軸方位 $N-15^\circ-E$ 。

規模 検出長径1.06m、検出短径1.85m、深さ0.27m。

平面形状 北側が調査区外に出ているため全容は不明ではあるが、ほぼ不整長方形を呈していたものと推測される。

断面形状 不整形を呈する。

埋土 鈍い橙色土(7.5YR7/4)と褐色土(10YR4/1)との混土が堆積している。

遺物 非掲載ではあるが、中世瓦片6点(420g)、近世国产磁器片56点(920g)、近世国产施釉陶器片56点(920g)、近世国产焼締陶器片2点(190g)、近世・近代在地系焰烙・鍋片46点(1800g)、近世・近代在地系その他土器陶器類片35点(2990g)、近世・近代瓦片31点(5780g)、近現代陶磁器片8点(120g)、近現代十能瓦片1点(50g)、その他近現代土器陶器類1点(90g)が出土している。

所見 北側が調査区外に出、南側はI-5区1号溝に掘り込まれて破壊されているため、正確な規模形状は不明である。掘方も比較的浅く、底面も若干凹凸に富む。確認面の標高は36.80～98m前後、底面の標高は36.68～78mで、土坑の用途・機能は不明である。壁面はなだらかに立ち上がっている。

時期 近世以降のものと考えられる。

(2) I-5区2号土坑(第9図、PL. 2・12)

位置 調査区の北東端付近。調査区北壁に懸かる。I-5区3～5号土坑の東側に隣接する。 $X=29556\sim558$ 、 Y

$=-49780\sim781$ 。

重複 なし。

主軸方位 $N-22^\circ-E$ 。

規模 検出長径1.14m、検出短径1.51m、深さ0.45m。

平面形状 北側が調査区外に出ているため全容は不明ではあるが、ほぼ不整円形を呈していたものと推測される。

断面形状 不整形を呈する。

埋土 小塊状の鈍い橙色土(7.5YR7/4)を少量含む、粗粒状の灰黄褐色土(10YR4/2)が堆積している。

遺物 北東側床面直上($X=29557.578$ 、 $Y=-49780.685$ ・標高36.964m)より文久永宝(文久3(1863)年2月から慶応3(1867)年まで鑄造)1点が出土(PL. 12-3)。銘文の「文」の字が楷書体であり、当時の若年寄であった小笠原宅岐守長行(のちに老中・外國事務總裁、肥前唐津藩主、文政5(1822)年～明治24(1891)年)の筆によるもので「真文」と呼ばれているものと見られる。文久永宝は、本遺跡では平成26年度調査において II区12・16号土坑、1号竪穴などからも出土している。

なお、非掲載ではあるが、埋土中から近世・近現代在地系その他土器・陶磁器類片2点(40g)、近世・近現代瓦片2点(70g)が出土している。

所見 北側が調査区外に出ているため、正確な規模形状は不明である。掘方も比較的浅く、底面も凹凸に富み、全体的には浅いが、検出され範囲の中央付近では、深く掘り込まれている。確認面の標高は37.03～38m前後、底面の標高はおむね36.89～37.00m前後で、土坑の用途・機能は不明である。壁面は比較的急に立ち上がっている。

時期 近世以降のものと考えられる。

(3) I-5区3号土坑(第9図、PL. 2)

位置 調査区の中央からやや西寄りの北端。I-5区4・5号土坑のすぐ北側に隣接する。 $X=29558$ 、 $Y=-49782$ 。

重複 なし。

主軸方位 $N-90^\circ$ 。

規模 長径0.34m、短径0.26m、深さ0.45m。

平面形状 東西に長い梢円形を呈する。

断面形状 不整U字形を呈する。

埋土 小塊状の鈍い橙色土(7.5YR7/4)を含む灰黄褐色

第10章 発見された遺構と遺物

土(10YR4/2)が堆積している。

遺物 なし。

所見 I-5区3~6号土坑は、I-5区1・2号土坑とは規模形状が異なり、小規模で、比較的深い掘方を有するピット状の土坑である。これらの遺構名称は、調査時に「土坑」としているので、それに従い、土坑として報告する。本土坑も小規模ながらしっかりとした掘方を有している。用途・機能については明らかに出来なかった。

時期 中世のものと考えられる。

(4) I-5区4号土坑(第9図、PL. 2)

位置 調査区の中央からやや西寄りの北端。I-5区3号

土坑のすぐ南北側に近接する。X=29557、Y=-49782~783。

重複 I-5区5号土坑の北半を掘り込んで破壊している。

主軸方位 N-90°。

規模 長径0.24m、短径0.21m、深さ0.19m。

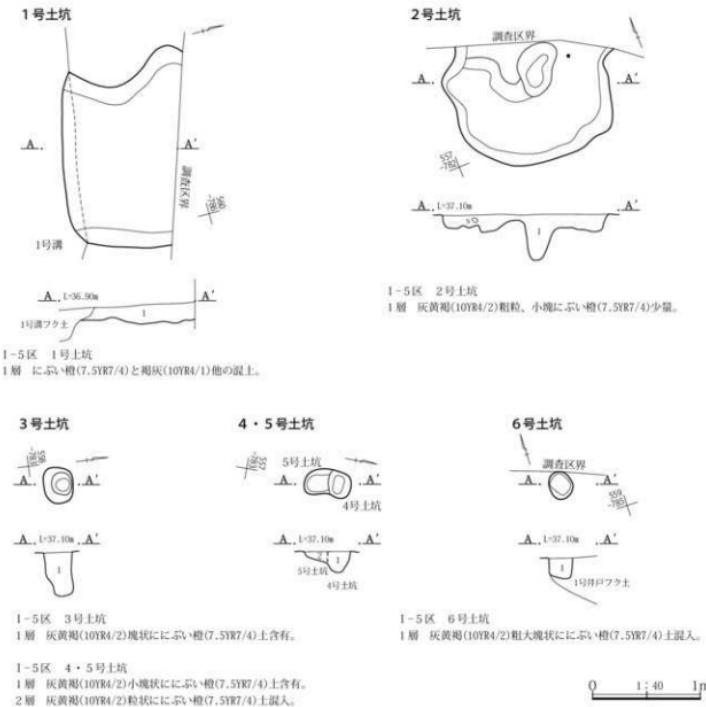
平面形状 東西に長い楕円形状を呈する。

断面形状 不整U字形状を呈する。

埋土 小塊状の鈍い橙色土(7.5YR7/4)を含む灰黄褐色土(10YR4/2)が堆積している。

遺物 なし。

所見 本土坑も小規模ながら比較的しっかりとした掘方を有している。用途・機能については明らかに出来なかった。



第9図 I-5区 1~6号土坑

時期 中世のものと考えられる。

(5) I-5区5号土坑(第9図、PL. 2)

位置 調査区の中央からやや西寄りの北端。I-5区3号土坑のすぐ南北側に隣接する。X=29557、Y=-49782～783。

重複 北半をI-5区4号土坑に掘り込まれ、破壊されている。

主軸方位 N-13°-W。

規模 長径0.24m、短径0.21m、深さ0.19m。

平面形状 北側をI-5区4号土坑に掘り込まれているため、全容は不明であるが、南北に長い梢円形状を呈していたものと思われる。

断面形状 北側を掘り込まれているため、不整形形状を呈している。

埋土 粒状の鈍い橙色土(7.5YR7/4)を含む灰黄褐色土(10YR4/2)が堆積している。

遺物 なし。

所見 北側をI-5区4号土坑に掘り込まれているため、不明な点が多い。用途・機能についても明らかには出来なかつた。

時期 中世のものと考えられる。

(6) I-5区6号土坑(第9図、PL. 2)

位置 調査区の中央から北西に寄った位置の北端。I-5区1号土坑の東側に隣接する。X=29559、Y=-49785。

重複 1号井戸西縁辺を掘り込む。

主軸方位 N-14°-W。

規模 長径0.25m、短径0.20m、深さ0.19m。

平面形状 北西-南東方向にやや長い梢円形状を呈する。

断面形状 長方形状を呈している。

埋土 粗大塊状の鈍い橙色土(7.5YR7/4)が混入する灰黄褐色土(10YR4/2)が堆積している。

遺物 なし。

所見 I-5区3～5号土坑と類似した規模・形状を呈する小型の土坑である。用途・機能についても明らかには出来なかつた。

時期 中世のものと考えられる。

3.井戸

本調査区からは2基の井戸が検出された。いずれも調査区中央部の北半分から検出されており、比較的小規模な素掘りの井戸である。

(1) I-5区1号井戸(第10図、PL. 2)

位置 調査区のほぼ中央、北寄り。北壁に懸かる。I-5区2号井戸のすぐ北西側に隣接する。X=24557～559、Y=-49783～785。

重複 なし。

主軸方位 N-17°-E。

規模 検出上幅1.32m、検出下幅0.56～0.63m、検出範囲内の深さ1.49m。

平面形状 北側が調査区外に出、南側はI-5区1号溝に掘り込まれて破壊され、東側は擾乱されているため詳細は不明である。

断面形状 上端が広がった漏斗状を呈していたものと推測されるが、北側が調査区外に出、南側はI-5区1号溝に掘り込まれて破壊され、東側が擾乱されているため、不明な点が大きい。

埋土 上層から下層にかけてロームを含む黒褐色土(10YR3/1)をベースとする土が堆積している。

遺物 非鉄製であるが、銭種不明の銭貨が1点、ほぼ完形の近代の鉄釘1点が出土している。

所見 緑辺部に浅いテラス状の掘り込みが施されていたものと考えられるが、西側と南側を破壊され、北側が調査区外に出たため、正確な形状は不明である。しっかりと掘方を有する素掘りの井戸で、底面も検出することが出来た。底面は平坦である。

周辺部の標高は36.98～99m前後、底部の標高は35.51～57m前後である。

時期 近世以降のものと考えられる。

(2) I-5区2号井戸(第10図、PL. 2-12)

位置 調査区のほぼ中央。I-5区1号井戸のすぐ南東側に近い接し、I-5区3～5号土坑の南西側に隣接する。X=24557、Y=-49783～784。

重複 1号溝の北東端を掘り込んで破壊している。

主軸方位 N-0°。

第3章 発見された遺構と遺物

規模 上幅0.82m、下幅0.55~0.57m、深さ2.83m。

平面形状 ほぼ円形状を呈する。

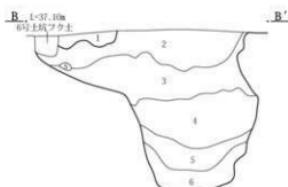
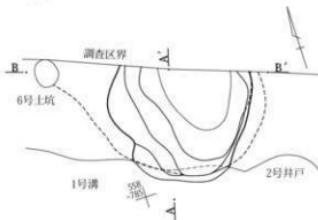
断面形状 壁はほぼ垂直に落ち、深く長い長方形を呈する。

埋土 上層から中層にかけて黒褐色土(10YR3/1)をベー

スとする土が堆積し、その下層に褐色土(10YR3/1)が堆積しているが、幅が狭く、崩落の危険もあったため、安全確保と事故等回避の観点から、口縁部から約1.23mまでしか土層断面を記録し得なかった。

遺物 埋土中より中世のものと考えられる在地系土器皿

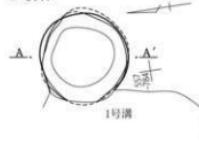
1号井戸



1-5区 1号井戸

- 1層 にせい塊(7.5YR7/4)と褐灰(10YR4/1)他の混土。
- 2層 黒褐(10YR3/1)塊状ローム少量。白色軽石粒φ10mm程度。粒状炭化物若干。
- 3層 黒褐(10YR3/1)粗粒ローム。白色軽石粒φ0.5cm。
- 4層 黒褐(10YR3/1)塊状ローム、多量。粗粒ローム混入。
- 5層 3層上に近似。塊状ローム少量。
- 6層 黒褐(10YR3/1)粗粒状ローム微量。塊状ローム土若干。

2号井戸



1-5区 2号井戸



1-5区 2号井戸

- 1層 黒褐(10YR3/1)焼土粒子少量。白色軽石粒φ10mm程度。粒状炭化物若干。
- 2層 黒褐(10YR3/1)粗粒黄褐(7.5YR7/4)粒子若干。粒状炭化物少量。
- 3層 黒褐(10YR3/1)小塊黄褐(7.5YR7/4)少量。粒状炭化物少量。
- 4層 褐灰(10YR4/1)小塊黄褐(7.5YR7/4)少量。粒状炭化物少量。

0 1:40 1m

第10図 1-5区 1・2号井戸

底部片2点(PL.12-4・5)、中世の常滑陶器壺か甕肩部片2点(PL.12-6・7)、中世の常滑陶器壺か瓶底部片1点(PL.12-8)、非掲載であるが、埋土中から近代の鉄釘先端部～体部片1点が出土した。

なお、非掲載ではあるが、中世国産焼締陶器片3点(70g)、中世瓦片6点(900g)、近世・近現代瓦片13点(790g)が出土している。

所見 平面形態は小規模であるが、深く、しっかりとした掘方を有する素掘りの井戸、口縁部からの深さ約2.83m前後の部分において底面が検出された。底面は平坦である。

周辺部の標高は36.97～37.01m前後、底部の標高は34.14～17m前後である。

時期 中世のものと考えられる。

4.I-5区遺構外出土遺物

本調査区の遺構外からは13点の遺物が出土した。いずれも埋土中からの出土である。

PL.12-9は19世紀の肥前磁器かと考えられる染付紅皿1/2片。

PL.12-10～12は、近現代の製作地不詳時期染付小杯で、10・11は完形品、12は1/2片。

PL.12-13は19世紀中葉～後葉の肥前磁器染付碗体部～底部片。

PL.12-14は近現代の瀬戸・美濃時期染付丸碗1/2片。

PL.12-15は19世紀中葉の製作地不詳時期染付端反碗1/3片。

PL.12-16は18世紀後葉～19世紀中葉の肥前磁器染付鉢底部片。

PL.12-17は近現代の肥前磁器染付鉢口縁部1/3片。

PL.12-18は19世紀のものと考えられる製作地不詳陶器灯火皿1/2片。

PL.12-19は近現代の砥平陶器鉢口縁部片。

PL.13-20・21は近世以降の瓦片。

なお、非掲載ではあるが、表土中から近世国産磁器片5点(20g)、近世・近現代在地系その他土器陶器類10点(680g)、近世・近現代瓦片53点(7870g)、近現代陶器片39点(610g)、十能瓦片5点(1070g)、時期不明土器類片2点(10g)が出土している。

第2節 I-6区から検出された遺構と出土した遺物

I-6区は、I-5区の東端から生活道路を挟んで約4.3m南東側に隣接する北西～南東方向に細長い長大な台形状を呈する調査区である。しかしながら、北西側約半分強の部分は大きく攪乱されており、遺構が全く検出出来ない状況であった。そのため、調査が出来たのは、I-6区南東側約半分弱の範囲であったが、調査可能な部分においても、大きく攪乱されていた。

本調査区において検出された遺構は溝1条、土坑11基、井戸1基であった。溝は調査区の南側から、11基の土坑はいずれも溝の範囲内から、井戸は調査区の北東隅付近の位置からそれぞれ検出された。

本調査区において検出された11基の土坑は、いずれもI-6区2号溝の範囲内から逆説することなく、2号溝内に、ほぼ2号溝と走行方向を同一ないし近似して掘り込まれているため、2号溝と間わりなく掘り込まれた土坑ではなく、恰も、I-5区2号溝2号溝の北端に一段深く掘り込薄められた部分と同様、2号溝の一部として掘り込まれたものと考えるのが妥当であろう。

1.溝

本調査区からは1条の溝が検出された。調査区の南端部から検出されている。先述した通り、溝の規模・形状、走向方向などからI-5区において検出された2号溝の、南東側に継続する部分であると考えられ、調査時においても、今回の調査としては異例の、I-5区と同じ2号溝と命名されている。本報告書では、便宜的に、I-5区側で検出された2号溝をI-5区2号溝、I-6区側から検出された2号溝をI-6区2号溝と称するが、調査時における、一連の溝であるという見解を肯定する。

2号溝は、北西～南東方向に走向する溝で、調査区内においては、北西・南東端は調査区外へと延びている。

世良田環濠集落遺跡における、これまでの当事業団及び太田市教育委員会による発掘調査によって、世良田環濠集落内には、集落を大きく囲繞する堀の他に、環濠内に、幾筋もの溝が縱横に掘り込まれていたことが判明しており、集落内のにおける土地区画や給・排水等に利用さ

第3章 発見された遺構と遺物

れたものと考えられている。I-5・6区に亘って検出された2号溝も、こうした溝の一つであったものと考えられる。

(1) I-6区2号溝(第11図、PL. 3)

位置 I-6区南東半部の南端。1号井戸の南側に隣接する。X=29545~559、Y=-49754~763。

重複 I-11号土坑と重複。

主軸方位 N-72°-W。

規模 検出全長9.67m、検出土幅0.89m、検出土幅0.52m、深さ0.25m。

埋土 ラミナ状堆積に粒状炭化物を少量含有する灰褐色土(7.5YR6/2)が挿まれる灰褐色細砂質土(7.5YR5/2)が堆積している。I-5区2号溝の堆積土に類似。

遺物 非掲載であるが、埋土中から用途不明鉄製品1点が出土している。

所見 南側壁は調査区外に出ているが、北西-南東方向に走向している。溝底には、一段深く掘り窪められた計11基の土坑状の掘り込みが為されており、底面は凹凸が甚だしい。土坑が掘り込まれていない部分においては、縁辺との比高差はおよそ0.20~0.25m前後である。

土坑が掘り込まれていない部分における底面の標高は36.70~36.79mで、ほぼ平坦に地山を削り出して造られている。壁はほぼ垂直に立ち上がりっている。

堆積土や形状からは水流の痕跡は明確には確認することが出来なかった。

時期 中近世のものと考えられる。

2. 土坑

本調査区においては、I-6区2号溝の範囲内において11基の土坑が検出された。先述したように、いずれも溝内から逸脱することなく、ほぼ走行方向を同一しないし近似して掘り込まれているため、溝底に一段深く掘り込まされた部分と考えるのが妥当であろう。なお、I-6区1・7・8号土坑は、土層断面によってのみ確認出来た土坑である。

I-6区1号土坑とI-6区2号土坑はI-6区5号土坑に掘り込まれ、I-6区3号土坑を掘り込んでいる。

I-6区1・2号土坑の新旧関係は不明である。

I-6区7・8号土坑はI-6区9号土坑を掘り込んで

おり、I-6区9号土坑はI-6区10号土坑を掘り込んでいる。また、I-6区7号土坑はI-6区8号土坑を掘り込んでいる。新しい順にI-6区7号土坑、I-6区8号土坑、I-6区9号土坑、I-6区10号土坑、I-6区11号土坑の順ということになる。

I-6区4号土坑は、他のいずれの土坑とも重複関係がないため、これらの土坑群内における新旧関係は不明である。

なお、I-6区土坑群より、非掲載ではあるが、近世國際施陶器片2点(50g)、近世・近現代在地系その他土器陶器類片14点(150g)、近現代陶磁器片2点(5g)が出土している。

(1) I-6区1号土坑(第11図、PL. 3)

位置 調査区の南東端付近。X=29545、Y=-49755。

重複 I-6区5号土坑に掘り込まれる。I-6区3号土坑を掘り込む。I-6区2号土坑とも重複するが、新旧関係は不明である。

主軸方位 不明。

規模 土層断面図上で確認出来るのみなので不明。

平面形状 土層断面図上で確認出来るのみなので不明。

断面形状 不明。

埋土 径0.5~0.8cmの粗粒状ローム土(10YR7/3)が混入し、径1.8~2.0cmの塊状ローム土を少量含む鈍い橙色土(10YR4/3)が堆積している。

遺物 なし。

所見 I-6区2号溝の溝底に一段深く掘り窪められた部分の一つであるが、土層断面図上では確認出来ないため、詳細は不明である。

時期 中近世のものと考えられる。

(2) I-6区2号土坑(第11図、PL. 3)

位置 調査区の南東端付近。X=29545~246、Y=-49754~755。

重複 I-6区5号土坑に掘り込まれる。I-6区3号土坑を掘り込む。I-6区2号土坑とも重複するが、新旧関係は不明である。

主軸方位 不明。

規模 土層断面図上で確認出来るのみなので不明。深さ0.17m。

第2節 I-6区から検出された遺構と出土した遺物

平面形状 土層断面図上で確認出来るのみなので不明。

断面形状 底面が長い長方形状を呈するものと思われる。

埋土 粒状砂質明褐色ローム土(10YR6/6)を少量含む鈍い黄橙色土(10YR5/4)が堆積している。

遺物 なし。

所見 I-6区2号溝の溝底に一段深く掘り窪められた部分の一つであるが、土層断面図上でしか確認出来ないため、詳細は不明である。

時期 中近世のものと考えられる。

(3) I-6区3号土坑(第11図、PL. 3)

位置 調査区の北東端付近。X=29545～546、Y=-49754～-757。

重複 I-6区1・2・5号土坑に掘り込まれる。

主軸方位 N-66°-W。

規模 檜出長径0.95m、検出短径0.40m、深さ0.44m。

平面形状 東側が調査区外に出、西側を5号土坑に掘り込まれているため、全容は不明である。

断面形状 底面が長い長方形状を呈するものと思われる。

埋土 粒状ローム土、粗粒ローム土が混入する鈍い褐色土(7.5YR5/4)が堆積している。

遺物 なし。

時期 中近世のものと考えられる。

(4) I-6区4号土坑(第11図、PL. 3)

位置 調査区の東寄りの南端。南壁に懸かる。X=29546～547、Y=-49757～-758。

重複 なし。

主軸方位 N-84°-W。

規模 檜出長径1.16m、検出短径0.26m、深さ0.13m。

平面形状 東西に長い隅丸長方形状を呈していたものと思われる。

断面形状 浅く、扁平な長方形状を呈する。

埋土 粒状ローム土を微量、白色輕石粒(径約1.2cm程度)、浅黄橙色土(7.5YR8/8)をごく微量含む灰褐色土(7.5YR4/2)が堆積している。

遺物 なし。

所見 I-6区2号溝の溝底に一段深く掘り込んだ土坑の一つで、他の土坑とは規模形状、主軸方位が若干異なつ

ている。

時期 中近世のものと考えられる。

(5) I-6区5号土坑(第11・12図、PL. 3)

位置 調査区の南東端。X=29545～546、Y=-49755～-757。

重複 1～3・6号土坑を掘り込む。

主軸方位 N-70°-W。

規模 長径1.95m、短径0.53m、深さ0.50m。

平面形状 北西-南東方向に長い隅丸長方形状を呈する。

断面形状 長方形状を呈する。

埋土 不明。

遺物 なし。

所見 I-6区2号溝の溝底に一段深く掘り込んだ土坑の一つで、2号溝内南東側では最後に掘り込まれた部分に当たる。

時期 中近世のものと考えられる。

(6) I-6区6号土坑(第11・12図、PL. 3)

位置 調査区の南東端。X=29546、Y=-49756～-757。

重複 大半をI-6区5号土坑に掘り込まれ、破壊されている。

主軸方位 N-70°-W。

規模 檜出長径0.17m、短径0.48m、深さ0.45m。

平面形状 I-6区5号土坑と同様、北西-南東方向に長い隅丸長方形状を呈していたものと思われる。

断面形状 隅丸長方形状を呈する。

埋土 不明。

遺物 なし。

所見 I-6区2号溝の溝底に一段深く掘り込んだ土坑の一つで、北西側はほとんどをI-6区5号土坑に掘り込まれ、破壊されており、北西端が残存しているに過ぎず、全容は不明である。

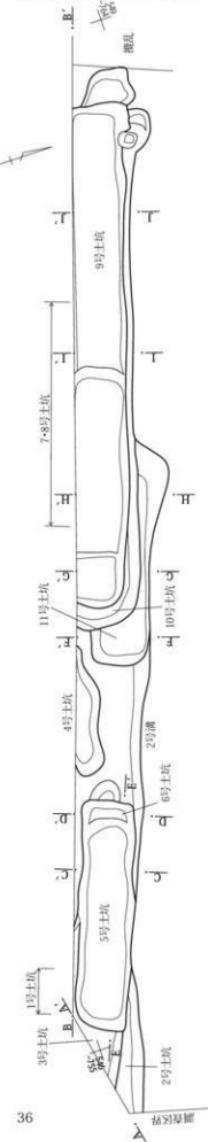
時期 中近世のものと考えられる。

(7) I-6区7号土坑(第11・12図、PL. 3)

位置 調査区の中央、南端。南壁に懸かる。X=29547、Y=-49759～-761。

重複 I-6区8～10号土坑を掘り込んで破壊する。

主軸方位 N-71°-W。



- 1-6区 墓群(2号溝、1~11号土坑)
- 1層 灰褐色(50R4/2)ラミナ状・粒状灰白色少量(灰褐色7.5YR8/2)。全木細材。1~5区の2箇の覆土に均在。
- 2層 1箇と同質。3箇土坑に切られた状態。
- 3層 に5号、6号坑(10R8/3)積載ロード・ム値相(10R8/8)混入。φ0.5~0.8m。塊状ロード・ムφ1.8~2.0m少量。
- 4層 明瞭度(10R8/6)砂質ロード・ム。
- 5層 に5号、6号坑(10R8/3)積載ロード・ム少量。人骨(10R6/6)。
- 6層 に5号、6号坑(5R8/4)積載ロード・ム少量。人骨(10R6/6)。
- 7層 灰褐色(50R4/2)粒状ロード・ム微弱。白色鮮石(6.5YR8/8)極微量。
- 8層 灰褐色(50R4/2)微弱。1箇土坑(3YR8/3)少量。(10層ではない)
- 9層 灰褐色(50R4/2)白色鮮石(6.5YR8/3)少量。(10層ではない)
- 10層 灰褐色(50R4/2)灰褐色(10R8/3)砂質ロード・ム少量。
- 11層 灰褐色(50R4/2)白色鮮石(6.5YR8/3)少量。粗粒ロード・ム(9R8/6)微弱。
- 12層 灰褐色(7.5YR8/2)灰褐色物。

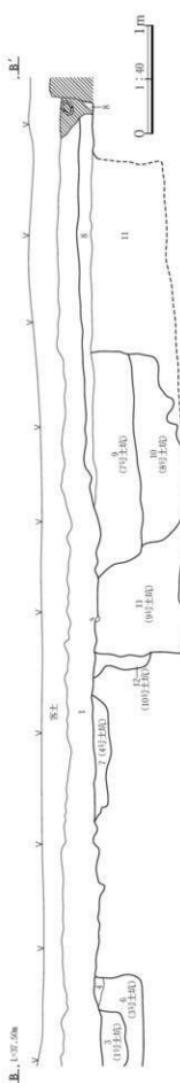
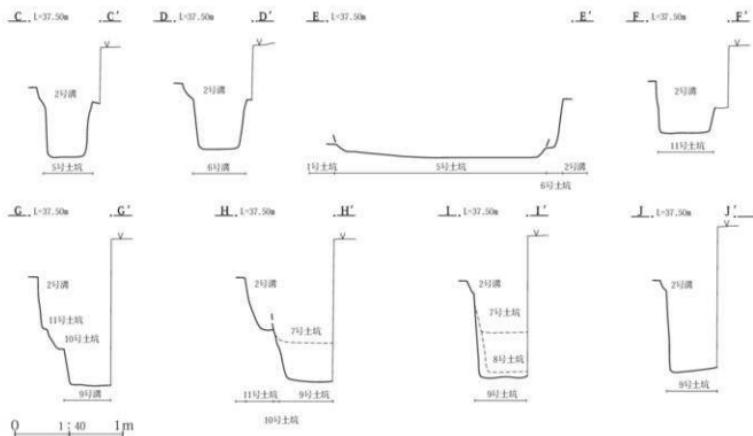


図111 1-6区2号溝、1~11号土坑

第2節 I-6区から検出された遺構と出土した遺物



第12図 I-6区5～11号土坑エレベーション図

規模 長径1.74m、短径0.52m、深さ0.37m。

平面形状 北西-南東方向にやや長い楕円形を呈する。

断面形状 暗丸長方形を呈する。

埋土 浅黄褐色(7.5YR8/3)粒を少量含む灰褐色土(7.5YR4/4)が堆積している。

遺物 なし。

所見 I-6区2号溝の溝底に一段深く掘り込んだ土坑の一つで、2号溝の中央から北西寄りにかけての位置では最後に掘り込まれた土坑である。

時期 中近世のものと考えられる。

(8) I-6区8号土坑(第11・12図、PL. 3)

位置 調査区の中央、南端。X=29547~548、Y=-49759~761。

重複 I-6区7号土坑に掘り込まれる。9・10号土坑を掘り込んで破壊する。

主軸方位 不明。

規模 不明。

平面形状 不明。

断面形状 不明。

埋土 浅黄褐色砂質ローム土(10YR6/3)粒を含む灰褐色土(7.5YR4/2)が堆積している。

遺物 なし。

所見 I-6区2号溝の溝底に一段深く掘り込んだ土坑の一つで、土層断面でI-6区7号土坑の真下から検出され、平面では全く検出出来なかった。

時期 中近世のものと考えられる。

(9) I-6区9号土坑(第11・12図、PL. 3)

位置 調査区の中央から北西端に至る南端。南壁に懸かる。X=29547~548、Y=-49758~763。

重複 I-6区7・8号土坑に中央から南東寄り部分を掘り込まれる。I-6区10・11号土坑を掘り込んで破壊する。

主軸方位 N-71°-W。

規模 長径4.67m、短径0.49m、深さ0.83m。

平面形状 北西-南東方向に長大な暗丸長方形を呈する。

断面形状 暗丸長方形を呈する。

埋土 灰白色粒子(5YR8/1)を若干、粗粒砂質ローム土を微量含む灰褐色土(7.5YR4/2)が堆積している。

遺物 なし。

所見 I-6区2号溝の溝底に一段深く掘り込んだ土坑

第3章 発見された遺構と遺物

の一つで、2号溝の中央から北西寄りにかけての長大な位置を占める。

時期 中世のものと考えられる。

(10) I-6区10号土坑(第11・12図、PL. 3)

位置 調査区の中央の南端。南壁に懸かる。X=29547～548、Y=-49758～760。

重複 I-6区9号土坑に大部分を掘り込まれる。I-6区11号土坑の大部分を掘り込んで破壊する。

主軸方位 N-72°-W。

規模 長径1.68m、短径0.55m、深さ0.50m。

平面形状 北西-南東方向に長い隅丸長方形状を呈するものと思われる。

断面形状 隅丸長方形状を呈する。

埋土 灰雜物が無い灰褐色砂質土(7.5YR4/2)が堆積している。

遺物 なし。

所見 I-6区2号溝の溝底に一段深く掘り込んだ土坑の一つで、2号溝の中央付近に掘り込まれているが、北西側から大部分をI-6区9号土坑に掘り込まれているため、全容は不明である。

時期 中世のものと考えられる。

(11) I-6区11号土坑(第11・12図、PL. 3)

位置 調査区の中央の南端付近。X=29547～548、Y=-49758～759。

重複 I-6区10号土坑に大部分を掘り込まれ破壊される。

主軸方位 N-71°-W。

規模 検出長径1.80m、短径0.53m、深さ0.24m。

平面形状 北西-南東方向に長い隅丸長方形状を呈するものと思われる。

断面形状 隅丸長方形状を呈する。

埋土 不明。

遺物 なし。

所見 I-6区2号溝の溝底に一段深く掘り込んだ土坑の一つで、2号溝の中央付近に掘り込まれているが、北西側から大部分をI-6区10号土坑に掘り込まれているため、全容は不明である。なお、新旧関係はI-6区7・8・9・10・11号土坑の順である。

時期 中世のものと考えられる。

3. 井戸

本調査区からは1基の井戸が検出された。調査区の北東端付近から検出されており、規模が大きい素掘りの井戸である。

(1) I-6区1号井戸(第13図、PL. 4・14)

位置 調査区の北東端付近。北壁に懸かる。X=24551～553、Y=-49754～756。

重複 なし。

主軸方位 N-1°-E。

規模 検出径1.82m、検出下幅1.17～1.36m、検出範囲内の深さ1.78m。

平面形状 北側が調査区外に出るが、南北に長い楕円形状を呈するものと思われる。

断面形状 起伏があるが、全体的には直線的に深く掘り込まれている。

埋土 黒褐色土(7.5YR3/2)をベースとする土が堆積している。

遺物 埋土中から錢種不明の銭貨(PL.14-22)が1点出土。

また、非掲載であるが、埋土中からほぼ完形の近代の鉄釘1点、近世・近現代在地系の他土器陶器類2点(20g)が出土している。

所見 上縁部は僅かに開くが全体的に垂直に近い掘り込みで、しっかりととした掘方を有する素掘りの井戸である。調査上の安全確保の観点から、上縁部から約1.73m付近までしか掘削しなかった。

周辺部の標高は36.93～37.06m前後、井戸内での調査が及んだ範囲における最低部の標高は35.27～78m前後である。

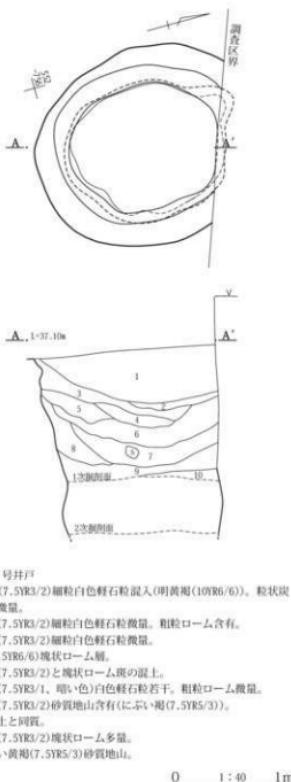
時期 中世のものと考えられる。

4. I-6区遺構外出土遺物

本調査区の表土中からは19世紀中葉以降の肥前磁器白磁紅皿1/3片1点(PL.14-23)及び寛永通寶(新寛永=寛永通寶のうち、寛文8(1668)年以降に鋳造されたもの)1点(PL.14-24)が出土している。

この他、非掲載であるが、表土中から近代のものと思われる用途不明の鉄製品片1点、近世国産磁器片1点(5g)、近世国産施釉陶器片1点(10g)、近世国産焼締

陶器類片3点(50g)、近世・近現代在地系焰烙・銅片4点(40g)、近世在地系皿片1点(5g)、近世・近現代在地系その他土器・陶器類片16点(1100g)、近世・近現代瓦片21点(2280g)、近現代陶磁器類片7点(90g)、近現代十能瓦片2点(130g)等が出土している。



第13図 1-6区 1号井戸

第3節 II-9区から検出された遺構と出土した遺物

II区は一般県道綿貫塚線の世良田交差点東側の、南側下り車線側と主要地方道伊勢崎大間々線の世良田交差点南側の、東側下り車線側に面する調査区である。平成26年度に実施した発掘調査において、世良田交差点南東側角から一般県道綿貫塚線に沿って東南東へ約30mに亘って、東側からII-6・7区の調査区が設定され、中近世の溝6条、土坑12基、井戸1基、地下式坑1基、ピット7基が検出された。

本報告書で報告する平成28年度に調査されたII-9区は、平成26年度に調査された、一般県道綿貫塚線南側下り車線に面した調査区では最東端のII-7区の東端から約25m東側に位置する北西-南東方向に細長い長方形状を呈する調査区である。本調査区において検出された遺構は土坑3基であった。これらの土坑は調査区の西側半分の位置から検出された。本調査区の東側半分は点々と攢乱されていた。

1. 土坑

本調査区においては、西半部において3基の土坑が検出された。II-9区1・3号土坑は平面形態が大きく、深くしっかりとした掘方を有する土坑であり、今回報告する平成28年度調査箇所において検出された最大規模の土坑である。

(1) II-9区1号土坑(第14図、PL. 4・14~21)

位置 調査区の北西端、北壁及び西壁に懸かる。II-9区2・3号土坑の西側に位置する。X=29544~547、Y=-49789~793。

重複 なし。

主軸方位 N-69°-W。

規模 検出長径3.50m、検出短径2.29m、深さ1.02m。

平面形状 北側及び西側が調査区外に出ているため全容は不明ではあるが、北西-南東方向に長い隅丸長方形を呈していたものと推測される。

断面形状 西側が調査区外に出るため、全容は不明ではあるが、底面が広く、壁が急角度で落ちる逆台形状を呈

第3章 発見された遺構と遺物

するものと推測される。

埋土 全体的に灰褐色土(7.5YR4/1)主体。特に上層は灰褐色土が顕著である。中～下層に褐灰色土(10YR4/1)、鈍い黄橙色土(10YR6/3)、砂質ローム土などが堆積する部分もあり。

遺物 埋土中から76点の中近世土器・陶器類(PL.14-25～PL.20-101)と5点の中近世瓦(PL.20-102～PL.21-106)が出土した。

PL.14-25は口縁部が約1/2欠失した近世の肥前磁器染付小杯片。

PL.14-26は口縁部が約2/3欠失した近世の肥前磁器白磁小碗片。

PL.14-27は近世の肥前磁器染付小碗1/2片。

PL.14-28は18～19世紀前葉の肥前磁器染付小碗の約1/4片。

PL.14-29は近現代の瀬戸・美濃磁器かと見られる瑠璃釉小碗の口縁部の一部約1/2片。

PL.14-30は19世紀前葉～中葉の肥前磁器かと見られる染付小碗で、口縁部を約1/2欠く。

PL.14-31も19世紀前葉～中葉の肥前磁器かと見られる染付碗で、口縁部の一部約1/2片。

PL.14-32は19世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃磁器かと見られる染付碗底部。

PL.14-33は19世紀前葉～中葉の肥前磁器と見られる染付碗口縁部片。

PL.14-34は20世紀前葉～中葉の口縁部を約1/2欠く肥前磁器染付碗。

PL.14-35は18世紀後葉～19世紀前葉の口縁部を約1/2欠く肥前磁器かと考えられる染付小丸碗。

PL.14-36も同じく18世紀後葉～19世紀前葉の口縁部を約2/3欠く肥前磁器染付小丸碗。

PL.14-37は19世紀前葉～中葉の肥前磁器染付碗約1/3片。

PL.14-38～40はいずれも18世紀後葉～19世紀前葉の肥前磁器染付筒形碗。38は口縁部を約1/2ほど欠く。39は約1/2片。40は約1/3片。

PL.14-41～PL.14-45はいずれも19世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃磁器染付端反碗。41・42は約1/2片。43は口縁部の一部及び底部約1/2片。44は完形。45は口縁部を約1/2欠く。

PL.15-46～51はいずれも18世紀後葉～19世紀前葉の肥前磁器染付広底碗。46は口縁部を約1/2欠く。47は口縁部を一部欠く。48は口縁部を約1/3欠く。49は口縁部約1/4、底部約1/2片。50は口縁部の一部と底部を欠く。51は底部約1/3片。

PL.15-52は19世紀中葉から後葉の肥前磁器向付かと思われる。口縁部の一部と底部約1/2片。

PL.15-53は18世紀の肥前磁器染付鉢底部約1/3片。

PL.15-54～57は肥前磁器染付皿。54は18世紀後葉から19世紀前葉にかけてのもので、約2/3片。55・56は18世紀前葉から中葉にかけてのもので、約1/3片。57は19世紀前葉から中葉にかけてのもので、口縁部を約1/3欠く。

PL.15-58・59はいずれも18世紀後葉から19世紀前葉の瀬戸・美濃陶器小碗。58は口縁部を約1/3欠く。59は口縁部は約1/3で、底部は完存している。

PL.15-60・61はいずれも近現代のものかと考えられる製作地不詳の陶器碗で、共に体部約1/3片。

PL.15-62は近世の瀬戸・美濃陶器掛分碗底部片。

PL.15-63は18世紀中葉から後葉にかけての瀬戸・美濃陶器腰筋碗1/2片。

PL.16-64～67はいずれも瀬戸・美濃陶器灯火受皿。64・65は18世紀後葉から19世紀前葉にかけての物で、64は約1/3片、65は口縁部役1/4、底部約1/2片。66は18世紀中葉から後葉にかけての物で、約1/3片。67は19世紀前葉から中葉にかけてのもので、完形。

PL.16-68・69はいずれも瀬戸・美濃陶器灯火皿。68は19世紀前葉から中葉にかけての製品で約1/2片。69は18世紀後葉から19世紀全容にかけての製品で約2/3片。

PL.16-70は19世紀の物かと考えられる製作地不詳陶器の灯火台かと思われる製品の台部片。

PL.16-71・72はいずれも18世紀の瀬戸・美濃陶器皿。71は口縁部1/8片、72は底部約1/2片。

PL.16-73は19世紀の製作地不詳の陶器土瓶で、底部及び蓋を欠く。

PL.16-74は近世～近代の瀬戸・美濃陶器かと思われる甕で口縁部は約1/4のみ、底部は完存。

PL.16-75は18～19世紀の瀬戸・美濃陶器利得で、体部の一部と底部約3/4片。

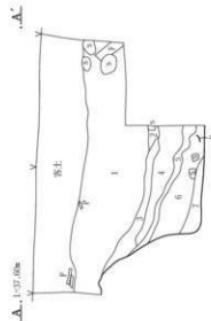
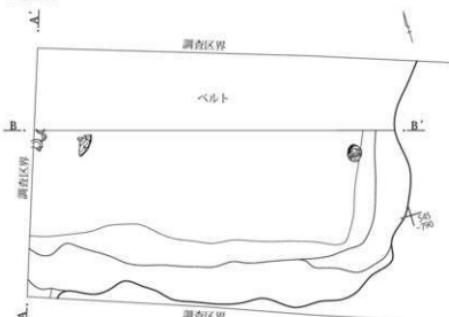
PL.17-76・77はいずれも18世紀後半～19世紀初頭の壺・明石陶器揃鉢口縁部約1/5片。

第3節 1~9区から検出された遺構と出土した遺物

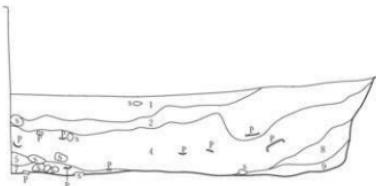
PL.17-78は19世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃陶器水甕で、約1/2を欠く。

PL.17-79は近世の瀬戸・美濃陶器植木鉢口縁部約1/3^{1/2}。PL.17-80・81・82はいずれも中世の常滑陶器の甕か壺

1号土坑

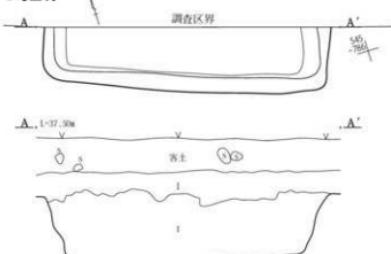


B-1~37.00m



- II-9区 1号土坑
- 1層 灰褐(7.5YR4/1)塊状ローム(にぶい粒(7.5YR7/4)含有。
 - 2層 灰褐(7.5YR4/1)粒状炭化物多量。
 - 3層 灰褐(7.5YR4/1)小塊状ローム、粗粒ローム含有。
 - 4層 灰褐(10YR4/1)小塊状ローム若干。粒状炭化物若干。
 - 5層 ローム。
 - 6層 3層上に近似。
 - 7層 にぶい黄褐色(10YR6/3)下層に黒の間層が入る。
 - 8層 砂質のローム(地山)。小縫鼠人。
 - 9層 灰褐(7.5YR4/1)粗粒ローム若干含む。

3号土坑



2号土坑



II-9区 2号土坑

- 1層 黒褐色(10YR3/1)粗粒ローム含有。

II-9区 3号土坑

- 1層 黒褐色(10YR3/1)白色軽石粒少量。塊状明黄褐色(10YR6/6)若干。
- 2層 明黄褐色(10YR6/6)小縫少量。

0 1:40 1m

第14図 II-9区 1~3号土坑

第3章 発見された遺構と遺物

で、80が体部片、81が肩部片。82が体部下位片。

PL.17-83は19世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃陶器瓶掛の体部2/3と底部片。

PL.17-84～PL.18-89はいずれも近世以降の在地系土器で、84・85は共に口縁部を約1/3欠いた皿。86・87は共に十能で、86は約1/2片、87は約1/3片。88・89は共に鉢かと考えられる製品で、88は1/3を欠く、89は1/2片。

PL.18-90～PL.19-94はいずれも19世紀中葉以降の在地系土器焰焼。90は一部を欠く。91と92は共に約1/8片。93は約1/10片。94は小片。

PL.19-95～97はいずれも近世の在地系土器。95と96は焰焼で、95は口縁部から底部片、96は底部片。97は鍋の約1/6片。

PL.19-98～PL.20-101はいずれも近世以降の在地系土器。98は鉢の口縁部一部及び底部約1/8片。99は一部を欠く火鉢。100・101は共に風呂が、100は底部約1/3片、101は口縁部片。

PL.20-102～PL.21-104はいずれも近世以降の瓦。102は埠かと考えられるものの破片。103は丸瓦の1/4片。104は角様彫振瓦の残部分片。

PL.21-105・106は中世瓦。105は丸瓦約1/4片、106は平瓦小片。

また、非掲載であるが、埋土中から頁岩製窓縁破片が1点出土している。残存状況からみて縁幅は9mm程度。縁の厚薄からすれば、丘側コーナー破片ということになるが、手前縁幅は3mm弱しかなく窓の縁としては薄過ぎる。形状から見て近世末期～近代のものと考えられる。

所見 北側及び西側が調査区外に出ているため、正確な規模形状は不明である。深く、しっかりとした掘方を有し、底面は平坦に造り出されている。確認面の標高は36.84～93m前後、底面の標高は36.88～94mで、土坑の用途・機能は不明である。

時期 中世のものと考えられる。

(2) II-9区2号土坑(第14図、PL. 5)

位置 調査区の中央から北西寄りの位置。II-9区1号土坑の東側、II-9区3号土坑の南側に位置する。X=29554、Y=-49786。

重複 なし。

主軸方位 N-21°-W。

規模 長径0.33m、短径0.27m、深さ0.10m。

平面形状 南北にやや長い梢円形状を呈する。

断面形状 浅く小規模な逆台形状を呈する。

埋土 粗粒状ローム土を含む黒褐色土(10YR3/1)が堆積している。

遺物 なし。

所見 小規模で掘方とも浅いピット状の土坑で、確認面の標高は37.93～95m前後、底面の標高はおおむね36.85m前後で、土坑の用途・機能は不明である。

時期 中近世のものと考えられる。

(3) II-9区3号土坑(第14図、PL. 5)

位置 調査区の中央からやや西寄りの北端。北壁に懸かる。II-9区1号土坑の東側、II-9区2号土坑の北側に位置する。X=29554～546、Y=-49786～788。

重複 なし。

主軸方位 N-71°-W。

規模 北側大半が調査区外へと出たため、全容は不明であるが、検出長径2.64m、検出短径0.60m、深さ0.59m。

平面形状 刨丸長方形を呈するものと思われるが、北側大部分が調査区外に出たため、東西方向に長い長方形形状なのか、南北方向に長い長方形となるのかは不明である。

断面形状 深くしっかりとした掘方を有し、底面が広い逆台形状を呈する。

埋土 小礫を少量含む明黄褐色土(10YR6/6)が堆積している。

遺物 なし。

所見 先述した通り、北側大部分が調査区北壁外へと出ているため、全容は不明であるが、検出部分から類推すれば、非常に整った刨丸長方形を呈するものと考えられる。確認面の標高は36.85～90m前後、底面の標高は36.26～32m前後で、平坦な底面が造り出されている。用途・機能については明らかに出来なかった。

時期 中近世のものと考えられる。

2. II-9区遺構外出土遺物

本調査区の表土中からは寛永通寶1点(PL.21-107)が出土している。また、非掲載ではあるが、近現代の土器類片6点(480g)が出土している。

第4節 II-10区から検出された遺構と出土した遺物

本報告書で報告する平成28年度に調査されたII-10区は、II-9区の東端から約2.5m東側に隣接する北西・南東方向に細長い長方形形状を呈する調査区である。本調査区において検出された遺構は土坑3基であった。これらの土坑は調査区の東端の位置から検出された。本調査区の大部分も点々と擾乱されていた。

1. 土坑

本調査区においては、東端付近において3基の土坑が検出された。II-10区1号土坑は調査区南東端部から検出された東西方向の溝状を呈する土坑である。II-10区2号土坑は、II-10区1号土坑と同じく調査区南東端付近から検出され、II-10区1号土坑を掘り込む土坑。II-10区3号土坑は、II-10区1・2号土坑の北側に位置するピット状の小土坑である。

出土遺物からII-10区1・2号土坑は中世の遺構と考え得られる。II-10区3号土坑からは遺物が出土していないため、詳細な年代は不明であるが、検出層位や埋土の状況、他の遺構との関連などから中近世のものと考えられる。

(1) II-10区1号土坑(第15図、PL. 6・22)

位置 調査区の南東端。南壁及び東壁に懸かる。II-10区3号土坑の南側に位置する。 $X=29533\sim534$ 、 $Y=-49765\sim766$ 。

重複 調査区南東隅付近でII-10区2号土坑に掘り込まれる。

主軸方位 N-78°-W。

規模 検出全長3.96m、検出土幅0.42m、検出下幅0.27m、深さ0.33m。

平面形状 南側及び東側が調査区外に出、II-10区2号土坑に掘り込まれ、また、擾乱されている箇所もあるため、全容は不明ではあるが、東西に長い溝状を呈していたものと推測される。

断面形状 底面が狭い逆台形状を呈する。

埋土 径0.6~0.8cm程度の粒状炭化物を含有し、灰白色

第4節 II-10区から検出された遺構と出土した遺物

輕石粒(5YR3/1)を微量含む灰黃褐色土(10YR4/2)主体。

遺物 墓土中から14世紀前半の常滑陶器広口壺口縁部片が1点(PL.22-108)、同じく埋土中から中世の軒丸瓦瓦当片1点(PL.22-109)が出土している。

なお、非掲載ではあるが、近世・近現代瓦片1点(10kg)、近現代陶磁器片1点(5g)が出土している。

所見 西側及び南側・東側が調査区外に出、II-10区2号土坑に掘り込まれ、また大きく擾乱もされているため、正確な規模形状は不明である。比較的深く、しっかりとした掘方を有し、底面は平坦に造り出されている。確認面の標高は36.84~97m前後、底面の標高は36.58~67mで、調査区南東隅部では底面が一段深く掘り窪められており、I-6区2号溝底面に掘り込まれた土坑のような造作が為されていた可能性も考えられるが、東側が調査区外へと出ているため、不明な点が多い。土坑の用途・機能は不明である。

時期 中世のものと考えられる。

(2) II-10区2号土坑(第15図、PL. 6・22)

位置 調査区の南東隅付近。II-10区3号土坑の南側に位置する。 $X=29533\sim534$ 、 $Y=-49765\sim766$ 。

重複 II-10区1号土坑を掘り込む。

主軸方位 N-0°。

規模 検出土長1.07m、短径0.86m、深さ0.34m。

平面形状 南北にやや長い不整圓丸長方形形状を呈する。

断面形状 やや扁平な逆台形状を呈する。

埋土 粗粒状ローム土を少量含む灰黃褐色土(10YR4/2)が堆積している。

遺物 墓土中から12~13世紀ごろの物と見られる常滑陶器の壺か壺の底部片が1点出土している(PL.22-110)。

所見 比較的大きな形狀の土坑で、確認面の標高は37.89~92m前後、底面の標高はおむね36.60m前後で平坦である。東側を大きく擾乱されている。土坑の用途・機能は不明である。

時期 中世のものと考えられる。

(3) II-10区3号土坑(第15図、PL. 6)

位置 調査区の東寄り。II-10区2号土坑の北側に位置する。 $X=29535$ 、 $Y=-49760\sim761$ 。

重複 なし。

第3章 発見された遺構と遺物

主軸方位 N-50°E°。

規模 長径0.40m、短径0.31m、深さ0.07m。

平面形状 圓丸平行四辺形状を呈する。

断面形状 ごく浅く扁平で小規模な逆台形状を呈する。

埋土 粗粒状ローム土を含む灰褐色土(10YR4/2)が堆積している。

遺物 なし。

所見 小規模で浅いピット状の小土坑である。確認面の標高は36.90~95m前後、底面の標高は36.88m前後で、平坦な底面が造り出されている。用途・機能については明らかに出来なかった。

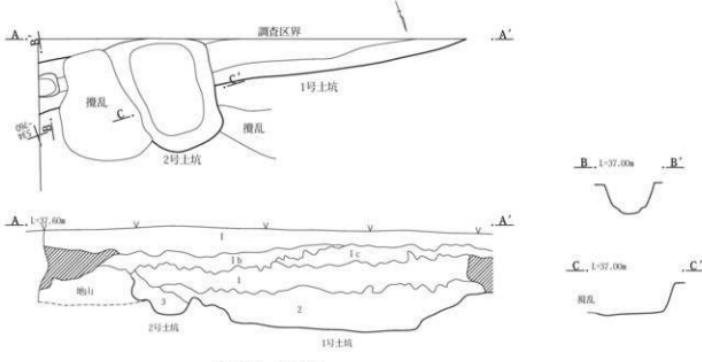
時期 中世のものと考えられる。

2. II-10区遺構外出土遺物

いずれも非掲載であるが本調査区の表土中からは明治20(1887)年路を有する半錢1点及び近代の用途不明鉄製品片が出土している。

なお、非掲載ではあるが、近世国産陶器片7点(35g)、近世国産施釉陶器片6点(60g)、近世・近現代在地系その他土器・陶器類片33点(5560g)、近世・近現代瓦片4点(410g)、近現代陶器片4点(70g)が出土している。

1・2号土坑



II-10区 1・2号土坑

1層 観察(7.5YR4/1)砂質上。圧密を受けている。

1層 潟灰(7.5YR4/1)と黒褐色(10YR3/1)との混上。黑褐色土が多い。

1層 潟灰(7.5YR4/1)小塊状砂質ローム(明褐色5YR7/1)含有。

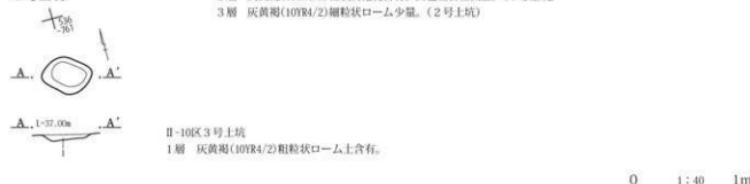
1層 潟灰(7.5YR4/1)細粒状砂質ローム(明褐色5YR7/1)微量。粒状炭化物微量。白色軽石粒微量。

1層 潟灰(7.5YR4/1)明褐色(5YR7/1)混入。粒状炭化物微量。(1号土坑)

2層 灰黃灰(10YR4/2)粒状炭化物含有。白色軽石粒微量。(1号土坑)

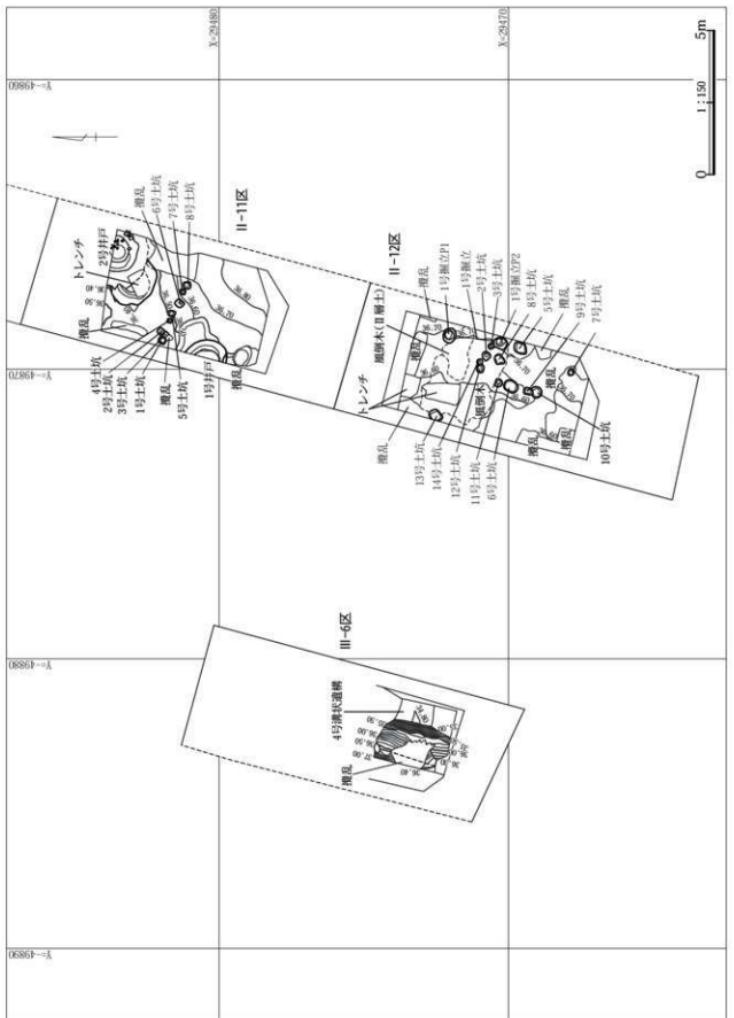
3層 灰黃灰(10YR4/2)細粒状ローム少量。(2号土坑)

3号土坑



第15図 II-10区 1～3号土坑

第5節 II-11区から検出された遺構と出土した遺物



第16图 II-11区、II-12区、III-6区全体图

第5節 II-11区から検出された遺構と出土した遺物

本報告書で報告する平成28年度に調査されたII-11区は、主要地方道伊勢崎・深谷線の東側上り車線に面した調査区で、平成26年度に調査されたII-1区の南端から約4m南側に位置する北北東-南南西方向に細長い長方形形状を呈する調査区である。本調査区の北側に位置する、平成26年度に調査されたII-1区からは、土坑3基、井戸1基、溝1条が検出された。II-1区とその北側に位置するII-2区の西端から検出された3号溝の南側に隣接する部分は、本調査区では検出されず、北側に隣接する調査区から続くような遺構の検出は皆無であった。

本調査区において検出された遺構は土坑8基と井戸2基であった。土坑は調査区の中央部から東西に並列して検出された。また、井戸は調査区の北東隅と南端から検出されたが、いずれの井戸も調査区の壁に懸かっており、全容を検出することは出来なかった。

なお、本調査区も点々と擾乱されていた。

1. 土坑

本調査区においては、中央部付近において8基の小土坑が検出された。いずれも方形状の掘方を有し、東西に並列している。

II-11区2・5・7号土坑が各芯々間約0.75mの柵、またII-11区1・4・6・8号土坑が各芯々間約0.7mの柵のそれぞれ柱穴である可能性も考えられるが、両柵の柱穴であるこれらの土坑の掘方の大きさがまちまちであり、不自然な点もあり、断定はできない。

もし、両柵が成立すると、II-11区1号土坑を掘り込むII-11区3号土坑が、II-11区2号土坑に掘り込まれているため、II-11区2・5・7号土坑を柱穴とする芯々間約0.75mの柵の方が新しいことになる。

(1) II-11区1号土坑(第17図、PL. 7)

位置 調査区の中央よりやや北寄りの西端。II-11区2号土坑の西側に近接する。 $X=29481\sim482$ 、 $Y=-49868\sim869$ 。

重複 II-11区3号土坑に東側を掘り込まれる。

主軸方位 N-33°-E。

規模 検出長径0.26m、短径0.21m、深さ0.05m。

平面形状 東側をII-11区3号土坑に掘り込まれ、また、南側を擾乱されているが、北東-南西に長い楕円長方形形状を呈していたものと推測される。

断面形状 浅く扁平で薄い逆台形状を呈する。

埋土 径約0.8~1.2cmの細粒灰白色軽石粒(SYR8/1)及び粗粒状ローム土を含有する黒褐色土(10YR3/2)が堆積している。

遺物 なし。

所見 小規模で掘方も浅いが、先述した通り、II-11区1・4・6・8号土坑が各芯々間約0.7mの柵の柱穴になる可能性も考えられる。

時期 中世のものと考えられる。

(2) II-11区2号土坑(第17図、PL. 7)

位置 調査区の中央よりやや北寄りの西端。II-11区1号土坑の東側に近接する。 $X=29481\sim482$ 、 $Y=-49868$ 。

重複 II-11区3号土坑の北東側を掘り込む。

主軸方位 N-40°-E。

規模 長径0.24m、短径0.20m、深さ0.14m。

平面形状 五角形状を呈する。

断面形状 しっかりとした逆台形状を呈する。

埋土 径約0.8~1.2cmの細粒灰白色軽石粒(SYR8/1)及び粗粒状ローム土を含有する黒褐色土(10YR3/2)が堆積している。

遺物 なし。

所見 小規模であるが、先述した通り、II-11区2・5・7号土坑が各芯々間約0.75mの柵になる可能性も考えられる。

時期 中世のものと考えられる。

(3) II-11区3号土坑(第17図、PL. 7)

位置 調査区の中央よりやや北寄りの西端。 $X=29481\sim482$ 、 $Y=-49868$ 。

重複 II-11区1号土坑の南東側を掘り込む。II-11区2号土坑に北東側を掘り込まれる。

主軸方位 N-40°-E。

規模 検出長径0.23m、短径0.22m、深さ0.15m。

平面形状 北東-南西方向に長い楕円形状ないし楕円長

第5節 II-11区から検出された遺構と出土した遺物

方形状を呈していたものと思われる。

断面形状 しっかりとした逆台形状を呈する。

埋土 径約0.8~1.2cmの細粒灰白色軽石粒(5YR8/1)及び粗粒状ローム土を含有する黒褐色土(10YR3/2)が堆積している。

遺物 なし。

所見 小規模であり、北東側をII-11区3号土坑に、南西側を攪乱されているため詳細は不明である。土坑の用途・機能も不明である。

時期 中世のものと考えられる。

(4) II-11区4号土坑(第17図、PL. 7)

位置 調査区の中央よりやや北寄り。II-11区5号土坑のすぐ西側に近接し、II-11区2号土坑の東側に位置する。X=29481、Y=-49868。

重複 なし。

主軸方位 N-10°-E。

規模 長径0.16m、短径0.14m、深さ0.05m。

平面形状 北東-南西方向に僅かに長い隅丸長方形状を呈する。

断面形状 浅く扁平で薄い逆台形状を呈する。

埋土 径約0.8~1.2cmの細粒灰白色軽石粒(5YR8/1)及び粗粒状ローム土を含有する黒褐色土(10YR3/2)が堆積している。

遺物 なし。

所見 小規模で掘方とも浅いが、先述した通り、II-11区1・4・6・8号土坑が各芯々間約0.7mの幅の柱穴になる可能性も考えられる。

時期 中世のものと考えられる。

(5) II-11区5号土坑(第17図、PL. 7)

位置 調査区の中央よりやや北寄り。II-11区4号土坑のすぐ東側に近接し、II-11区6号土坑の西側に隣接する。X=29481、Y=-49867~868。

重複 なし。

主軸方位 N-17°-E。

規模 長径0.23m、短径0.21m、深さ0.08m。

平面形状 北東-南西方向に僅かに長い隅丸長方形状を呈する。

断面形状 浅く扁平で薄い逆台形状を呈する。

埋土 径約0.8~1.2cmの細粒灰白色軽石粒(5YR8/1)及び粗粒状ローム土を含有する黒褐色土(10YR3/2)が堆積している。

遺物 なし。

所見 小規模であるが、先述した通り、II-11区2・5・7号土坑が各芯々間約0.75mの幅になる可能性も考えられる。

時期 中世のものと考えられる。

(6) II-11区6号土坑(第17図、PL. 7)

位置 調査区の中央よりやや北寄り。II-11区5号土坑の西側、II-11区7号土坑の東側に隣接する。X=29481、Y=-49867。

重複 なし。

主軸方位 N-42°-E。

規模 長径0.27m、短径0.24m、深さ0.23m。

平面形状 北東-南西方向に僅かに長い隅丸長方形状を呈する。

断面形状 底面が狭く、深くしっかりした逆台形状を呈する。

埋土 径約0.8~1.2cmの細粒灰白色軽石粒(5YR8/1)及び粗粒状ローム土を含有する黒褐色土(10YR3/2)が堆積している。

遺物 なし。

所見 II-11区6~8号土坑は、本調査区から検出された他の土坑に比べて、平面形状は小規模で、同傾向ながらも深くしっかりした掘方を有している点で、特異である。先述した通り、II-11区1・4・6・8号土坑が各芯々間約0.7mの幅の柱穴になる可能性も考えられる。

時期 中世のものと考えられる。

(7) II-11区7号土坑(第17図、PL. 7)

位置 調査区の中央よりやや北寄り。II-11区6号土坑のすぐ西側に近接し、II-11区6号土坑の東側に隣接する。X=29481、Y=-49867。

重複 なし。

主軸方位 N-11°-E。

規模 長径0.19m、短径0.18m、深さ0.13m。

平面形状 北東-南西方向に僅かに長い隅丸長方形状を呈する。

第3章 発見された遺構と遺物

断面形状 底面が狭く、深くしっかりした逆台形状を呈する。

埋土 径約0.8~1.2cmの細粒灰白色軽石粒(5YR8/1)及び粗粒状ローム土を含有する黒褐色土(10YR3/2)が堆積している。

遺物 なし。

所見 II-11区6~8号土坑は、本調査区から検出された他の土坑に比べて、平面形状は小規模で、同傾向ながらも深くしっかりした掘方を有している点で、特異である。小規模であるが、先述した通り、II-11区2・5・7号土坑が各芯々間約0.75mの幅になる可能性も考えられる。

時期 中世のものと考えられる。

(8) II-11区8号土坑(第17図、PL. 7)

位置 調査区の中央よりやや北西寄り。II-11区7号土坑のすぐ東側に近接する。X=29480~481、Y=-49866~867。

重複 なし。

主軸方位 N-2°-W。

規模 長径0.25m、短径0.23m、深さ0.25m。

平面形状 北東-南西方向に僅かに長い丸角長方形を呈する。

断面形状 底面が狭く、深くしっかりした逆台形状を呈する。

埋土 径約0.8~1.2cmの細粒灰白色軽石粒(5YR8/1)及び粗

粒状ローム土を含有する黒褐色土(10YR3/2)が堆積している。

遺物 なし。

所見 II-11区6~8号土坑は、本調査区から検出された他の土坑に比べて、平面形状は小規模で、同傾向ながらも深くしっかりした掘方を有している点で、特異である。先述した通り、II-11区1・4・6・8号土坑が各芯々間約0.7mの幅の柱穴になる可能性も考えられる。

時期 中世のものと考えられる。

2. 井戸

本調査区からは2基の井戸が検出された。調査区の南北寄りの位置からII-11区1号井戸が、調査区の北東隅付近からII-11区2号井戸がそれぞれ検出された。両井戸とも調査区壁に懸かっており、全容を解明することは出来なかったが、規模が大きい素掘りの井戸である。

(1) II-11区1号井戸(第18図、PL. 8・22)

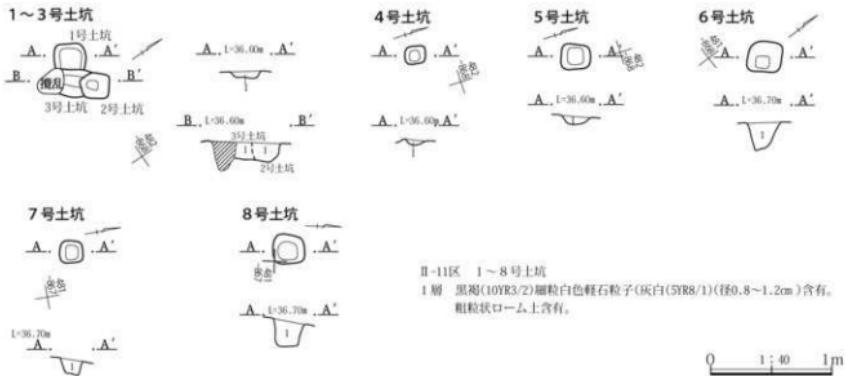
位置 調査区の南北寄り。西壁に懸かる。X=29480~482、Y=-49868~869。

重複 なし。

主軸方位 不明。

規模 検出南北径1.46m、検出東西径0.68m、検出された南北方向の下幅0.99m、検出範囲内の深さ0.82m。

平面形状 西側が調査区外に出、全体の約1/3程度が検出された。全容は不明である。



第17図 II-11区1~8号土坑

第5節 II-11区から検出された遺構と出土した遺物

断面形状 上縁部がやや広く広がった漏斗状を呈し、本体部分は筒状に直線的に深く掘り込まれている。

埋土 上層には黒褐色土(10YR3/2・10YR3/1)をベースとする土堆積し、中層は灰白色土(10YR8/2)と黒褐色土(10YR3/2)との混上が堆積している。下層は調査不能の為、不詳。

遺物 埋土中から中世の常滑陶器の甕か壺の肩部片(PL.22-111)が1点出土。また、非掲載であるが、埋土中から時期・用途不明の鉄製品片1点、近世・近現代瓦片2点(100g)が出土している。

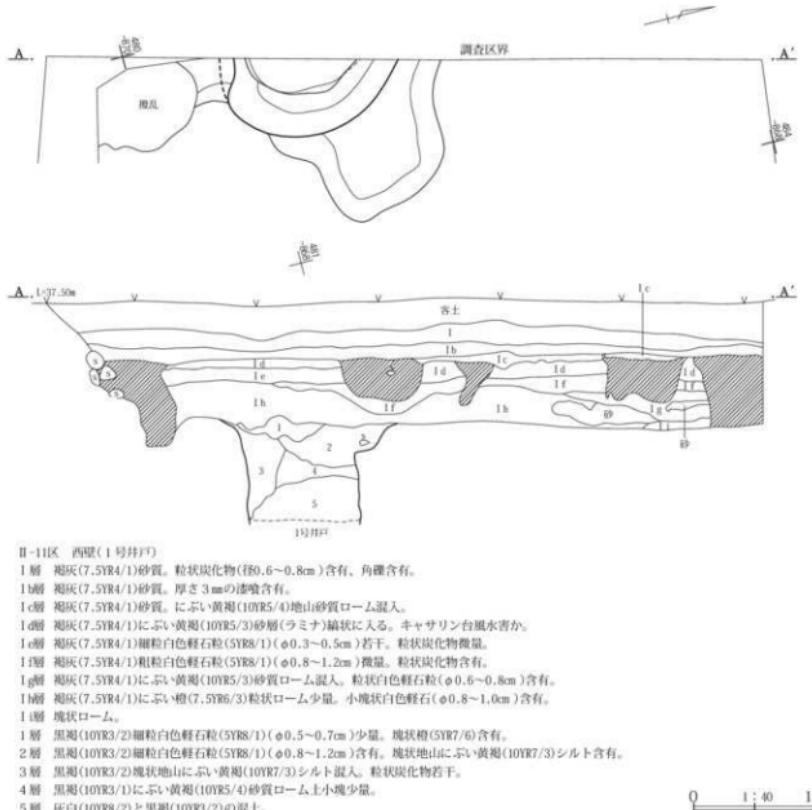
所見 上縁部はやや開くが、全体的に垂直に近い筒状の掘り込みで、しっかりとした掘方を有する素掘りの井戸である。調査区壁に懸かっての検出で、調査範囲を確保

することが出来ず、調査上の安全確保の観点から、上縁部から約0.82m付近までしか掘削しなかった。

上縁部の北東側に張り出したテラス状に、一段深く、平坦に掘り込まれた部分がある。本井戸へのアプローチなど、本井戸に付随する何らかの施設であつたと考えられるが、調査範囲が限られているため、詳細は不明である。

周辺部の標高は36.49~61m前後、北東側テラス状施設の平坦面の標高は36.44~48m前後、井戸内の、調査が及んだ範囲における最低部の標高は35.69~70m前後である。

時期 中世のものと考えられる。



第18図 II-11区 1号井戸

第3章 発見された遺構と遺物

(2) II-11区 2号井戸(第19図、PL. 8・22)

位置 調査区の北東隅。北壁及び東壁に懸かる。X=29482

~483、Y=-49865~867。

重複 なし。

主軸方位 不明。

規模 検出南北径1.65m、検出東西径2.48m、検出された東西方向の下幅0.47m、検出範囲内の深さ2.04m。

平面形状 北側及び東側が調査区外に出、南東側を攪乱され、全体の約1/2程度が検出された。全容は不明であるが、円形状を呈していたものと推測される。

断面形状 上縁部が広がった漏斗状を呈し、全体的に上が広く開いたU字形状を呈している。

埋土 黒褐色土(10YR3/1)主体。

遺物 墓土中から中世の土器・陶器片が出土し、7点を採り上げた(PL.22-112~118)。

PL.22-112は、年代・製作地共に不詳の陶器で、

天目碗の口縁部から体部片。

PL.22-113・114は共に瀬戸・美濃陶器で平碗かと考えられる。PL.22-113は14世紀中葉から後葉にかけての物で口縁部片、PL.22-114は14世紀中葉から15世紀中葉にかけてのもので、体部片である。

PL.22-115~118はいずれも中世の在地系土器の皿である。PL.22-115は1/5片、PL.22-116は底部1/4片。PL.22-117は1/3片。PL.22-118は口縁部1/2、底部は完存。

この他、非掲載ではあるが、中世国産焼締陶器片が3点(50g)、近世在地系皿片が3点(10g)、近世・近現代瓦片が1点(20g)、時期不明土器類が3点(50g)出土している。

所見 平面の形状は円形状を呈していたものと思われ、断面の形状は上縁部が広がったU字形状を呈している。深くしっかりとした掘方を有する。

南西側に接して、半円形状に掘り窪められた部分があり、元来、南西側に存在していた古い井戸ないしは土坑を掘り込んで、新たに北東側に造られた井戸と考えられなくはない。ただし、南西側半円形状の掘り窪みと本井戸との重複箇所の中央が攪乱されているため、土坑との重複であるのか、あるいは本井戸が南西側に存在した古い井戸を廃棄して新たに掘り直された井戸であるのか、あるいは南西側に半円形状に掘り窪められた部分が、本井戸に付属する何らかの施設や造作の痕跡であるのか、

明らかにし難い。

なお、本井戸は、底面まで検出された。

周辺部の標高は36.40~49m前後、井戸上縁部の標高は36.42~46m前後、底部の標高は34.38~46m前後である。

時期 中世のものと考えられる。

3. II-11区遺構外出土遺物

本調査区の表土中から出土した遺物2点を掲載した。

PL.22-119は18世紀前葉～中葉の肥前磁器染付碗片で、口縁部は一部のみ残存、底部は完存。

PL.22-120は中世の瀬戸・美濃陶器の盤類の口縁部片である。

なお、この他、非掲載ではあるが、表土中から近世国産磁器片3点(20g)、国産施釉陶器片3点(20g)、近世・近現代在地系培壘・銅片3点(120g)、近世・近現代在地系その他土器・陶器類片7点(550g)、近現代土器類片3点(470g)が出土した。

第6節 II-12区から検出された 遺構と出土した遺物

本報告書で報告する平成28年度に調査されたII-12区は、II-11区と同様、主要地方道伊勢崎・深谷線の東側上り車線に面した調査区で、II-11区の南端から約4m南側に位置する北北東～南南西方向に細長い長方形形状を呈する調査区である。

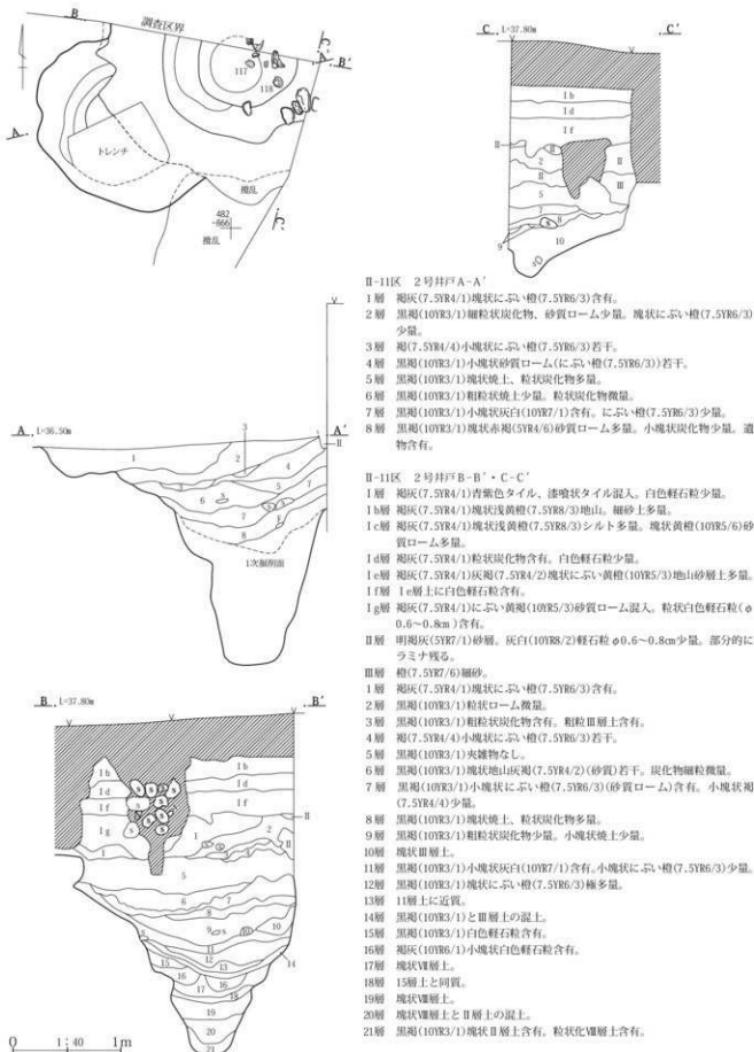
平成26年度に調査されたII-1区とその北側に位置するII-2区の西端から検出された3号構の南側に継続する部分は、本調査区でも検出されず、北側に隣接するII-11区から続くような遺構の検出は皆無であった。

本調査区において検出された遺構は、掘立柱建物1棟と土坑12基であった。

掘立柱建物は調査区の北東寄りから建物の西辺のみが検出された。1間である。

土坑も掘立柱建物の西側一帯、調査区中央、東寄りの位置からまとまって検出されたが、13号土坑1基のみは、調査区の北西側、西壁に懸かった状態で単独で検出された。いずれの土坑も小規模な、ピット状の土坑である。

なお、本調査区も点々と攪乱されていた。



第19図 II-11区 2号井F

1. 挖立柱建物

平成28年度調査箇所において検出された掘立柱建物は、II-12区1号掘立柱建物のみであった。平成25年度、平成26年度と、当事業団によって行われた本遺跡の調査では、初めての掘立柱建物の検出となる。1間の、建物西辺のみが検出されており、柵である可能性もあるが、調査時に掘立柱建物として発掘調査されているので、ここでも掘立柱建物として報告する。

(1) II-12区1号掘立柱建物(第20図、PL. 9・10)

位置 II-12区の北東寄り、調査区東壁際。X=29470~472、Y=-49868~869。

重複 II-12区3号土坑の南東端を、南側柱穴であるII-12区4号土坑が振り込む。

平面形状 梁間1間で桁行不明。

主軸方位(棟方向) N-8°-E。

規模 北側柱穴II-12区1号土坑と南側柱穴II-12区4号土坑のみが検出された。北側柱穴と南側柱穴の芯々間は1.78mである。

柱穴 2基が検出された。

北側柱穴: II-12区1号土坑 X=29471~472、Y=-49868~869。主軸方位はN-75°-W。平面形態は東西に長い楕円形状を呈する。長径0.51m、短径0.42m、深さ0.58m。埋土は小塊状・粗粒状の鈍い橙色の砂質ローム土(7.5YR6/3)を含む黒褐色土(10YR1/3)。しっかりとした掘方を有しており、断面はU字形状を呈する。

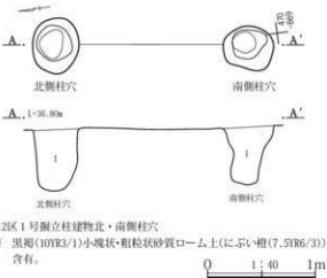
南側柱穴: II-12区4号土坑 X=29740、Y=-49868~869。主軸方位はN-21°-E。平面形態は南北に長い不整楕円形状を呈する。長径0.46m、短径0.38m、深さ0.51m。埋土は小塊状・粗粒状の鈍い橙色の砂質ローム土(7.5YR6/3)を含む黒褐色土(10YR1/3)。しっかりとした掘方を有しており、断面はU字形状を呈する。

遺物 なし。

所見 1間の梁間部分と考えられ、桁行部分は調査区東壁の外側、さらに東側に展開するものと考えられるが、調査区外であるため、不明である。

北側柱穴と南側柱穴の芯々間は1.78mである。

時期 中世のものと考えられる。



第20図 II-12区1号掘立柱建物

2. 土坑

本調査区においては、土坑も掘立柱建物の西側一帯、調査区中央、東寄りの位置からまとまって検出されたが、II-12区13号土坑は調査区の北西側から、II-12区7号土坑は調査区の南東側付近から、それぞれ単独で検出された。いずれの土坑も小規模な、ピット状の土坑である。

なお、先述した通り、II-12区1号土坑はII-12区1号掘立柱建物の北側柱穴、II-12区4号土坑はII-12区1号掘立柱建物の南側柱穴であるので、土坑としては欠番となる。

(1) II-12区2号土坑(第21図、PL. 10)

位置 調査区の中央より東寄り。II-12区14号土坑のすぐ東側に近接し、II-12区3号土坑の西側、II-12区8号土坑の北側にそれぞれ隣接する。X=29470、Y=-49869。

重複 なし。

主軸方位 N-56°-E。

規模 長径0.28m、短径0.27m、深さ0.57m。

平面形状 不整圓丸長方形状を呈する。

断面形状 深く、底面が狭い逆台形状を呈する。

埋土 灰褐色土(7.5YR4/2)及び塊状の鈍い黃橙色地山砂質土(10YR5/3)を多量に、白色輕石粒(5YR8/1)を含む褐灰色土(7.5YR4/1)が堆積している。

遺物 なし。

所見 小規模であるが、深くしっかりとした掘方を有している。土坑の用途・機能については不明である。

時期 中世のものと考えられる。

第6節 II-12区から検出された遺構と出土した遺物

(2) II-12区 3号土坑(第21図、PL. 10)

位置 調査区の中央の東端。II-12区2号土坑の東側、II-12区8号土坑の北東側にそれぞれ隣接する。X=29470、Y=-49869。

重複 南東側をII-12区1号掘立柱建物南側柱穴であるII-12区4号土坑に掘り込まれる。

主軸方位 N-23°-W。

規模 検出長径0.20m、短径0.19m、深さ0.03m。

平面形状 北西-南東方向に長い不整橢丸長方形状を呈していたものと考えられる。

断面形状 浅く、扁平なレンズ状を呈する。

埋土 灰褐色土(7.5YR4/2)及び塊状の鈍い黄橙色地山砂質土(10YR5/3)を多量に、白色軽石粒(GYR8/1)を含む褐色土(7.5YR4/1)が堆積している。

遺物 なし。

所見 小規模で浅い。土坑の用途・機能については不明。

時期 中世のものと考えられる。

(3) II-12区 5号土坑(第21図、PL. 10)

位置 調査区のほぼ中央の東端。調査区東壁際。II-12区1号掘立柱建物南側柱穴II-12区4号土坑の南側に隣接する。X=29469、Y=-49869。

重複 なし。

主軸方位 N-11°-E。

規模 長径0.42m、短径0.37m、深さ0.08m。

平面形状 南北に長い橢丸長方形状を呈する。

埋土 灰褐色土(7.5YR4/2)及び塊状の鈍い黄橙色地山砂質土(10YR5/3)を多量に、白色軽石粒(GYR8/1)を含む褐色土(7.5YR4/1)が堆積している。

遺物 なし。

所見 II-12区から検出された土坑の中では大型の方ではあるが、全体的には小規模で浅い。土坑の用途・機能については不明。

時期 中世のものと考えられる。

(4) II-12区 6号土坑(第21図、PL. 10)

位置 調査区のほぼ中央。II-12区11号土坑のすぐ南側、II-12区9号土坑のすぐ北側に近接する。X=29469~470、Y=-49870。

重複 なし。

主軸方位 N-26°-E。

規模 長径0.50m、短径0.40m、深さ0.07m。

平面形状 南北に長い橢丸長方形状を呈する。

断面形状 浅く、扁平なレンズ状を呈する。

埋土 灰褐色土(7.5YR4/2)及び塊状の鈍い黄橙色地山砂質土(10YR5/3)を多量に、白色軽石粒(GYR8/1)を含む褐色土(7.5YR4/1)が堆積している。

遺物 なし。

所見 II-12区5号土坑と同様、II-12区から検出された土坑の中では大型の方ではあるが、全体的には小規模で浅い。土坑の用途・機能については不明。

時期 中世のものと考えられる。

(5) II-12区 7号土坑(第21図、PL. 10)

位置 調査区の南東隅。X=29467、Y=-49869~49870。

重複 なし。

主軸方位 N-83°-E。

規模 長径0.24m、短径0.20m、深さ0.30m。

平面形状 北東西に長い不整橢円形状を呈する。

断面形状 深く、しっかりとした掘方を有し、長方形状を呈する。

埋土 灰褐色土(7.5YR4/2)及び塊状の鈍い黄橙色地山砂質土(10YR5/3)を多量に、白色軽石粒(GYR8/1)を含む褐色土(7.5YR4/1)が堆積している。

遺物 なし。

所見 II-12区から検出され土坑は、概して小型であるが、その中でも小型の部類に属するが、II-12区2号土坑同様、深く、しっかりとした掘方を有している。土坑の用途・機能については不明。

時期 中世のものと考えられる。

(6) II-12区 8号土坑(第21図、PL. 10)

位置 調査区の中央から東寄り。X=29470、Y=-49869。

重複 なし。

主軸方位 N-27°-E。

規模 長径0.39m、短径0.34m、深さ0.02m。

平面形状 不整形。

断面形状 浅く、扁平な不整レンズ状を呈する。

埋土 灰褐色土(7.5YR4/2)及び塊状の鈍い黄橙色地山砂

第3章 発見された遺構と遺物

質土(10YR5/3)を多量に、白色軽石粒(5YR8/1)を含む褐色灰色土(7.5YR4/1)が堆積している。

遺物 非掲載ではあるが、近世国産磁器片1点(5 g)が出土している。

所見 非常に浅く、ほぼ窪みと言つて良い状態である。土坑の用途・機能については不明。

時期 中世のものと考えられる。

(7) II-12区9号土坑(第21図、PL. 10)

位置 調査区の中央から南寄り。II-12区6号土坑の南側に隣接する。X=29469、Y=-49870。

重複 II-12区10号土坑の北端を掘り込む。

主軸方位 N-13°-E。

規模 長径0.32m、短径0.23m、深さ0.15m。

平面形状 南北に長闊丸長方形を呈する。

断面形状 比較的しっかりした掘方を有し、逆台形状を



呈する。

埋土 灰褐色土(7.5YR4/2)及び塊状の鈍い黄橙色地山砂質土(10YR5/3)を多量に、白色軽石粒(5YR8/1)を含む褐色灰色土(7.5YR4/1)が堆積している。

遺物 なし。

所見 小規模ながら、比較的しっかりとした掘方を有している。土坑の用途・機能については不明。

時期 中世のものと考えられる。

(8) II-12区10号土坑(第21図、PL. 10)

位置 調査区の中央から南寄り。X=29468~469、Y=-49870。

重複 II-12区9号土坑に北端を掘り込まれる。

主軸方位 N-51°-E。

規模 検出長径0.39m、短径0.37m、深さ0.12m。

平面形状 ほぼ円形を呈する。



II-12区 号土坑2・3・5・5~14号土坑
1層 塗灰(7.5YR4/1)灰褐(7.5YR4/2)上、塊状に示す黄橙(10YR5/3)
地山砂層に多量。白色軽石粒子(灰白5YR8/1)含有。

第21図 II-12区2・3・5・5~14号土坑

第6節 II-12区から検出された遺構と出土した遺物

断面形状 比較的しっかりした掘方を有し、逆台形状を呈するものと思われる。

埋土 灰褐色土(7.5YR4/2)及び塊状の鈍い黄橙色地山砂質土(10YR5/3)を多量に、白色軽石粒(5YR8/1)を含む褐灰色土(7.5YR4/1)が堆積している。

遺物 なし。

所見 概して小規模な本調査区検出の土坑の中では比較的大きな部類に属するが、一般的には小規模な土坑である。比較的しっかりとした掘方を有している。土坑の用途・機能については不明。

時期 中世のものと考えられる。

(9) II-12区11号土坑(第21図、PL. 10)

位置 調査区のほぼ中央。II-12区6号土坑のすぐ北側に近接する。X=29470、Y=-49870。

重複 なし。

主軸方位 N-82°-W。

規模 長径0.27m、短径0.24m、深さ0.22m。

平面形状 東西に長い不整圓丸長方形状を呈する。

断面形状 しっかりした掘方を有し、底面が狭い逆台形状を呈する。

埋土 灰褐色土(7.5YR4/2)及び塊状の鈍い黄橙色地山砂質土(10YR5/3)を多量に、白色軽石粒(5YR8/1)を含む褐灰色土(7.5YR4/1)が堆積している。

遺物 なし。

所見 概して小規模な本調査区検出の土坑の中でもさらに小規模な部類に属するが、しっかりとした掘方を有している。土坑の用途・機能については不明。

(10) II-12区12号土坑(第21図、PL. 10)

位置 調査区の中央からやや北東寄り。II-12区14号土坑のすぐ西側に近接する。X=29470~271、Y=-498869~870。

重複 なし。

主軸方位 N-90°。

規模 長径0.26m、短径0.25m、深さ0.39m。

平面形状 圓丸長方形状を呈する。

断面形状 しっかりした掘方を有し、上縁部もあまり開かず、U字形状を呈する。

埋土 灰褐色土(7.5YR4/2)及び塊状の鈍い黄橙色地山砂

質土(10YR5/3)を多量に、白色軽石粒(5YR8/1)を含む褐灰色土(7.5YR4/1)が堆積している。

遺物 なし。

所見 概して小規模な本調査区検出の土坑の中でもさらに小規模な部類に属するが、しっかりとした掘方を有している。土坑の用途・機能については不明。

(11) II-12区13号土坑(第21図、PL. 10)

位置 調査区の北西寄り。X=29472、Y=-49871。

重複 なし。

主軸方位 N-59°-E。

規模 検出長径0.44m、短径0.37m、深さ0.07m。

平面形状 南西端が調査区外に出るが、北東-南西方向に長い圓丸長方形状を呈するものと思われる。

断面形状 浅く扁平な掘方を有し、不整形状を呈する。

埋土 灰褐色土(7.5YR4/2)及び塊状の鈍い黄橙色地山砂質土(10YR5/3)を多量に、白色軽石粒(5YR8/1)を含む褐灰色土(7.5YR4/1)が堆積している。

遺物 なし。

所見 概して小規模な本調査区検出の土坑の中でも大型の部類に属するが、一般的に言えば小規模な土坑で、掘方も浅い。土坑の用途・機能については不明。

(12) II-12区14号土坑(第21図、PL. 10)

位置 調査区の中央からやや北東寄り。II-12区12号土坑のすぐ東側に近接する。X=29470~471、Y=-49869。

重複 なし。

主軸方位 N-6°-W。

規模 長径0.19m、短径0.18m、深さ0.16m。

平面形状 圓丸長方形状を呈する。

断面形状 小規模ながら比較的しっかりした掘方を有し、上縁部がやや広く開口したU字形状を呈する。

埋土 灰褐色土(7.5YR4/2)及び塊状の鈍い黄橙色地山砂質土(10YR5/3)を多量に、白色軽石粒(5YR8/1)を含む褐灰色土(7.5YR4/1)が堆積している。

遺物 なし。

所見 概して小規模な本調査区検出の土坑の中でも最小の部類に属するが、比較的しっかりとした掘方を有している。土坑の用途・機能については不明。

3. II-12区遺構外出土遺物

非掲載ではあるが、表土中より近世国産磁器片2点(5g)、近世国産施釉陶器片3点(70g)、近世在地系皿片1点(5g)、近世・近現代瓦片3点(200g)、近現代陶磁器片8点(100g)、近現代土器類片1点(40g)、時期不明土器類片5点(50g)が出土している。

第7節 III-6区から検出された 遺構と出土した遺物

III-6区は、主要地方道伊勢崎・深谷線の西側下り車線に面した調査区で、平成26年度に調査されたIII-1区の南端から約2.5m南側に位置する北北東—南南西方向に細長い長方形形状を呈する調査区である。主要地方道伊勢崎・深谷線の現在供用範囲を挟んで、II-12区の西側に当たる。

実際に調査が可能であったのは、調査区の南側半分の一部に当たる全長約2.6m、幅約2.95mのごく狭い範囲である。

調査可能な範囲の全面からIII-6区4号溝状遺構が検出された。

1. 溝状遺構

III-6区の調査可能範囲の全面からIII-6区4号溝状遺構の東肩から溝底東半分に当たる部分が検出された。平成26年度の調査で、III-1～3区の東側を南北方向に流れる長大な4号溝の南側接続部分に当たるものと推測される。

平成26年度に調査されたIII-1～3区から検出された4号溝の状況について、当事業団編「公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第607集 世良田環濠集落遺跡(2) 社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点)(主)大間々世良田線世良田交差点改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(平成27年11月20日刊行)から引用する。

位置 III-1～3調査区の東側を南北方向に流れる長大な溝。X=29483～546、Y=-49865～876。

重複関係 III-1調査区では59号土坑を掘り込む。III-2

調査区では26号土坑に、III-3調査区では7・8号土坑、1号配石に掘り込まれ、2号配石を掘り込む。

規模と形状 III-1～3調査区にかけて南北方向に流れる長大な溝。南北両端及び東側が調査区外に出るため内容は不明である。3号溝同様、主要地方道伊勢崎・深谷線に先行する道路跡の側溝になる可能性があるが、3号溝に比べて格段に規模が大きい。検出延長200m・幅0.5m・深さ0.1m。

埋土 上層暗褐色土・鈍い黄褐色土・褐色土、中層黄褐色土・褐色土・黒褐色土・暗褐色土、下層黒褐色土・灰黃褐色土。

遺物 肥前磁器染付丸碗片1点、肥前磁器猪口1点、瀬戸・美濃陶器天目茶碗1点、円盤型加工土製品6点、常滑陶器腹片5点、瀬美陶器裏片2点、在地系土器皿1点、在地系土器おろし皿1点、在地系土器口鉢片2点、在地系土器内耳鉢片1点、在地系土器焙烙片4点、在地系土器片1点、羽口1点、砥石片2点。

時期 近世末期。

(1) III-6区4号溝状遺構(第22図、PL.11)

位置 III-6区調査範囲の全域。X=29471～474、Y=-49881～883。

重複 なし。

主軸方位 N-12°-E。

規模 検出全長2.50m、検出上幅2.20m、検出下幅0.75m、掘り込み面からの深さ1.75m。

埋土 灰白色輕石粒(5YR8/1)を含む黒褐色土(10YR3/2)主体。

遺物 非掲載ではあるが、中世国産焼結陶器片2点(110g)、中世在地系鉢・鍋片1点(10g)、中世在地系皿片2点(70g)、近世国産施釉陶器片1点(40g)、近世・近現代在地系焙烙・鍋片1点(70g)、近世在地系皿片1点(5g)等が出土している。

所見 平成26年度の調査でII-1～5区から検出された3号溝が、主要地方道伊勢崎・深谷線に先行する道路跡の東側溝になる可能性が指摘され、同じく平成26年度調査のIII-1～3区から検出された4号溝が、3号溝の対になる西側溝である可能性が指摘された。平成26年度のIII-1～3区の調査において検出された4号溝は、溝の西肩から西岸斜面及び溝底の西半部分が検出されたのであ

るが、今回の調査でも、溝の西岸斜面から溝底のはば西側半分に当たる部分の一部が検出された。

西岸斜面の中央部は大きく擾乱され、調査時の安全確保の必要性から調査区四辺に法面を設定して調査せざるを得ず、溝底もごく一部しか検出し得なかった。そのため、検出状況は良くない。

溝岸斜面は50~70度前後と急勾配で、溝肩の標高は36.55m前後、溝底の標高は34.77~83m前後である。

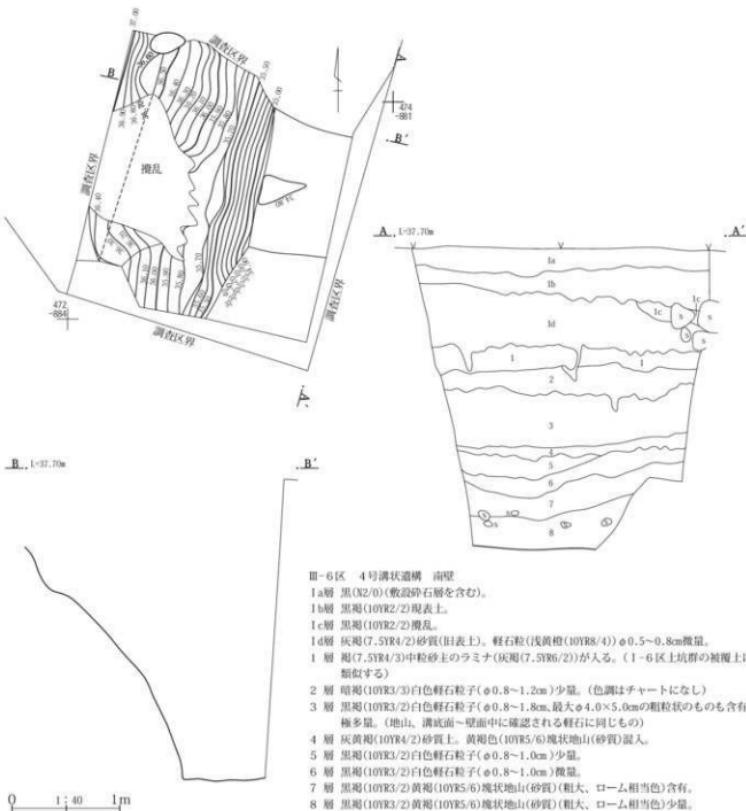
平成26年度調査時のⅢ 1~3 区から検出された4号溝

第7節 Ⅲ-6区から検出された遺構と出土した遺物

も、その一部が検出されたに過ぎず、全容が検出された箇所は1箇所も無いので、平成26年度調査時のⅢ 1~3 区から検出された4号溝よりも、今回の調査におけるⅢ-6区4号溝状遺構の方が格段に大きく、深い点は、検出状況の違いによるものと理解しておくべきであると考える。

なお、堆積土や形状からは水流の痕跡は明確には確認することが出来なかつた。

時期 中世のものと考えられる。



第22図 III-6区4号溝状遺構

2. III-6区遺構外出土遺物

本調査区の表土中から出土した遺物3点(PL.23-121～123)を掲載した。

PL.23-121は14世紀前半の常滑陶器甕か壺口縁部である。

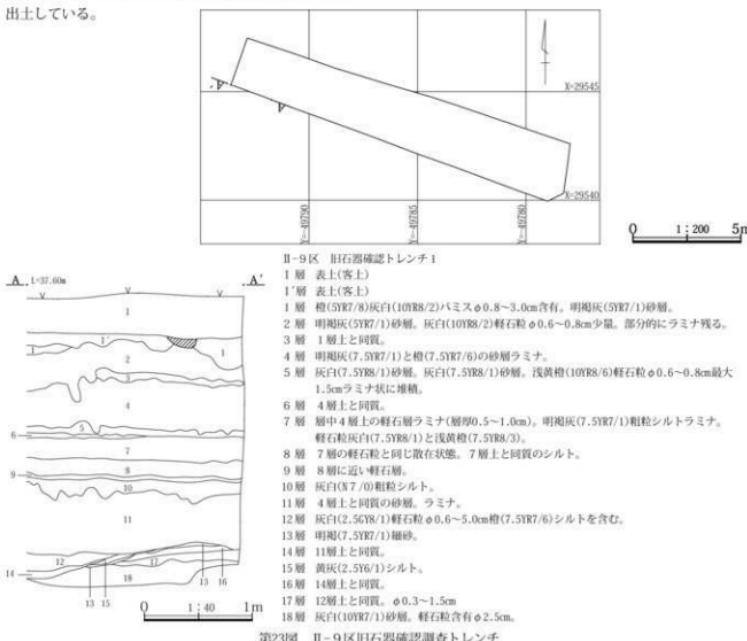
PL.23-122は中世の五輪塔地輪の転用の石製品。左辺には敲打痕が、上面には敲打痕および刃なし傷が残される。裏面側中央は浅く窪み、敲打後摩耗したように見えるが、なぜそう見えるのか判然としない。

PL.23-123は完形の寛永通寶(新寛永)。

この他、非掲載ではあるが、表土中より中世国産焼締陶器片5点(100g)、中世在地系皿片1点(20g)、近世国産磁器片1点(40g)、近世国産施釉陶器片1点(30g)、近世・近現代在地系培培・鍋片5点(180g)、近世・近現代瓦片2点(600g)、近現代陶器類片3点(380g)が出土している。

第8節 旧石器確認調査(第23図、PL. 5)

全ての遺構調査を終了した後にII-9区の南東隅部において長さ2m、幅約0.3mのトレンチを設定し、現地表面より約2.75mの深さまで掘削し、旧石器の確認調査を実施した。調査の結果、旧石器の出土を確認することは出来なかった。



第4章 調査成果の整理とまとめ

周知のように、世良田環濠集落遺跡は、平安時代末期の保元2(1157)年に、源義國の長男である新田義重が、父義國とともに再開発した上野国新田郡南西部の早川流域・石田川流域の「空闊の郷々」19郷(女塚、上江田、下江田、田中、大館、柏川、小角、押切、出塚、世良田、三木、上今井、下今井、上平塚、下平塚、木崎、長福寺、多古宇、八木沼)について、鳥羽法皇御願寺である金剛心院を本家に、藤原北家花山院流藤原忠雅を領家として寄進され立券し、同年、藤原忠雅により新田義重が新田荘下司職に補任されて成立した上野國内屈指の中世庄园である新田荘のただ中に所在する中世に形成された、外郭に大規模な堀が廻らされた環濠集落の道路として名高い遺跡である。平成24年度に実施された太田市教育委員会の調査により中世の環濠集落の堀が早川まで続いていることが明らかとなつた。

世良田環濠集落は、西を早川で限り、北辺、東辺、南辺を人工的な堀で囲繞している。北辺と東辺の堀は一連のもので、集落の北東部で鉤の手状に曲がっている。北辺から東辺への屈曲地点からは石田川に向かう水路が分岐する。環濠集落は、方約1km四方の広さを有し、環濠内には長楽寺、八坂神社、総持寺等が所在し、宿や市が営まれていた。環濠内に居住していた人々の生活用水を供給した基幹水路が、現在、地元でナメラ堀と称される水路であり、総持寺館の周囲を巡る堀から派生していたものと考えられる。宿や市を堀で囲むことには、勿論、防衛上の目的も大きいであろうが、それ以上に、町人地と百姓地とを区分するという目的が大きな意味を有していたのではないかと考えられている(峰岸純夫「中世東国庄园の風景」、能登健・峰岸純夫編『よみがえる中世5浅間火山灰と中世の東国』、平凡社、1989)。

世良田環濠集落の北には、金山城を築いた由良氏の重臣である大沢氏の居館であったと伝える岩松陣屋跡が所在しており、環濠集落の西側には、新日本宗家の館跡と伝えられる新田館跡が、東側に新田氏累代の被官であった船田氏の居館跡と伝えられる船田館跡など、上野国新田郡における重要な中世遺跡が点在している。

世良田環濠集落の北東隅部にかかる世良田今井城は、新田金山城主である由良氏の有力被官である大沢氏の居館で、戦国期16世紀に機能していたことが知られているが、発掘調査の結果、世良田今井城の造営時に、世良田環濠集落を廻繞する堀を破壊していることが判明した。よって、世良田環濠集落の下限は15世紀と考えられている。

平成24年度から、太田市教育委員会によって着手された圃場整備事業にかかる発掘調査では、世良田環濠下遺跡のC-21号溝から12~15世紀の陶磁器が出土しており、有力な年代指標となりそうである。また、先述したように、長楽寺境内地の南限が世良田環濠集落の南辺堀となっている点から見て、長楽寺は、世良田環濠集落の成立後に、その敷地が定められた可能性が高いものと考えられる。周知の通り、長楽寺は、鎌倉時代前期の承久3(1221)年に、得川義季が、臨濟宗の開祖である栄西の高弟である榮朝を招いて創建されたわけであるから、世良田環濠集落の整備はそれ以前であった可能性が高いという考え方がある(須田茂「世良田環濠集落遺跡～中世世良田の景観復元に向けて～」『群馬地名だより』92、2012)。ただし、この点は、世良田環濠集落の南限が、環濠集落に先行して創建されていた長楽寺の寺域南限ラインを利用したという考え方もあり立つので、発掘調査による客観的な根拠を得なければ、その可否は明確にはし難いところであろう。

なお、得川義季によって神宗寺院として開基された長楽寺であるが、その後は顧密兼修の有力禅院として繁榮した。門前は世良田宿となり、周辺では四日市・六日市が開かれ、新田荘を含む東上野の交通と交易の中心地、物流の拠点となった。鎌倉時代後期の弘安4(1281)年の長楽寺住持院豪の文書注進状に「世良田宿在家日記」とあり、さらには長楽寺の僧侶の記録類にも「世良田宿」の語が見えており、宿の存在を確認することが出来る(山本隆志「鎌倉後期における地方門前宿の発展・上野国世良田を中心にして」『歴史人類』17、1989)。

ただ、世良田環濠集落の痕跡は、環濠範囲内の市街地

第4章 調査成果の整理とまとめ

化が甚だしいことなどもあり、現在までのところ、ほとんど明らかになっていないのが実情である。これまで断続的に実施され世良田交差点改良事業に伴う一連の発掘調査では、残念ながら、これらに関係するような埋跡は発見することができなかつた。また、今回、ここに報告する発掘調査においても、残念ながら、いずれの調査区においても調査範囲が狭いため、全体像を明らかにすることが出来なかつた。

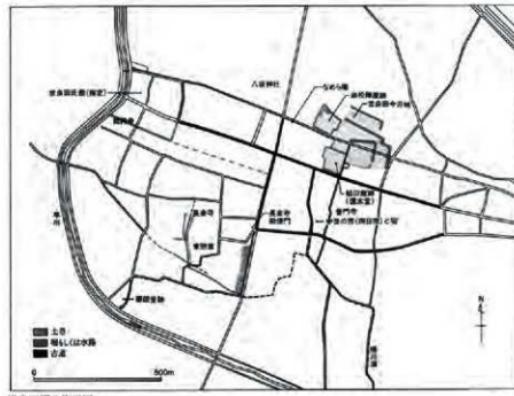
ただし、近世の井戸、土坑、建物の柱穴、柵列の穴等の遺構が確認され、とくに土坑からは長楽寺で使用された多数の瓦片が出土した。その概要については既刊の報告書『世良田環濠集落遺跡』(1)で報告した通りであり、本報告書で報告する調査においても近世～近現代の瓦片が大量に出土した。また、前回の平成26年度の調査及び今回の平成28年度の調査において、大量に出土した中近世～近現代の陶磁器類の中には、当時は高級品とされた肥前陶磁器が多数出土していることや、瀬戸・美濃系陶磁器、常滑陶器など東海地方を生産地とする陶磁器類も大量に出土しており、この地に、国内の主要窯場で生産された製品が廻されていたことが判明している。そのような、物流の高い水準や、そうした器物を大量に購入・使用しつづけていた当該地域の豊かさが感じられる。

近世に徳川将軍家の家祖と位置づけられた中世豪族得

川氏の開基である長楽寺は、江戸時代を通じて幕府の手厚い庇護を受け、繁栄したこと、また、將軍家祖先の地に造営された世良田東照宮の存在などが、中世環濠集落としての機能を喪失した後も引き続き、この地が、これら高い格式を有する寺社の門前町として繁栄していたことを物語るであろう。

江戸幕府の歴代將軍の手厚い庇護を受けてきた中世以来の古利・長楽寺や世良田東照宮の門前町というこの地の特質を考慮しても、五街道のような近世の主要街道に直接面した宿場町ではないこの地域に、これほどの流通と消費があったことは、前回の調査時と同様、驚くべき点と言えよう。今後、周辺地域の歴史的環境を考察する上で、重要な手がかりとなりうる事象であると確信する。

また、本遺跡出土の中近世～近現代の土器・陶磁器類の資料群は、群馬県の東毛地域における中近世～近現代の土器・陶磁器の一つの指標となるべき資料群と位置づけられるものと考える。本遺跡の調査成果が、今後も当該地域の中世～近代の歴史を解明する上で、重要な歴史資料として活用されていくことを期待したい。



第24図 世良田環濠集落の想定復元図(能登健・峰岸純夫編『よみがえる中世5
浅間火山灰と中世の東国』平凡社、1989、P.171所載の図を加工)

遺物観察表

第4表 遺物観察表

I-5区1号溝

Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.12	1	更前磁器 碗付盤	南壁面 口縁部1/2	□1 底 6.4	高 5.3 /白/	外面に海浜風景。口縁部内面に雷文帶。	19世紀前葉～中葉
PL.12	2	既平陶器 鉢	埋土 底 (10.7)	□1 底	高 — /灰白/	内外面の輪は剥落し、高台内面に残存するのみ。体部外側下端に突帯ぐる。	近現代

I-5区2号溝

Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.12	3	既貢 文久永貞 一部欠損	床面直上 一部欠損	外 2.654 内 2.001	厚 0.137 重 2.6 /青銅色/ 赤	柄書体。「永」の字の一部が削れて欠損している。背の部分が長い。文久3(1863)年2月から慶応3(1867)年まで铸造。	近世末期～近代

I-5区2号溝

Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.12	4	在地系?土 印押 皿	埋土 底 (6.4)	□1 底	高 — /金雲母含む/橙	底部右回転糸切無調整。底部内面に織目。	中世か
PL.12	5	在地系?土 印押 皿	埋土 底 6.4	□1 底	高 — /金雲母含む/橙	底部右回転糸切無調整。底部内面に織目。	中世か
PL.12	6	既消陶器 鉢	埋土 底 目付部	□1 底	高 — /織灰/	外面に放射状の押印。比較的似た押印は13世紀後半から14世紀前半に認められる。	中世
PL.12	7	既消陶器 鉢	埋土 底 目付部	□1 底	高 — /織灰/	器表は褐色。器型はやや厚い。	中世
PL.12	8	既消陶器 鉢	埋土 底 目付部	□1 底	高 — /灰黄褐/	外面に板状工具によるナデ。	中世

I-5区遺構外

Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.12	9	肥前磁器 染付虹皿 1/2	表土 表土 (1.4)	□1 (4.9) 底 (1.4)	高 1.5 /白/	残存部外側2寸方に下弦の弧と中心附近に点の押印。その間に蔓草の染付。内面から体部外側に透明釉。	19世紀
PL.12	10	製作地不詳 肥前 染付小杯	表土 完全形	□1 底 2.3	高 4.3 /白/	口縁部外側に1条、外面高台堤に酸化コバルトによる2条の織目と團扇間に擬縫。	近現代
PL.12	11	製作地不詳 染付小杯	表土 完全形	□1 底 2.9	高 4.9 /白/	口縁部外側に1条、外面高台堤に酸化コバルトによる2条の織目と團扇間に擬縫。染付はコバルトによる。	近現代
PL.12	12	製作地不詳 染付小杯	表土 1/2	□1 (7.0) 底 3.0	高 4.4 /白/	外面下半を取りし、外面に酸化コバルトによる植物文の染付。高台端部から高台内無釉。	近現代
PL.12	13	肥前磁器 染付碗	表土 体部から底部 底 3/4	□1 底 4.0	高 — /白/	外面織縫の染付。底部内面に重縫線内に「福」字。染付は呉須。	19世紀中葉～後葉
PL.12	14	肥前・美濃 染付丸碗	表土 1/2	□1 (9.9) 底 (3.8)	高 5.0 /白/	外面に酸化コバルトによる梅樹文。口縁部内面に2重織縫。底部内面に重縫線内に草文。高台内に重縫。	近現代
PL.12	15	製作地不詳 肥前 染付反対縫	表土 1/3	□1 (9.6) 底 (3.4)	高 5.6 /白/	外面に「寿」字文と輪編文。口縁部内面に3重織縫。底部内面に重縫線に不規則な縫。	19世紀中葉
PL.12	16	肥前磁器 染付鉢	表土 底 6.4	□1 底 6.4	高 — /白/	体部から上部は八角形。内外面染付。体部の一部別口に燒接残る。高台内に燒接時に記した文字が認められる。	18世紀後葉～19世紀中葉
PL.12	17	製作地不詳 染付鉢	表土 口縁部1/3	□1 (17.0) 底 —	高 — /白/	内外面酸化コバルトを用いた手書きの染付。	近現代
PL.12	18	製作地不詳 同窓 大口鉢	表土 1/2	□1 9.4 底 3.9	高 2.0 /白/ にぶい黄緑/	外面の口縁部以下右回転鋸削り。内面から口縁端部外側に炎症。	19世紀
PL.12	19	既消陶器 鉢	表土 口縁部片	□1 底 —	高 — /白/	内面下半の輪は剥落。口縁部は肥厚し、内外面に明黄褐色の輪。	近現代
PL.13	20	瓦 不詳	表土 不詳	表 29.0	厚 2.0 /白/	裏表は灰白から黒色。板状で2寸所に焼成前の剝孔状凹穴を斜めにあける。片面に織目でガネ被が認められる。	近世以降
PL.13	21	瓦 不詳	表土 不詳	長 幅 —	厚 2.0 /白/	裏表は灰白から黒色。板状で3カ所に焼成前の剝孔状凹穴を斜めにあける。	近世以降

I-6区1号溝

Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.14	22	既貢 通寶(新寶本)	理上 1/2	外 — 内 —	厚 0.151 重 1.3 /青銅色/ 赤	裏表体。下の字が「元」となるが表裏は特定できない。背は部分が薄く不明瞭。「實」の字は拂済れてい。	中近世

I-6区遺構外

Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.14	23	肥前磁器 染付虹皿 1/3	表土 底 2.0	□1 (6.0) 底 2.0	高 1.2 /白/	空押し成型。外面に動草文。内面から口縁端部外側に透明釉。高台内にエンボスの跡。	19世紀中葉以降
PL.14	24	既貢 通寶(新寶本)	表土 完全形	外 2.440 内 1.811	厚 0.146 重 2.9 //	面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。	近世

遺物觀察表

II-9区1号土坑

PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	船上/機成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴		備考
						輪郭部	内部	
PL.14	25	肥前磁器 染付小杯	理上 口縁部1/2欠	□ (6.8) 高 3.5 底 2.6	/灰白/	外面に草文を彫り描く。高台端部のみ無輪。		近世
PL.14	26	肥前磁器 理上 口縁部2/3欠	□ (5.9) 高 2.6 底 2.0	/白/		残存部無文。高台端部無輪。		近世
PL.14	27	肥前磁器 理上 染付小碗	□ (6.4) 高 3.5 底 2.8	/白/		外面に植物文の染付。高台端部のみ無輪。		近世
PL.14	28	肥前磁器 理上 染付小碗	□ (8.0) 高 3.1 底 3.0	/灰白/		外面に梅樹文か。高台端部のみ無輪。		18~19世紀前葉
PL.14	29	瀬戸・美濃磁 染付小碗	理上 口縁部一部、底 部1/2欠	□ (4.6) 高 5.3 底 (2.8)	/白/	口縁部外側から高台外面に崩損輪。内部と高台内透明輪。 高台端部のみ無輪。		近現代
PL.14	30	肥前磁器か 染付小碗	理上 口縁部1/2欠	□ (6.4) 高 4.7 底 (3.2)	/白/	外面に花卉文。口縁部内面に3重圓輪。		19世紀前葉~中葉
PL.14	31	肥前磁器か 染付碗	理上 口縁部一部、底 部1/2欠	□ (6.7) 高 6.1 底 (3.4)	/白/	残存部外面に1カ所鳥を描く。線の部分は釘彫りで描き、 鑽みを入れる。		19世紀前葉~中葉
PL.14	32	瀬戸・美濃 染付碗	理上 底	□ — 高 — 底 (3.9)	/白/	輪郭部を釘彫りし、鑽みを入れる。		19世紀前葉~中葉
PL.14	33	肥前磁器 染付碗	理上 口縁部1/4欠	□ (6.8) 高 6.1 底 3.2	/白/	口縁部外側1重圓輪。内部は無文。		19世紀前葉~中葉
PL.14	34	肥前磁器 染付碗	理上 口縁部1/2欠	□ (6.6) 高 6.0 底 4.7	/白/	外面に花卉文、反対側に詩の染付。口縁部内面に3重圓輪。		20世紀前葉~中葉
PL.14	35	肥前磁器か 染付小丸碗	理上 口縁部1/2欠	□ (7.5) 高 4.7 底 2.9	/白/	外面に管状の植物文を染付。底部内面に不明文様。		18世紀後葉~19世紀前葉
PL.14	36	肥前磁器 染付小丸碗	理上 口縁部2/3欠	□ (8.4) 高 4.9 底 3.2	/白/	外面菊花文状内に累欵文。口縁部内面に2重圓輪。底部内 面1重圓輪内に変化した五弁文。		18世紀前葉~中葉
PL.14	37	肥前磁器 染付碗	理上 1/3欠	□ (8.2) 高 3.8 底 (3.7)	/灰白/	外面に梅樹文か。高台端部のみ無輪。		19世紀前葉~中葉
PL.14	38	肥前磁器 染付筒型碗	理上 口縁部1/2欠	□ (6.4) 高 5.4 底 3.9	/灰白/	外面に幾何文模様と簡略化した花紋の文様を描く。高 台端に一列の綱状文。高台脇と底台境に1重圓輪。口縁部 内面に施路した四瓣文。底内面に1重圓輪に五弁花。 五弁花はニンチャク印形か。透かし輪は白墨し、成不良。		18世紀後葉~19世紀前葉
PL.14	39	肥前磁器 染付筒型碗	理上 1/2欠	□ (6.3) 高 5.3 底 (3.5)	/灰白/	外面菊花文又は菱形文。高台脇に松葉状文。高台脇と高台 端に1重圓輪。口縁部内面に2重圓輪。底部内面に1重圓輪 内に不明文様。		18世紀後葉~19世紀前葉
PL.14	40	肥前磁器 染付筒型碗	理上 1/3欠	□ (6.4) 高 — 底 —	/白/	外面菊花文又は菱形文。高台脇内面に施路化した方角輪。 底部内面に不明文様。		18世紀前葉~19世紀前葉
PL.14	41	瀬戸・美濃 染付端反鐘	理上 1/2欠	□ (8.8) 高 4.7 底 3.9	/白/	外面に花文の染付。口縁部内面に輪広と細綱各1条の圓輪。 底内面2重圓輪内に花文。		19世紀前葉~中葉
PL.14	42	瀬戸・美濃 染付端反鐘	理上 1/2欠	□ (9.3) 高 5.0 底 3.4	/白/	外面と底面部の綱文部分を釘彫きし、鑽みを入れる。外面 は芸文状。口縁部内面は輪広と細綱各1条の2重圓輪。底部 内面2重圓輪内に不明文様。		19世紀前葉~中葉
PL.14	43	瀬戸・美濃 染付端反鐘	理上 口縁部一部、底 部1/2欠	□ (9.3) 高 4.7 底 (3.5)	/白/	外面と底面部の綱文部分を釘彫きし、鑽みを入れる。外面 は芸文状。口縁部内面は輪広と細綱各1条の2重圓輪。底部 内面2重圓輪内に不明文様。		19世紀前葉~中葉
PL.14	44	瀬戸・美濃 染付端反鐘	理上 完形	□ 10.4 高 5.9 底 4.5	/白/	外面3方に簡略化した花卉文。口縁部内面は輪広と細綱各1 条の2重圓輪。底部内面1重圓輪内に花卉文か。		19世紀中葉~後葉
PL.14	45	瀬戸・美濃 染付端反鐘	理上 口縁部1/2欠	□ (11.2) 高 6.4 底 4.7	/白/	外面に梅樹と鶯か。口縁部内面に梅文。底部内面1重 圓輪内に梅文。鏡面あり。		19世紀前葉~中葉
PL.15	46	肥前磁器 染付広東焼	理上 口縁部1/2欠	□ (9.3) 高 5.5 底 4.4	/白/	外面の方に大きく植物文を描く。口縁部内面に1重圓輪。 底部内面1重圓輪内に不明文様。		18世紀前葉~19世紀前葉
PL.15	47	肥前磁器 染付広東焼	理上 口縁部一部欠	□ (10.8) 高 6.7 底 4.9	/白/	外面は簡略化。口縁部内面に6本の方角文。口縁部内面に2重圓輪。		18世紀前葉~19世紀前葉
PL.15	48	肥前磁器 染付広東焼	理上 口縁部1/3欠	□ (10.5) 高 6.3 底 5.9	/白/	外面は菱形文と文を交互に3カ所描く。口縁部内面は2 重圓輪。底部内面1重圓輪内に桔子状文。		18世紀前葉~19世紀前葉
PL.15	49	肥前磁器 染付広東焼	理上 口縁部1/4、底 部1/2欠	□ (10.6) 高 6.1 底 (5.5)	/白/	外面の方に大きく植物文を描く。口縁部内面は2重圓輪。 底部内面1重圓輪内に不明文様。		18世紀前葉~19世紀前葉
PL.15	50	肥前磁器 染付広東焼	理上 口縁部の一部と 底部1/2欠	□ 11.3 高 — 底 —	/白/	外面に簡略化した海棠風景を描く。内面は無文。		18世紀後葉~19世紀前葉
PL.15	51	肥前磁器 染付広東焼	理上 底部1/3欠	□ — 高 — 底 6.3	/白/	外面染付。小片のため文様不明。底部内面1重圓輪内に不 明文様。		18世紀後葉~19世紀前葉
PL.15	52	肥前磁器 染付鉢	理上 口縁部一部、底 部1/2欠	□ (8.7) 高 8.1 底 (5.0)	/白/	体部外面に丸文。高台脇に雲状文。口縁部内面に2重圓輪。 高台内1重圓輪内に不明文。		19世紀中葉~後葉
PL.15	53	肥前磁器 染付鉢	理上 底部1/3欠	□ 13.5 高 9.3 底 5.7	/白/	体部外面に龜甲文。高台外面に2重圓輪。透明軸に貫入ある。		18世紀
PL.15	54	肥前磁器 染付鉢	理上 2/3欠	□ (14.0) 高 3.8 底 (9.2)	/白/	外面は無文。口縁部から体部内面に簡略化した唐草文。底 部内面小字のコイン型印押による五弁花。底部内面輪郭の 目隠削ぎで、釉剥げ時にアルミナ砂を撒布。		18世紀後葉~19世紀前葉
PL.15	55	肥前磁器 染付鉢	理上 1/3欠			輪郭目円窓高台。内面簡略化した染付。外面は簡略化した 唐草文。		19世紀前葉~中葉

PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 寸法	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.15	56	漆前磁器	理上 染付皿 1/3	□(14.0) 底 (9.2)	高 3.8 /灰白/	蛇ノ目四型高台。内面施墨化した染付。外面は簡略化した唐草文。	18世紀前葉～中葉
PL.15	57	漆前磁器	理上 染付皿 口縁部1/3欠	□(14.7) 底 8.9	高 4.2 /灰白/	口輪、蛇ノ目四型高台。内面に海底風景の染付。外面は無文。	19世紀前葉～中葉
PL.15	58	漆前・美濃 陶器	理上 1/4	□(6.0) 底 —	高 — /灰白/	体部外面部回転削り。内面から口縁部外面に灰釉。	18世紀後葉～19世紀前葉
PL.15	59	漆前・美濃 陶器 小皿	理上 口縁部1/3、底 部窓	□(6.2) 底 2.7	高 3.0 /灰白/	高台脇以下回転削り。高台貼り付け。内面から口縁部外面に灰釉。	18世紀後葉～19世紀前葉
PL.15	60	製作地不詳 陶器	理上 体部1/3	□— 底 —	高 — /灰白/	体部は波状をなし、口縁部は直線的に開く。高台脇も直線的に開く。外面部に灰釉。口縁部から脚線模を流す。	近現代から
PL.15	61	製作地不詳 陶器	理上 体部1/3	□— 底 —	高 — /灰白/	体部は波状をなし、口縁部は直線的に開く。高台脇も直線的に開く。外面部に灰釉。口縁部から脚線模を流す。高台脇無地。	近現代から
PL.15	62	漆前・美濃 陶器 手分彌	理上 底部	□— 底 3.8	高 — /灰白/	鍋輪と灰釉の掛け分け窓。高台にも施釉。	近世
PL.15	63	漆前・美濃 陶器 脚線模	理上 1/2	□(8.8) 底 (4.4)	高 6.0 /灰白/	外面口縁部下に5条の蝶巣状凹溝。内面から口縁部外面に灰釉。体部外面から高台に施釉。高台脇部のみ無釉。	18世紀中葉～後葉
PL.16	64	漆前・美濃 陶器 灯火受皿	理上 1/3	□(9.4) 底 (4.5)	高 2.0 /灰白/	鍋輪施釉後に体部外面以下を拭う。	18世紀後葉～19世紀前葉
PL.16	65	漆前・美濃 陶器 灯火受皿	口縁部1/4、底 部1/2	□(9.9) 底 (5.2)	高 2.0 /灰白/	鍋輪施釉後に体部外面以下を拭う。	18世紀後葉～19世紀前葉
PL.16	66	漆前・美濃 陶器 灯火受皿	理上 1/3	□(10.6) 底 (5.3)	高 2.0 /灰白/	鍋輪施釉後に体部外面以下を拭う。受け部の切り込み部残存しない。	18世紀中葉～後葉
PL.16	67	漆前・美濃 陶器 灯火受皿	理上 完形	□(14.0) 底 5.0	高 2.4 /灰白/	鍋輪施釉後に体部外面以下を拭う。受け部の切り込みは小さく。体部外面以下、部分的に油付着。	19世紀前葉～中葉
PL.16	68	漆前・美濃 陶器 灯火受皿	理上 1/2	□(10.0) 底 (4.4)	高 1.8 /灰白/	鍋輪施釉後に体部外面以下を拭う。	19世紀前葉～中葉
PL.16	69	漆前・美濃 陶器 灯火受皿	理上 2/3	□(10.2) 底 4.5	高 2.0 /灰黄褐/	鍋輪施釉後に体部外面以下を拭う。底部内面に重ね焼き痕。	18世紀後葉～19世紀前葉
PL.16	70	製作地不詳 陶器	理上 灯火台か 台部	□— 底 6.7	高 — /にぶい黄褐/	底部右回転糸切無調整。柱状部に取っ手の貼り付け痕残る。上部欠損。台部分の口縁部外面より上部は鉄輪。	19世紀から
PL.16	71	漆前・美濃 陶器	理上 口縁部1/8	□(21.0) 底 —	高 — /灰白/	口縁端部屈曲して開く。外面部に貫入の入る灰釉。	18世紀
PL.16	72	漆前・美濃 陶器 底	理上 底部1/2	□— 底 (7.7)	高 — /浅黄/	内面から高台脇に灰釉。灰釉に貫入る。底部内面輪状に種類をきる。貼付け高台。	18世紀
PL.16	73	製作地不詳 陶器 上里	理上 底部、蓋欠	□— 底 —	高 — /灰白/	口縁端部外面から体部外面下位に白釉。織かい貫入る。口縁端部から内面は無釉。体部の注ぎ口穴は5カ所。	19世紀
PL.16	74	漆前・美濃 陶器 脚線模	口縁部1/4、底 部1/2 元	□(10.0) 底 7.0	高 9.6 /灰白/	内面から高台脇に緋色の鉄釉。体部外面に黒色の鉄釉流す。近世～近代	
PL.16	75	漆前・美濃 陶器 脚線模	体部一部、底部 3/4	□— 底 —	高 — /灰白/	体部の相対する2部を重ねさせる。底部外面部回転削り後に間に割り、外面部に鍋輪施釉後に底部外面を拭う。内面部はほぼ全面に赤絞模の付着物。	18世紀～19世紀
PL.17	76	明・右向陶 器	理上 口縁部1/5	□(31.3) 底 —	高 — /赤褐/	内面のすり口は密で口縁部内面は磨り消す。口縁部外面下には回転削り。	18世紀後半～19世紀初
PL.17	77	明・右向陶 器	理上 口縁部1/5	□(31.3) 底 —	高 — /赤褐/	内面のすり口は密で口縁部内面は磨り消す。口縁部外面下には回転削り。	18世紀後半～19世紀初
PL.17	78	漆前・美濃 陶器 水槽	理上 1/2欠	□(21.5) 底 12.4	高 14.0 /灰白/	外面に「U」字状の陰刻文。内面から高台脇に灰釉。外面に鍋輪施釉を貯け部で2カ所流す。文様は簡略化している。底部内面に切跡2ヶ所残る。	19世紀前葉～中葉
PL.17	79	漆前・美濃 陶器 桶木紋	理上 口縁部1/3	□(23.7) 底 —	高 — /灰白/	口縁部は水平に開き、端部上面は平坦。口縁部内面から外面部は鉄釉。内面口縁部下には鉄化粧。	近世
PL.17	80	漆前陶器	理上 体部片	□— 底 —	高 — /褐灰/	表面はにぶい赤褐色。	中世
PL.17	81	漆前陶器	理上 唇部片	□— 底 —	高 — /にぶい褐/	表面はにぶい赤褐色。	中世
PL.17	82	漆前陶器	理上 体部下位片	□— 底 —	高 — /にぶい赤褐/	外面は成形時の凹凸が目立つ。	中世
PL.17	83	漆前 壺掛	理上 体部2/3、底部	□— 底 19.4	高 — /灰白/	体部外面部に高台外面部に印文文。体部に獅子形取っ手を貼り付ける。外面部は呂宋釉。内面と高台内には鍋輪施釉を薄く刷毛掛け。高台内に貫通しない凹凸が所残る。	19世紀前葉～中葉

遺物觀察表

PL_No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
PL.17	84	有地系土器 皿	理上 口縁部1/3欠	口 底	高	赤色粘土粒含む/ 赤	体部や内側。底部内部に左回転 の螺旋状模様。底部左回転系が無調整。色調は黄色味が 濃くやや硬質に燒きあがる。	近世以降	
PL.17	85	有地系土器 皿	理上 口縁部1/3欠	口 底	高	赤色粘土粒含む/ 赤	表面はやや内側向突起で開き、口縁端部外側は立ち上がり気 味。底部左回転系に一透ナガがある。	近世以降	
PL.18	86	有地系土器 皿	理上 1/2	長 底	高	白色粘土粒少量含 む/白	表面は白色で内側に少しあげて、表面は化粧で灰白色。側面から下部は縮縫状の型 模様がある。	近世以降	
PL.18	87	有地系土器 皿	理上 1/3	長 底	高	白色粘土粒少量含 む/白	表面は黒色から少しあげて、表面は化粧で灰白色。側面から下部は縮縫状の型 模様がある。	近世以降	
PL.18	88	有地系土器 跡か	理上 1/3欠	口 底 11.8	高 9.8	白色粘土粒少量含 む/灰白	燒し痕成形器は黒色。外面は回転施文具により施文。口 縁端部内側から外側の凹線上までミガキ。脚を3ヵ所に貼 り付ける。	近世以降	
PL.18	89	有地系土器 跡か	理上 1/2	口 底 (17.5) (11.6)	高 —	白色粘土粒少量含 む/褐灰	表面付近は白色。表面は黒色。種し痕成形。外側に回転施 文具により施文。口縁端部内側から外側の凹線上までミガ キ。口縁端部内側の表面は化粧で灰白色を呈し、器表の摩 耗と小刻印が目立つ。	近世以降	
PL.18	90	有地系土器 塔培	理上 一部欠	口 底	31.0 —	高 8.6	白色粘土粒少量含 む/ぶら相	丸底。底部外側に縮縫状の型模様が残る。底部外面に回転 施文具ヨコナガ痕。口縁部はほぼ直立し、耳は3ヵ所で口縁部上 に貼り付けたり付けてある。底部外側の表面、部分的に黒 変色。	19世紀中葉以 降
PL.18	91	有地系土器 塔培	理上 1/8	口 底 (36.4)	高	赤縄少ない印 赤褐色	丸底。底部前面は輪郭線を呈し、体部外側下位は捏ねたデ ザインであります。口縁端部外側はややむら。口縁部外側は黒 変色。	19世紀中葉以 降	
PL.19	92	有地系土器 塔培	理上 1/8	口 底 (37.0)	高	赤縄少ない印 赤褐色	表面は黒褐色を呈するが、断面は白も同色箇所があり、 底部外側の変色。口縁部外側はややむら。内側は1カ所に残存。	19世紀中葉以 降	
PL.19	93	有地系土器 塔培	理上 1/10	口 底 (36.2)	高	赤色粘土含む/浅黃 褐色	底部から塔培部。底部外側灰状。底部外側周縁まで 回転ヨコナガ。	19世紀中葉以 降	
PL.19	94	有地系土器 塔培	理上 一小片	口 底 (—)	高	白色粘土粒少量含 む/ぶら相	丸底。底部前面に縮縫状の型模様が残る。耳は3ヵ所で貼付 され、外側の口縁部と底部境界より痕の跡で剥し離しを有する。	19世紀中葉以 降	
PL.19	95	有地系土器 塔培	理上 口縁部から底部 片	口 底 (—)	高	白色粘土粒少量含 む/ぶら相	表面は黒天色。江戸時代に一般的な焼し燒成、平底の塔培。	近世	
PL.19	96	有地系土器 塔培	理上 底部片	口 底 (—)	高	赤縄少ない印/浅 黃褐色	表面は黒灰色。内面方形区画内に「大極上」印。	近世	
PL.19	97	有地系土器 鍋	理上 1/6	口 底 (38.0)	高	白色粘土粒少量含 む/黒	表面付近灰白色。器表黒色。口縁端部上面は平坦。口縁部 外側から内側には回転ヨコナガ。外側保付。体部外側下端 から底部は灰黄色。	近世	
PL.19	98	有地系土器 跡	理上 1/2一部、底 部1/8	口 底 (44.0) (32.0)	高 12.0	白色粘土粒少量含 む/黒	表面付近は白色。高台下部下面と体部外側上面の凹 部には輪郭線を呈する。口縁端部上面から底部内側にミガキ。	近世以降	
PL.20	99	有地系土器 大鉢	理上 一部欠	口 底 28.4 17.5	高 20.3	白色粘土粒少量含 む/灰	燒し痕成形器は黒色。高台下部下面と体部外側上面の凹 部には輪郭線を呈する。体部外側上面は回転施文具による。口 縁端部内側の表面は白色を呈し、被覆する酸性によるものか。 体部内側下面に使用感と思われる細い条溝が多く入る。 底部外側に低い脚部所残り。底部付近に受け置き跡付ける。 内側の一端黒変色。底部外側縮縫状。体部外側下端にヘラ 子ナガ。	近世以降	
PL.20	100	有地系土器 瓶	理上 底部1/3	口 底 —	高 —	白色粘土粒少量含 む/相	白色粘土粒少量含 む/相	PL.20-100の口縁部の可能性が高い。	近世以降
PL.20	101	有地系土器 瓶	理上 口縁部片	口 底 —	高	白色粘土粒少量含 む/相	白色粘土粒少量含 む/相	PL.20-100の可能性が高い。	近世以降
PL.20	102	有地系土器 瓶	理上 不詳	口 底 —	厚	6.0	赤縄少ない印/灰 褐色	全体形状不規則。	近世以降
PL.21	103	有地系土器 瓶	理上 1/4	長 底 (32.0)	厚	2.5	赤縄少ない印/灰 褐色	表面は黒色。外側面方向のミガキ。外面に小判型の不明印。	近世以降
PL.21	104	有地系土器 瓶	理上 1/4	長 底 (32.0)	厚	1.7	赤縄少ない印/灰 褐色	表面は灰色。角柱は貼付。角柱上面に燒成後の擦划。	近世以降
PL.21	105	有地系土器 瓶	理上 瓶部分	口 底 —	厚	1.6	赤縄少ない印/浅 黃褐色	表面は黒色。	近世
PL.21	105	有地系土器 瓶	理上 瓶部分	口 底 —	厚	1.6	赤縄少ない印/浅 黃褐色	表面は黒色。	中世
PL.21	106	有地系土器 瓶	理上 一小片	口 底 —	高	2.1	赤縄少ない印/浅 黃褐色	表面は灰色から灰白色。凹面には若干砂付着。凸面には格 子状叩き目。	中世

II-9区遺物外

PL_No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.21	107	残骨 頭骨通直	表上 内	2.827 2.109	厚 0.154 重 5.4	四文鏡、口波、面の文字、輪、郭は明瞭。背はやや劣化し ており一部不明瞭。	近世
PL.21	107	残骨 頭骨通直	表上 外	—	—	—	—

II-10区 1号土坑

PL_No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
PL.22	108	残骨陶器 底口直	理上 口縁部片	口 底 (24.4)	高 —	/灰褐色	口縁部「N」字状。肩部外側に自然輪。	14世紀前半
PL.22	109	残骨 底当片	理上 長 底 —	厚	3.1	赤縄少ない印/灰 褐色	表面付近はびい褐色。器表はびい黄褐色。真顔文様は三 つ巴文。	中世
PL.22	110	残骨 底当片	理上 体部片	口 底 —	高 —	—	接合部外側に帶状の叩き目。	12世紀～13世 紀

遺物観察表

II-11区 1号井戸

PL_No.	No.	種類 恐種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL_22	111	雷滑陶器 平底 彫かさ	理上 口縁部	口 底 —	高 — —	/灰/ 斜面外側に薄い自然釉。	中世

II-11区 2号井戸

PL_No.	No.	種類 恐種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL_22	112	製作地不詳 天目鏡 彫かさ	理上 口縁部から体部 片	口 底 —	高 — —	/灰白/ 斜面外側に天目釉。	不詳
PL_22	113	雷滑器 平底 彫かさ	理上 口縁部	口 底 —	高 — —	/浅黄褐/ 古瀬戸。外側は繊維目が明瞭。内外面に灰釉。	14世紀中葉～後葉
PL_22	114	雷滑器 平底 彫かさ	理上 体部竹	口 底 —	高 — —	/灰白/ 古瀬戸。内側から残存部外面上半に灰釉。内面に目跡1カ所残る。	14世紀中葉～15世紀中葉
PL_22	115	在埴系土器 1/5	理上 底	口 (11.2) 底 (5.5)	高 (2.8)	/黒刷/ 通常と色調が異なり、二次的な色調変化か。	中世
PL_22	116	在埴系土器 底1/4	理上 底	口 (6.0)	高 —	/橙/ 右回転系切無調整。	中世か
PL_22	117	在埴系土器 1/3	理上 底	口 (11.4) 底 (4.5)	高 4.0	金雲母少量含む/ 相	底径は小さく、短い柱状を呈する。底部の厚さは厚い。底部は燃りのない静止系切無。体部から底部内面の帯表剥落。
PL_22	118	在埴系土器 底1/2	理上 口縁部1/2、底 部充	口 (13.6) 底 6.4	高 3.7～ 3.9	金雲母少量含む/ 相	底部右回転系切無調整。底部内面と口縁部内面に黒色物付着。

II-11区遺構外

PL_No.	No.	種類 恐種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL_22	119	更紗磁器 全付属	表上 口縁部一部、底 部充	口 (11.4) 底 4.8	高 5.5	/灰白/ 外瀬丸文。口縁部内面は2重巻線、底部内面は2重巻線内にコンニャク判による五弁花。高台内に不明路。	18世紀前葉～中葉
PL_22	120	雷滑器 彫型	表上 口縁部	口 底 —	高 — —	/灰白/ 古瀬戸。口縁部は外反し、端部は立ち上がる。内外面に灰釉。	中世

III-6区遺構外

PL_No.	No.	種類 恐種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL_23	121	雷滑陶器 彫かさ	表上 口縁部	口 底 —	高 — —	/灰白/ 口縁部「N」字模。	14世紀前半
PL_23	122	五輪塔 地輪	表上 一部欠損	高 16.1 幅 21	奥 17 重 9500	地輪の軸用石製品。左辺には鍛打痕が、上面には鍛打痕および対ならし傷が残される。裏面側中央は幾く摩耗し、鍛打後摩耗したようにみえるが、なぜそう見えるのか判然としない。	中世
PL_23	123	残鉄 真木通寶 (新寶本)	表上 完形	外 内 2.333 1.850	厚 0.123 重 2.6	舟の輪、郭がわずかに不明瞭。	近世

写 真 図 版



1 I-5区調査区全景(北西から)



2 I-5区1号溝全景(南東から)



3 I-5区1号溝断面(南東から)



4 I-5区2号溝全景(南東から)



5 I-5区1号土坑全景(南から)

PL.2



1 I-5区1号土坑断面(東から)



2 I-5区2号土坑全景(西から)



3 I-5区2号土坑断面(南西から)



4 I-5区3～5号土坑全景(南西から)



5 I-5区1号井戸全景、B-B'断面(南西から)



6 I-5区1号井戸A-A'断面(南東から)



7 I-5区2号井戸全景(西から)



8 I-5区2号井戸断面(西から)



1 I-6 区調査区東側全景(北西から)



2 I-6 区2号溝、土坑群全景(北西から)



3 I-6 区土坑群東側、A-A' 断面(北西から)



4 I-6 区土坑群中央部より西側(南東から)

PL.4



1 I-6 区 1号井戸全景(南東から)



2 I-6 区 1号井戸断面(東から)



3 II-9 区調査区西側全景(南東から)



4 II-9 区 1号土坑全景(北西から)



5 II-9 区 1号土坑全景、A-A'断面(南東から)



1 II-9区 2号土坑全景(南から)



2 II-9区 3号土坑全景(北西から)



3 II-9区 3号土坑断面(南西から)



4 II-9区 旧石器確認トレンチ断面(北東から)



5 II-10区調査区全景(北西から)

PL.6



1 II-10区1・2号土坑全景(西から)



4 II-10区2号土坑断面(北東から)



5 II-10区3号土坑全景(北西から)





1 II-11区調査区全景(南西から)



2 II-11区 1～8号土坑全景(北東から)

PL.8



1 II-11区 1号井戸全景(南西から)



2 II-11区 1号井戸断面(南東から)



3 II-11区 2号井戸全景(南西から)



4 II-11区 2号井戸全景、B-B'断面(南から)



5 II-11区 2号井戸A-A'断面(南から)



6 II-11区 2号井戸B-B'断面(南から)



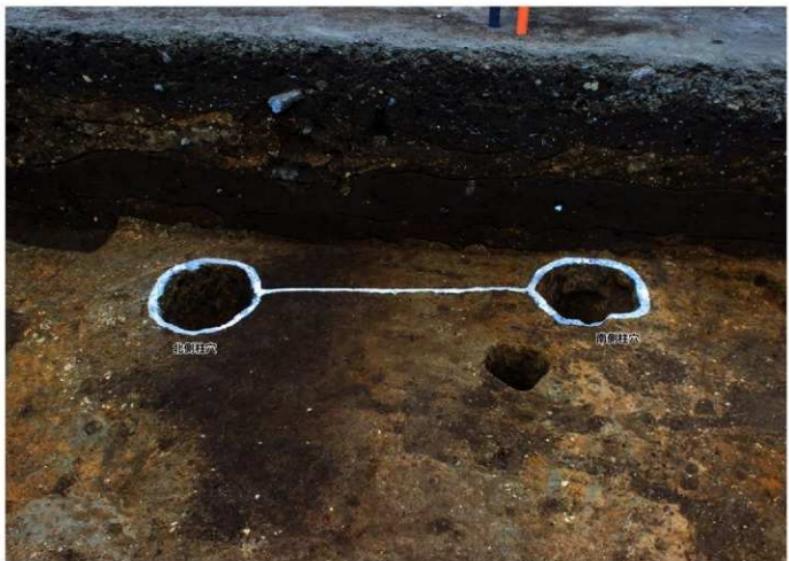
7 II-11区 2号井戸C-C'断面(北西から)



8 II-11区 2号井戸遺物出土状況(南から)



1 II-12(区)調査区全景(南西から)



2 II-12(区)1号掘立柱建物全景、東壁断面(西から)

PL.10



1 II-12区1号掘立柱建物北側柱穴全景(南から)



2 II-12区1号掘立柱建物南側柱穴、3号土坑全景(北から)



3 II-12区2・8・12・14号土坑全景(北西から)



4 II-12区5号土坑全景(南西から)



5 II-12区6・11号土坑全景(南西から)



6 II-12区7号土坑全景(西から)



7 II-12区9・10号土坑全景(西から)



8 II-12区13号土坑全景(南西から)



1 III-6区4号溝状遺構全景(北西から)



2 III-6区4号溝状遺構全景(南東から)



3 III-6区4号溝状遺構A-A'断面(西から)

PL.12

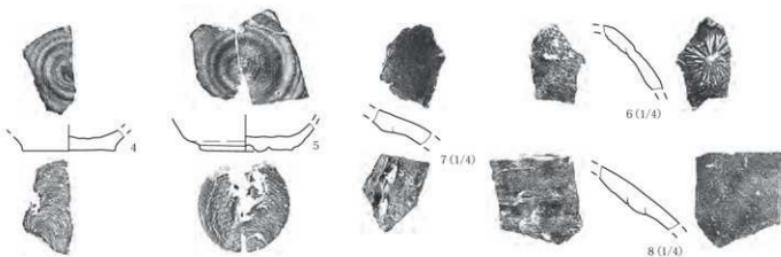
I-5区1号溝



I-5区2号土坑



I-5区2号井戸



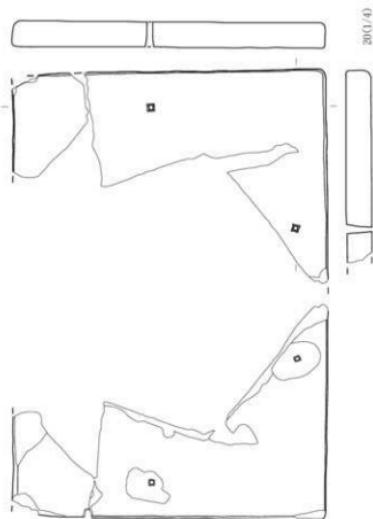
I-5区道構外



I-5区1号溝、2号土坑、2号井戸、道構外出土遺物(1)



0 1.4 10m



PL.14

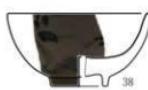
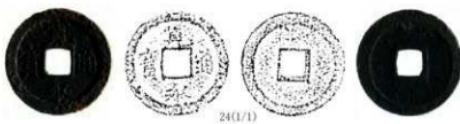
I-6区1号井戸



I-6区遺構外



II-9区1号土坑



0 1:1 2m

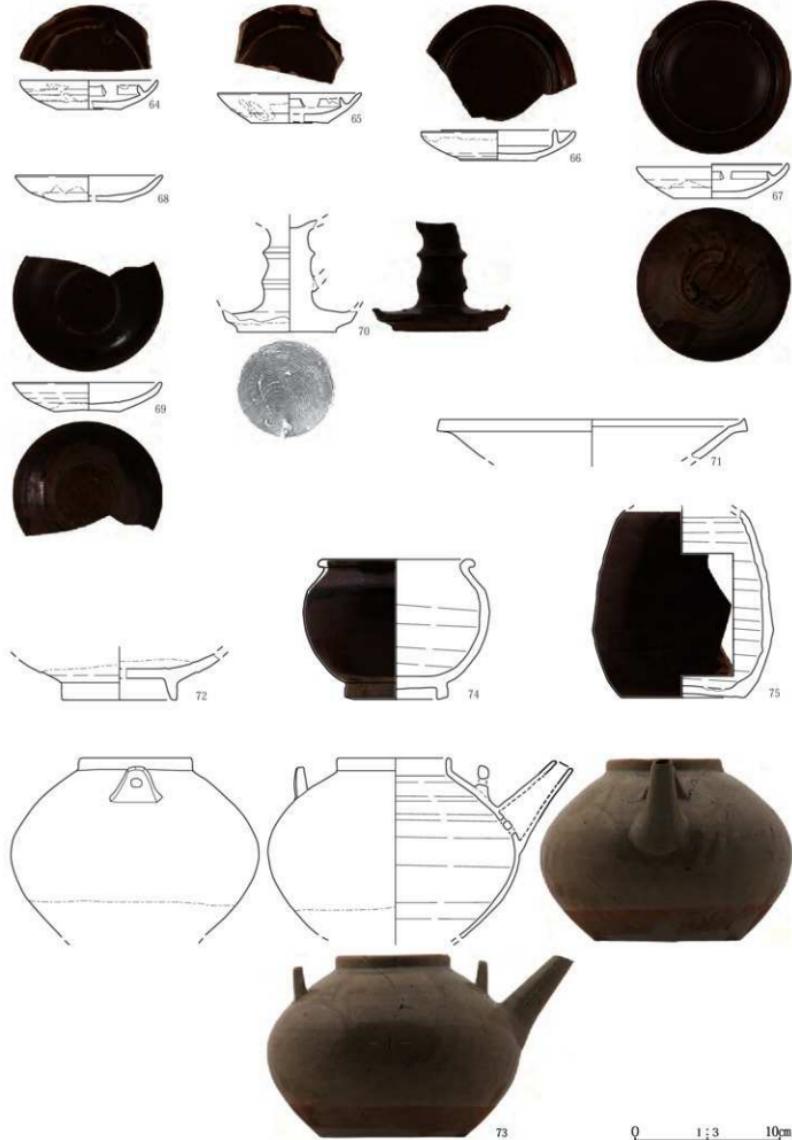
0 1:3 10m

I-6区1号井戸、遺構外出土遺物、II-9区1号土坑出土遺物(1)

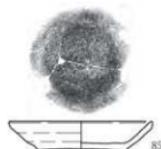
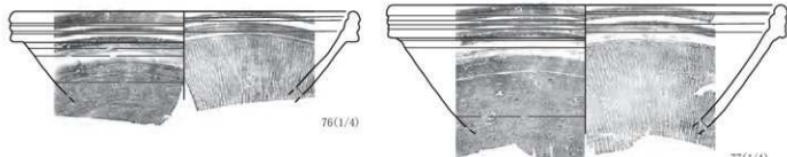


II-9区1号土坑出土遗物(2)

PL.16



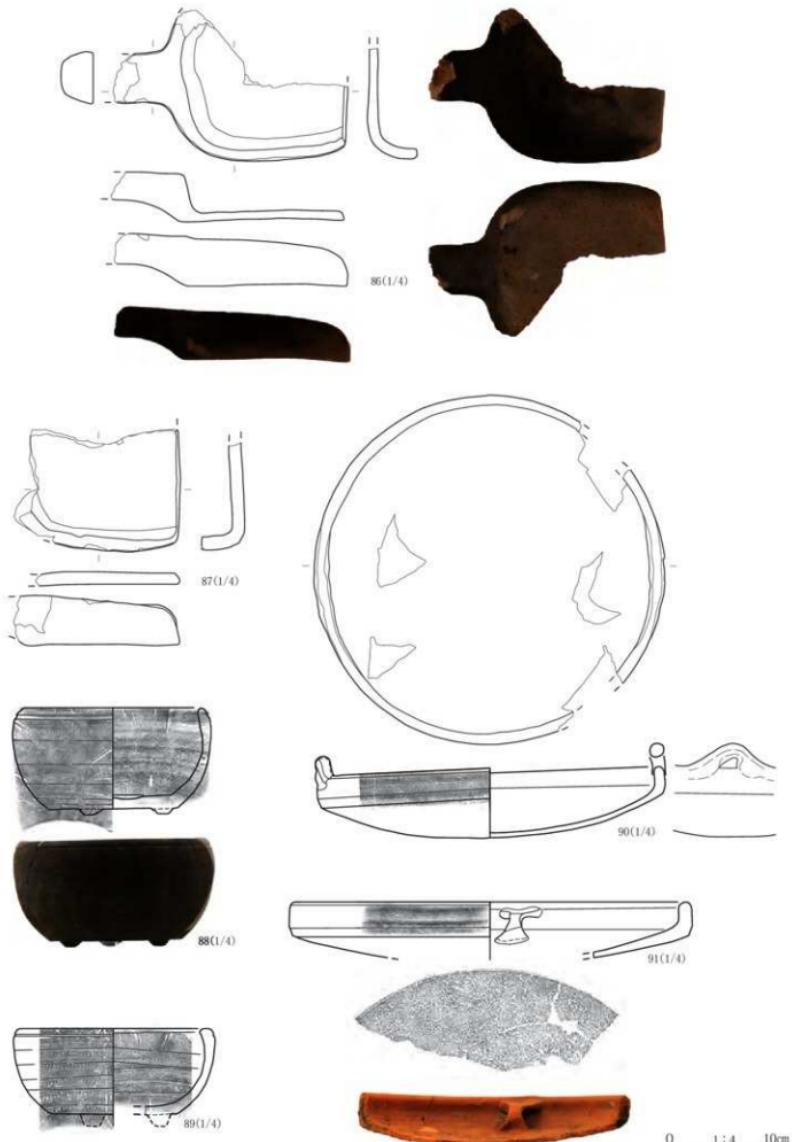
II-9区1号土坑出土遗物(3)



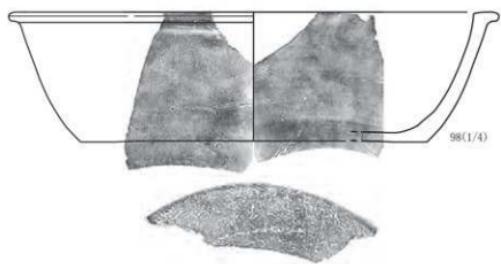
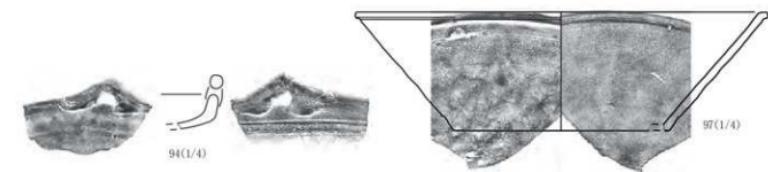
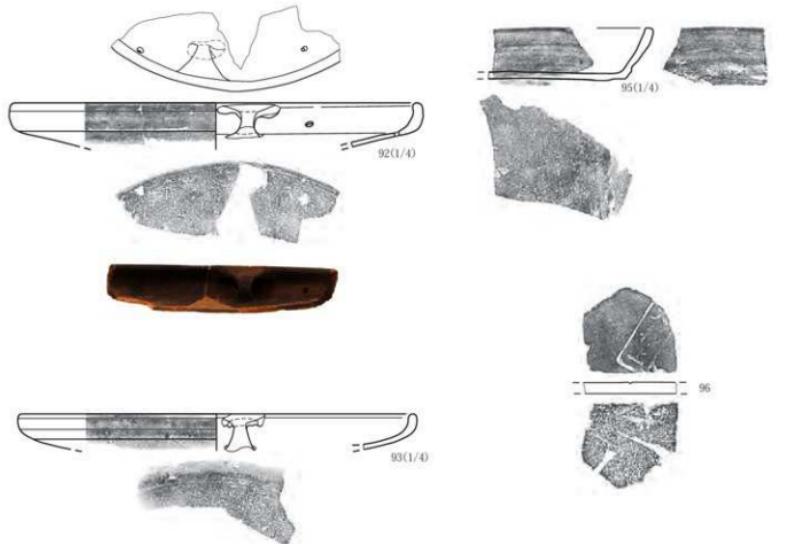
0 1 : 3 10cm
0 1 : 4 10cm

II-9区1号土坑出土遗物(4)

PL.18



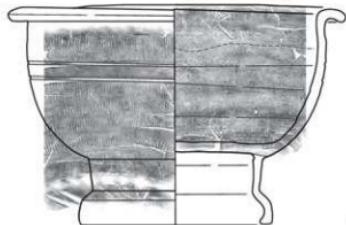
II-9区1号土坑出土遗物(5)



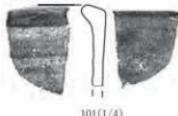
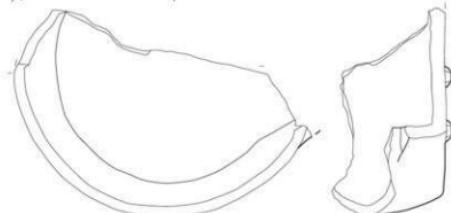
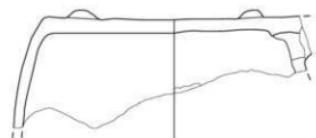
0 1 : 3 10cm
0 1 : 4 10cm

II-9区1号土坑出土遗物(6)

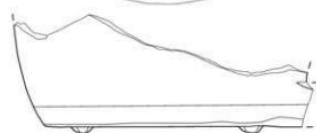
PL.20



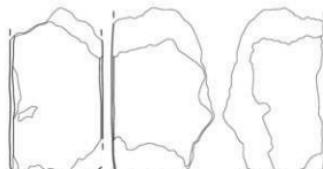
99(1/4)



101(1/4)



100(1/4)



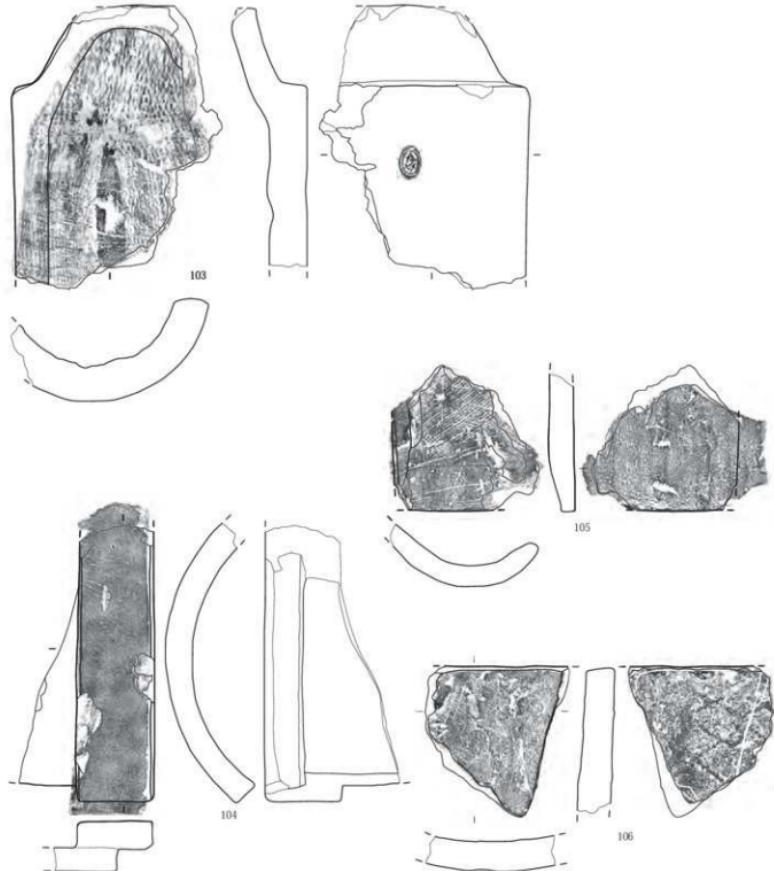
102

0 1 : 3 10cm

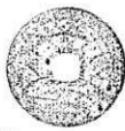
0 1 : 4 10cm

II-9区1号土坑出土遗物(7)

II-9区1号土坑



II-9区道横外



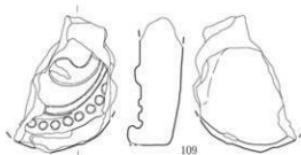
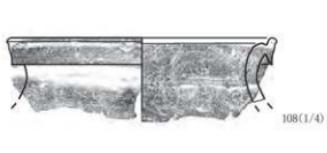
107(1/1)

0 1:1 2cm
0 1:3 10cm

II-9区1号土坑出土遗物(8)、道横外出土遗物

PL.22

II-10区 1号土坑



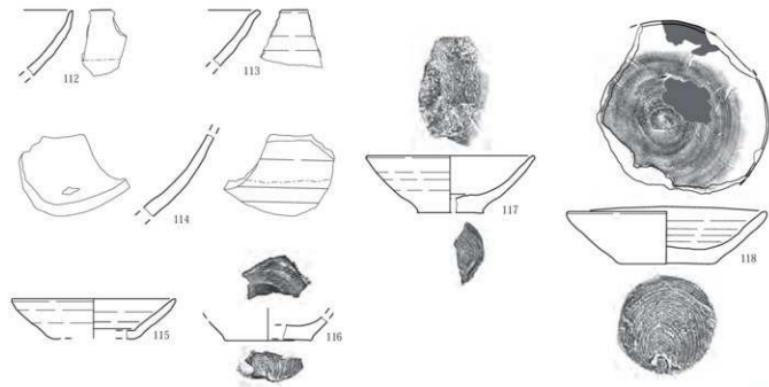
II-10区 2号土坑



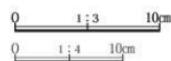
II-11区 1号井戸



II-11区 2号井戸

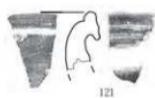


II-11区道構外



II-10区1・2号土坑、II-11区1・2号井戸、道構外出土遺物

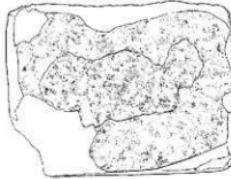
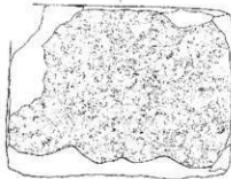
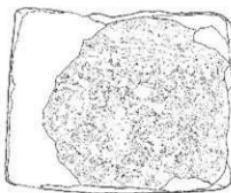
III-6 区道橋外



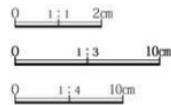
121



123(1/1)



122(1/4)



III-6 区道橋外出土物

報告書抄録

書名ふりがな	せらだかんごうしゅうらくいせきさん
書名	世良田環濠集落遺跡(3)
副書名	(主)大間々世良田線(世良田工区)社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	一
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	711
編著者名	高島英之
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20221019
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	せらだかんごうしゅうらくいせき
遺跡名	世良田環濠集落遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたせらだちょう
遺跡所在地	群馬県太田市世良田町
市町村コード	10205
遺跡番号	10052
北緯(世界測地系)	361555
東経(世界測地系)	1391642
調査期間	20160401-20160430
調査面積	442.700
調査原因	道路建設
種別	集落
主な時代	中世/近世/近代
遺跡概要	中近世-掘立柱建物1+溝3+溝状遺構1+土坑43+井戸5-陶磁器+土器+五輪塔+錢貨
特記事項	豊富な近世末期の陶磁器類 世良田環濠遺跡は、上野国を代表する中世荘園である新田荘の中に位置する中世環濠集落の遺跡であり、付近には新田氏の居館と伝える新田館跡があり、環濠内には鎌倉時代前期の豪族である得川義季の館との伝承がある總持寺館や、中世には北関東きっての名刹であった長楽寺を内包している。今回の調査では、世良田交差点の東側部分と南側部分において計7区画の調査区を設定して実施された。検出された遺構は、中近世の掘立柱建物1棟、溝3条、溝状遺構1基、土坑43基、井戸5基で、主に近世のものが主体であった。本遺跡は、市街地化が進んだ地域の中に所在しており、しかも今回、調査の対象となった地域は、平成25・26年度の調査箇所と同様、直前まで宅地として利用されていたため、ゴミ穴などが沢山掘られるなど、現代の擾乱が数多く、遺構の残存状態は、必ずしも良好ではなかった。また、それぞれの調査区が狭小であるため、遺構の全容を調査出来たものは多くなく、多くの遺構が調査区外までかかっていたり、部分的に破壊されたりしていた。各区とも遺構確認面の起伏が甚だしいのが特色である。今回の調査では、中世環濠集落に関わる明確な遺構は検出されなかったが、近世末期の大量かつ多種多様な陶磁器が出土し、それら物資の流通と購買を可能にした、当時の豊かな地域性を窺うことが出来る。
要約	

公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第71集

世良田環濠集落遺跡(3)

(主)大間々世良田郷(世良田1区)社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点)
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和4(2022)年10月17日 印刷
令和4(2022)年10月19日 発行

編集・発行／公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下道田784番地2
電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>
印刷／株式会社開文社印刷所

付図 世良田環濠集落遺跡 平成 25・26・28 年度調査検出遺構全体図

X-29,650

